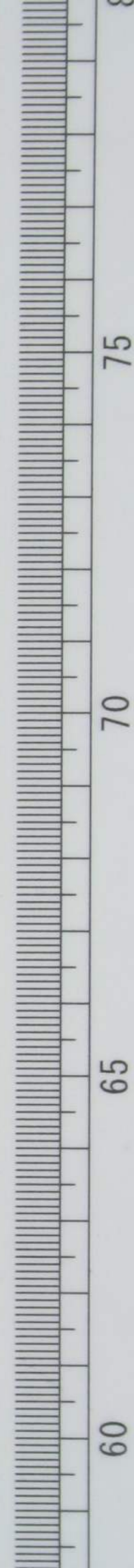


本
文
D2



60

65

70

75

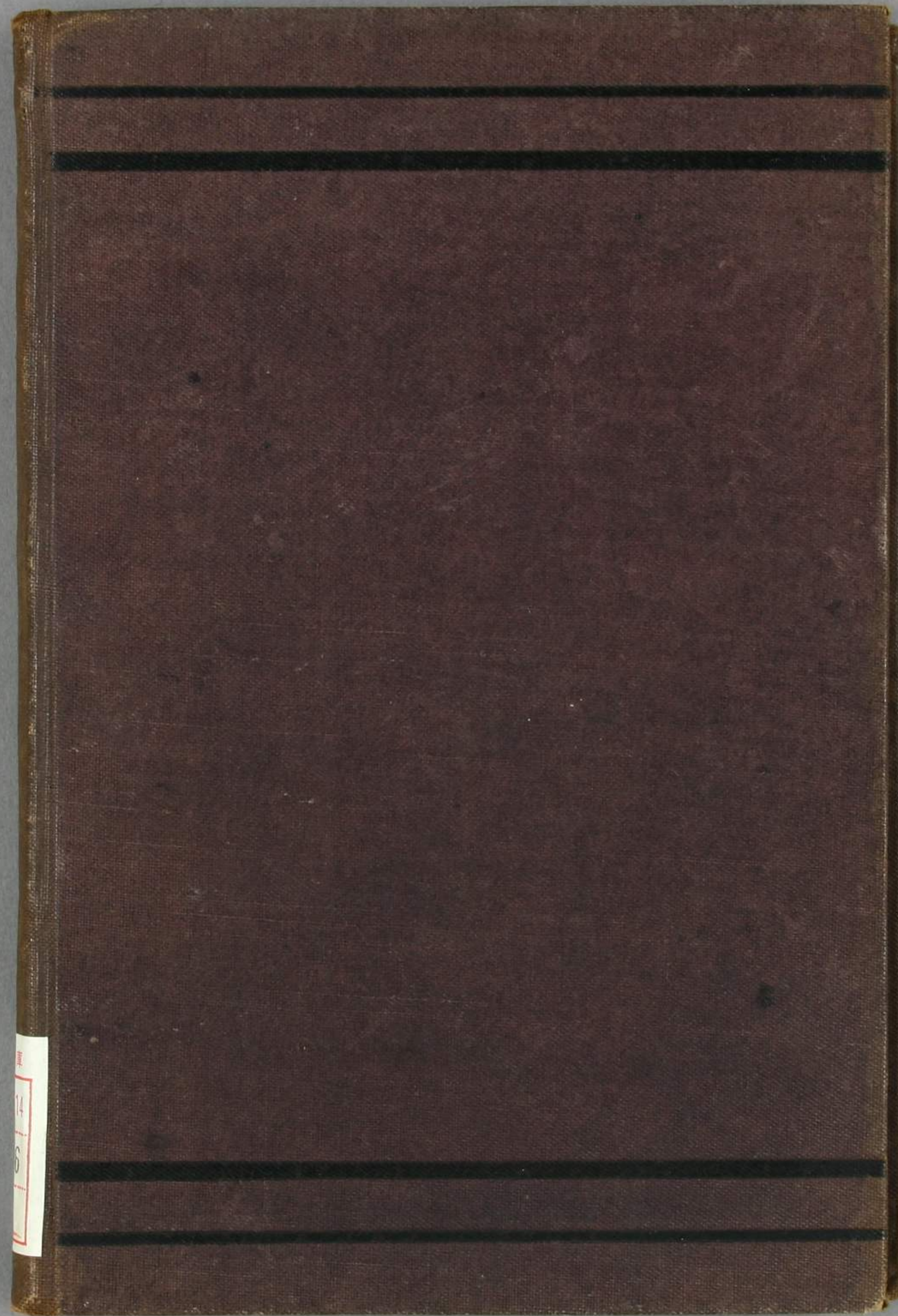
80

日本文章論

本間文庫

文庫 14

D 286







內閣總理大臣 伊藤伯題辭
東京學士會院學士 川田剛評
英國大學法學士技藝士末松謙澄著

日本文章論

附 歐文沿革考
井上伯演說
日報社說

版權所有
文學社



文庫4
D 286

致





方家

去秋山人
書



日本文章論目次

第壹篇	言語の性質	壹
第二篇	假名發明の來歴	十三
第三篇	假名文衰退の源因	三十
第四篇	綴字法非難の答	四十六
第五篇	文章の体裁	六十四
第六篇	假名綴り書き方の上	七十九
第七篇	假名綴り書き方の下	九十三
第八篇	羅馬字書き方の上	百八
第九篇	羅馬字書き方の下	百十七
歐文沿革考一	英吉利の部	百三十三
同	日耳曼の部	百四十四



同	三	伊佛魯の部	百五十八丁
附載			
井上伯演説			百七十五丁
日報記者の説			百八十七丁
文章改良の目的			百九十六丁

日本文章論

英國大學 法學士 技藝士 末松謙澄 著

第一編 言語の性質

予の曩に歐文沿革考三編を著して、歐文の變遷を略述す、(文章論の次)讀者亦以て西洋文物の時と改良し、孜孜怠らざるを知るへし、我日本の如き、文字の用を知りてより以來、已よ千有餘年なり而して猶未だ今日の體裁たるを免れざる、憾なき能はざるなり、蓋し言語に重音、單音の二種あり、文章の言語を寫すものなり、故に言語已に重音の別ある時、則ち書上の言語亦重音の別あかる可らず、西洋言語の、重音語にして單音語を交ゆ、支那言語の、全く單音語なり、予

全編論旨在此一句

重單優劣在語尾有
變化與否此亦全編
論旨所關讀者須三
復致意焉

解釋重單二義重是
主單是客

か聞く所を以てすれハ支那を除くの外世界上他に單音獨
用語なしと云ふ故に西洋書上の語ハ重單の二音相交り支
那書上の言語ハ獨り單音語を用ゆ重單交用語も進歩せざ
れば言語文章の美を成せると能はず單音獨用語も進歩す
れハ大に見るべきあり然れども單音語にハ語尾の變化な
し有れば則ち單音にあらす故に二種言語の性質を論ずれ
ハ重單交用語の單音獨用語ハ勝るや遠し我日本語ハ重單
交用語なること西洋言語と同じ故に性質を以て論ずれハ
日本語ハ支那語に勝れり苟も之を進るに其法を得ば日本
語の將來に望あるや明かり
何をハ重音語と謂ふ數音合して一語を爲すもの是なり何を
ハ單音語と謂ふ一音にして一語をなすもの是なり支那

文字の今音悉く單音語とあらざるなし偶にハ二音を合し
て一音となせるものあり譬へハ之於若くハ之干を約して
諸となす子張書諸紳と記せる如し又蓋ハ何不若くハ奚不
と同き是なり日本ハ存する吳音漢音と稱するもの亦皆一
音にあらざるなし其入聲語譬へハ「カク」若くハ「セツ」等の音
ハ一見すれば二音語の如くなれども其實然らず試に之を
羅馬字にて綴れば「カク」ハ元 kao の一音にして「セツ」ハ二別
音より合成したる者とあらす「セツ」ハ seth にして「カク」ハ
の二別音より合成したるものにあらず既に北京の今音に
てハ入聲の字ハ語尾の「ク」ハ「ッ」さへ全く消滅し復た入聲の區
別も無きに至りぬ之に反し日本語にハ數音を合して一語
を爲すもの比々是なると殊に語尾の變化に著るし勿論重

非知此問苦心者不

單音の差の、語根^{サート}上未だ語尾の變化を付せざる者を云ふに
も存せれども語根上のみの事なれば、重音の利益の甚だ多
からず、唯單音語なれば、萬般の事物、強て一語を以て各々之
を表せんとすれば、音聲に限りあるを以て、勢ひ同音の事物
を出すの多きにより、數語を聯貫して、始めて一事一物を表
せざるを得ざるとあり、重音語の利益の、此弊少きまてに止
まれども、語尾の變化に至りて、其功大に顯れる、日本語の語
尾の變化あり、其の性質の支那語に勝れるや知るべきなり、
余の素々支那語支那文を輕蔑するにあらず、其實支那人が、
單音語にてありながら、其文章に彼が如き美を致せしり、感
ずるに餘ありとす、雖然、單音語の文章の、警發奇抜の功用に
富み、精細緻密の構造に乏し、強て精細緻密を求むれば、文章

能辨之

詢然詢然假名文之
妙用存乎此

錯雜して、其美を失ひ、遂に解す可らざる者あるに至る、故に
單音語の文章の、常に粗魯幽味に傾き易く、其進歩に自ら限
あり、其故何となれば、重音語に於ては、同一語にても、語尾
の變化(希臘日耳曼の如き語頭にも變化を加ふる格あり)に
因り、意義の變化を示すとを得るのみならず、語數を増加せ
るにも變化より、一々語格を定むることを得ると雖ども、
單音語に於ては、語勢を變ずる毎に、一々別語を挿入せざる
可らず、挿入せざれば、則ち語勢を變ずるまに能はず、故に意
義幽味に歸す、是を以て變ずること愈々多ければ、挿語愈々
多らざるを得ず、而して挿入する所の語、亦皆語根のみにし
て、語格を示すまに能はざれば、愈々精密を求むれば、愈々錯
雜し、遂に解釋を可らざるものあるに至るなり、彼交詢雜誌

百三十六號に論述せる所の防風禁伐山林風致禁伐山林等の語も、亦此類なり、故に太宰春臺先生も、脩剛阿彌陀經に序して、

釋典無文、釋氏之徒、以其文爲文、不取也。夫以言語喻人者、務詳、言語之詳、必入于俗、釋氏教爲愚婦愚夫而設、喻愚夫愚婦、以言、欲其不俚得乎。

と云へる如く、遂に文章の詳なる可らず、俗人に通す可らずと妄想するに至れり、吾友某の、善く支那時文を屬す、始め支那語學を東京語學校に學び、後ち支那に久く在り、今英國に來り、英語を學ぶ、嘗て予に語て曰く、今よして洋語洋文の構造の妙の、支那語支那文の遠く及ぶ能はざるを悟れりと云へり、夫れ支那時文の、之を古文に比すれり、精細の點に於て

の、則ち大よ進めりと謂ふべし、某能く時文に通ず、猶此言を爲す、以て單音語の重音語に及さる一證となすへし、予又嘗て某と共に、試よ支那譯書を取り、歐文原書と比較し、譯文の粗魯に驚たり、夫れ文章の、必ずしも精細なるのみを以て、巧妙となすにあらすと雖も、文化愈々進めば、愈々精細の文を要す、且つや精を以て粗となすの易く、粗を以て精となすの難し、故に、重音語を以て、單音語を譯するの易く、單音語を以て、重音語を譯するの難し、歐文を以て支那文を譯せると、支那文を以て、歐文を譯すると、其難易年を同じて、語る可らず、日本語の重音語として、語勢の變化に富む、其性質之をして精細ならしむることを得、彼の日本流を以て、支那書を讀むの、直に文章を爲ることを得るも、支那流にて、日本文を讀

八
み、直ちに文章を爲その難きも、亦之れに因るなり、是れ日本語の性質の、支那語に勝れりと云ふ理なり、果して然らば、日本語、日本文、固より宜しく、獨立の進歩を謀るべきなり、勿論予が文章の精細と稱するの、文法の精細を指すものに於て、字形を指すにあらず、其實字形の極めて省略に従ふべし、譬ば一線二線にして、事足るもの、四線五線の煩を省き、力めて作文の便利を謀らざる可らず、愈々文章の精細を求むれば、其要愈々切なり、詞を換て之を言へば、重音語の目的とする所の、疾く點畫形象文字の煩を避け、綴字法に従ふ可しと、云ふに在るなり、
單音語の、音聲に限りあるにより、之を文章に寫すに當り、若し簡短の形のみを以て、音聲を寫す工夫をなす時の、同音

九
同形の語の、影しく出て來りて、文章をなすと殆ど難ければ、已むを得ず種々の點畫形象を以て、之を別つの工夫を爲さざる可らず、支那文字是なり、重音語の、一語中にも變化あれば、點畫形象にて、間に合はず、勢ひ綴字法を工夫するに至るなり、然るに點畫に限りあり、形象は萬狀なり、一切の事物、悉く簡略の字を以て、之を表すること能はず、勿論草昧の世に在ての、纔に結繩削木の用を知るに過ぎず、文化少く進むに至ても、何の國たりとて、始めの物象に據り、極めて簡短疎漏なる思想を交換するに過ぎざれば、此時代に在ての、固より未だ綴字の法あるを知るべき道理もなしと雖も、單音語國に於ての、文化既進、文字の用を増加するの日に至ても、上よ云ふ如き情實あるが爲先、綴字の考へ出て來ら

十
そ、出てたりとて、用を爲さそ、一新語起れば、一新字を制せざる可らざるに至る、勿論之を制するに、既有の字を種々に組合せたるもあるへし、又最前の音通を以て、音聲同じき數事物を表するに、一字を以てしたるも、其混雜を感するよりして、別字を制したるも多かるべし、支那文字の斯る情勢にて起りたる者なれば、支那語に適當なるへけれとも、決して重音語に適當せず、重音語の綴字法を用ふるにあらざれば、決して満足の書方を得ず、故に西洋諸國の、夙に形象文字を去りて、綴字法に従へり、日本語の、重音語なるも、支那字を以て、日本語を寫さんとするも、到底孔方圓柄の談たるを免れず、其纒に寫し得るの、先支那字を語根として据ゑ、之に日本語尾の變化を付するに在れとも、是れ實の不都合千萬の

舉證以論語尾之變化妙甚

書方なり試にきたる「きたれ」の二語を、支那字を以て書せんに、來とのみ書して、肝要の語尾變化を示すと能はざるに、より來る「來れ」と書せざる可らず、而るに來字決して「きた」と云ふ字にならず、是れ支那人が其單音語なるを以て已むを得ず、發明して用ふる所の來字を受續き、我語根を棄て、支那意味の半を割取り、字形の猶舊の如くし、之に我語尾を加へたる者なり、徒勞を重ねる者と謂ふべきなり、其の上「來れ」を「らい」と讀み、此所にて「きた」と讀ざる可らず、此區別を分明ならしめんとするに、「きた」と假名を付せざるへからず、是れ實の文章を二重に書くに同じ、又語尾の變化を付せざる字にても、假名を付せされ、下字に聯讀せられて、大

に意味を變せらるゝの恐ありて之を附するあり「後ち」先き」等の字是なり、後世の和學者の假名二字の漢字に送り假名を付す可らそなど云へど夫れにての實際に不都合あると多けれの墨守し難し是れ「の」さ等平易至極の音に代るに後先等の字を以てする者にて、已に道理も適はず之に假名を付するに至て、例の二重文章となる、此數字ころ普通の文字なれ、千萬例を擧るも皆然り、支那文字の實に世界無比の困難字体なれども前にも云ふ如く、支那も在て、則ち已むを得ずして然るものなるに、日本人の之を受續きて、之よ尾を付け羽を付けて、愈々之を困難ならしめ、我言語の綴字言語なるを忘れんとす、凡そ天下の愚復た之を過るゝなかるべし、吾人現に自ら此愚を働けり、愧べきの至りなり、去れ

坂本塞源論有確據

釋田氏口傳譯以漢文邦人言語化為漢樣其存本來面目者獨歌謠而已今徵古言以歌謠先獲吾心

の文字の困難、姑く置き、性質上より論するも、日本語の之を書するに、綴字法を以てせざる可らざることを、復た疑ふ可らざるに似たり、

第一編 假名發明の來歴

日本語の出處、如何なるにせよ、其發達の頗る早くして、文學の用を知らざる前に、既に一體裁を成し居りし者の如し、特に歌謠上に於て然とす、泰西諸國の文學起源を見ても、未だ書契あらざる言語が、始めて文章の姿態を爲す、歌謠にして、初め、口より口に傳へ、其間に、増補もし、改正もし、人智や、進むに至て、遂に文字をも發明し、初め、粗漏の思想を交換するに用ひ、漸次に擴充て、歌謠を記し、散文體をも作る、よ、至るを例とす、是歌謠の語勢、軟滑にして、吟誦授受に便

說當日情狀瞭如指掌

ち、れ、の、書、契、以、前、の、世、に、於、て、の、其、發、達、の、散、文、体、に、先、づ、も、固、
 に、故、あ、り、然、ら、ば、則、ち、日、本、語、發、達、の、先、づ、つ、歌、謠、上、に、顯、れ、た、
 る、も、怪、む、に、足、ら、ず、既、に、し、て、人、智、も、頗、る、進、み、加、ふ、る、に、支、那、
 書、の、傳、來、に、遇、ひ、た、れ、ば、特、に、文、字、の、用、を、感、ず、る、に、至、り、し、者、
 の、如、し、然、る、に、支、那、の、單、音、語、に、し、て、日、本、の、重、音、語、な、れ、の、到、
 底、支、那、文、字、を、直、寫、し、て、我、言、語、を、文、字、と、し、る、と、能、い、さ、れ、ば、
 種、々、の、經、験、を、經、た、る、後、ち、遂、に、一、種、の、文、字、を、構、造、し、綴、字、法、
 を、發、明、し、た、る、者、の、如、し、假、名、文、字、即、是、な、り、最、も、世、に、神、代、文、
 字、と、云、ふ、者、あ、り、和、學、者、の、說、の、如、く、な、れ、の、日、本、文、學、の、發、明、
 の、極、め、て、古、と、雖、も、其、考、證、未、だ、充、分、な、ら、ず、清、原、國、賢、と、云、ふ、
 人、慶、長、己、亥、と、作、れ、り、と、云、ふ、日、本、紀、跋、に、聖、德、太、子、始、以、漢、字、
 附、神、代、之、文、字、傍、於、于、爰、吾、邦、人、漫、得、識、量、典、經、之、旨、と、あ、れ、と、
三二

神代文字有無學者
 聚訟不已此論一出
 原被皆可箝口而退

も、未、だ、嘗、て、斯、る、書、籍、の、あ、り、し、を、證、明、せ、し、を、聞、か、ず、勿、論、予、
 の、全、く、神、代、文、字、の、說、を、虚、妄、と、云、ふ、に、あ、ら、ず、日、本、の、國、た、る、
 實、に、舊、け、れ、の、或、の、一、種、の、文、字、ゆ、り、し、こ、と、も、あ、ら、ん、併、し、假、
 令、之、あ、り、し、も、其、用、の、蓋、し、世、間、に、偏、ら、さ、る、の、み、な、ら、ず、假、名、
 文、字、發、明、時、代、に、至、ら、さ、る、以、前、既、に、夙、に、其、用、を、失、ひ、居、し、に、
 相、違、な、け、れ、ば、其、間、互、に、關、係、あ、り、と、も、覺、え、ず、故、に、神、代、文、字、
 說、の、姑、く、之、れ、を、論、せ、ず、し、て、可、な、る、が、如、し、
 僕、が、見、る、所、を、以、て、す、れ、ば、支、那、文、字、傳、播、後、久、し、く、日、本、に、國、
 語、を、文、に、す、る、の、法、な、く、事、に、因、て、の、漢、文、体、を、用、ひ、た、り、と、雖、
 ど、も、凡、ろ、國、語、あ、る、以、上、の、之、を、文、に、せ、ん、と、す、る、の、念、を、生、じ、
 又、之、を、文、に、せ、さ、る、を、得、さ、る、必、要、を、生、ず、る、者、な、れ、ば、當、時、の、
 日、本、人、も、此、境、界、に、達、し、た、る、に、如、何、と、せ、ん、未、だ、日、本、文、字、を、

有せず、而して既に支那文の整然章を成せる者あれば、規模を茲より取らんとせしに、前にも云ふ如く、日本語の重音語にして支那語の單音語なれば、其間非常の困難を感じたる者の如し、安萬侶が古事記の序に

引證的確

然上古之時、言意並朴、敷文構句、於字即難、已因訓述者詞不逮心、全以音達者事趣更長、是以今或一句之中、交用音訓、或一事之内、全以訓錄、即辭理叵見、以注明意、

と論せる如き、以て見るべし、古事記以前の書世に傳らされば、其体裁の詳り、得て知る可はずと雖も、當時日本語を文にするに、種々の雜体を用しと明なり、支那字の意味より之を排列して、邦言に當るも、ありしならん、而も此等の日本語の屈曲法を寫すと能はざれば、詞以て意を盡すと能はず、故

摘録古事記序文層々解釋意到筆隨

に因、訓述者詞不逮心、と評せるなり、意味に關せず、字音の之により、之を排置して、邦言を寫したるもありしならん、而して此等の一字一意の支那字を以て、數音一語の邦言に當るが故、冗長錯雜言ふべからず、故に全以音達者事趣更長、と云へるなり、又支那文と日本語とを全く其排置の順序を殊にせるも、當時困難の一なりしならん、後世にてこそ、言語の各國固有の組織あれば、書上の言語も、其順序に従ふべきの理の分りたれ、美文美語と思ふに、唯支那文字のみの世に方て、其順序を見て、是を文字の位置の正範あらんと思ふも、差して咎むべきにあらず、然るも、日本語を顛倒して、支那語の順序に従はんとするも、到底能はざることあり、敷文構句於字即難と云へるも、此等の意を含蓄せるからん、是皆

單音語の文字を以て、重音語を寫さんとせし致す所なり、蓋し我古書の最も吾人の参考とすべきは、古事記萬葉集の二書とす、此二書を見れば、當時の困難を推測するに足る、古事記の人の知る如く、首として支那文体を用ひ、雜體を交ふ、此書の元來稗田阿禮の暗記に出つとあれば、阿禮の暗記の、必ず日本流の讀方なりしならん、然るに文章の、首として支那文体を用ひ、言語を倒置せるの、一方にの前に云ふ如く、支那書を美文美語と貴ふの風あり、一方に於ては、未だ假名あらざるか故に、我音を一に普通の支那字にて書しては、錯雜冗長極りなきに因るならん、其弊の、ねほきみの、みことねもほしめさばをさきたまへを、天皇之御子所思者可治賜と書する類の惡文あり、然るに詞によりては、支那語にて書とべか

らざるあれば、此等の或の音訓相交り音通を用ひ、或の訓通を用ること、あまのひとつはしらを、天比登都柱と書し、くまげなす、たごよへるときにを、久羅下那洲多陀用弊琉之時と書し、ひたくちはやふのかみなりを、甚道速振神也と書せるの類あり、而して歌類の、渾て彼の全以音達者の例に倣ひ、全首皆音通字を以て之を寫す、例へば、乙女の、床の邊よ我が置きし、劔の太力ろの太力はやを、此の歌の日本武尊薨去の際の勇壯なる詞なり、今の讀者に一目瞭然の爲め支那字を交て之を寫す、袁登賣能、登許能辨爾、和賀淤岐斯、都流岐能多知、曾能多知波夜に作れるの類なり、日本紀の古事記の後に成り、舍人親王の編纂と云へとも、安萬侶の力與ると多しと云ひ、其体裁も古事記に粗同しく、漢文体を一層多くしたるも

のなれば、別に論せず、此形状と、安萬侶の云ふ所とを見て、猶當時より神代文字ありしと云ひ、作文の困難を思ひさるの説の、予之を信する能はず、

萬葉の、其收入する所の歌下、大伴家持に及ぶ、編者を知らずと雖も、考索家の、題の書方等に據り、家持ならんと云ふ人あり、或は然らん、併し予の所見を以てすれり、必らずしも、一時は大成せしとも云ふ可らず、且収むる所の歌の、日本紀古事記脱稿より、遙る以前のもの多けれり、其書方の如きり、已に從來より存せし者ありし歟も知る可らざれり、萬葉の書方の、必らずしも、一人の編纂者が、新に一風を始めたる者ども、決し難し、勿論舊き分の諸歌にして、其書方ありしならば、新き分の、之を編入するに當り、舊風に書きたるもあらん、且つ

余未見花盛氏著書
然據此所引則言古
事記日本紀寫歌謠
用一字一音即與後
世用假名同以故讀

萬葉の大成り、新しくも平安遷都以前に在り、若し家持の編纂とすれば、家持の聖武の世の人にて、舍人親王との、時を同せしともあれば、古事記日本紀編纂の日を距ると遠らず、左すれば、萬葉の書方の、猶和文未だ一定の法を得ざる時の書方を見るに餘りあり、其實萬葉の書方の、安萬侶が謂ふ所の因訓述以音達との、二者の例殊更多ければ、其書方の古きを見るに足る、然るに柴田花盛氏の、のなのしるべ卷一に「こじきにはんきなどのうたは、かな(音通字)のとなるべしかなどのみ云ひての紛りしにてのせられたるがゆゑに、ことばのころをさとりうれり、ときがたかることあらさりしを、まんえふこのかたの、かんくん、きくん、たはふれがきをまじへてつらね、中略しだいにものことばにとほざかりひ

者易領解至萬葉則
雜用音訓義訓非通
漢文者不能解不若
古事記日本紀云々
蓋單就歌謠之論以
辨國文優於漢文何
謬之有

著者曰ク花盛氏が
萬葉以前ニハ完全
ナル綴字法アリ萬
葉ニ至テ之ヲ打破
リシ如クニ論スル
ハ正鵠ヲ得タリト
云フベカラズ
古事記敘事處交用
音訓義訓至歌謠則

ふさをきなのかみよもしのときごともうけぬひとがらに
はべり」と論じ、大に罪を萬葉に歸し、従前の良法を破却した
る如くに見するの、予之に服せず、況や古事記に神代文字を
用たる證あきらかに於てをや、若又古事記の歌の書方の、今日よ
り見れば、綴字法に近きが故に、萬葉假名に勝れりと論じ、又
萬葉編纂の、悉皆古事記以後に在りしと、假想するも、當時に
在て、萬葉編纂者が、之を學ばさりし、深く之を咎むるに足
らざ、其故の音通字の排置の、錯雜冗長にして、實用に適せず
訓讀を雜へ之を省略せしめ、却て安萬侶自身が支那文体を
元とし、音訓を交用して、古事記を作りしと、其殊なる所を見
されば、あり、抑萬葉の書方を見るに、支那流に文字を倒置す
るといふ古事記よりも少し、是れ歌文の、歴史文と違ひ、語數の

專用一字一音今舉
敘事與歌謠十把一
束曰萬葉書方倣漢
文處少於古事記大
誤
著者曰ク萬葉書法
ニいえどナ雖言ニ
作りしらずナ不知
ニ作ルノ類ハ專ラ
一字一音ヲ用ユト
云フ可ラザル証ナ
リ
當日學者許多苦心
寫得詳悉

伸張殊に肝要なるより、倒置を多くすれば、丸で歌意を失
ふに至ると多きに因るなるへしと雖も、「いえど」を「雖言」に作
り「しらず」を「不知」に作り「あらん」を「將有」に作るの類の、仍支那
語の排置法に迷へる者なり、然るに支那文体益々少ければ、
國語を直寫すること、益々多らざるを得ず、音通字、義通字、種
々の工夫を廻さざる可らず、故に萬葉の書方を見れば、愈々
當時の人の、苦辛を見るに足る、今試に、日本人が、始めて支那文
字を學び、遂に支那文字を用て、日本語を寫すに至りたる順
序を想像するに、初めの、勉めて支那音を學び、同時に、之に適
當の、日本譯を付する、よ苦辛したるな、今、已にして日本語
を、文字にせんと欲するに至りたりとせんに、事物の名稱の
如き、直に支那字を用るとを得れば、譬へば鳥と書して、「と

り」と讀せ、犬と書て「いぬ」と讀するとしたる所で是にて、未
 だてゝをばの區別の付ざるに苦む、支那字中にて、音相近を
 求め、字義に關せず、乎爾波等の字を、字下に附加する發明を
 なしたるならん、動詞も「を」も「ふ」も「き」も「か」云ふ如き、直
 に思聽等の字を用るとした所まで「を」も「は」も「す」も「か」すなどの
 不思不聽と書ても、夫のみにては、我、屈曲法を悉すと能ざれ
 ば、語をなさざると多きより、てにををとは同様、普通字を附加
 して、屈曲を示す發明をなしたるならん、板祝詞文に、名詞
 動詞共語尾の變化を表する字の、普通字を取れるに、相違
 なけれども、猶小字まで右手によせ書けるの、一步の進を爲
 したる者との知られける、然るに其中に、日本固有の語に
 て、支那字中に、如何に穿鑿しても、見出さざるものありて

支那六書象形居其
 一嘗見亞墨利加古
 書有以畫記事換文
 字者我南部民多不
 識字所謂南部曆者
 畫物象換文字畫火
 與雁爲彼岸是也西
 哲曰人能使他人知

是に、大に閉口し、遂に不得已の窮策よりして、普通訓通種
 々雜多の字を取交せ之を書する方便を工夫したるならん、
 「のみさひ」を神左備と書き「あぢむらさきはき」を、味村左和伎と
 書くの類、皆是なり、其方法の則、極めて拙なりと雖も、短簡文字
 の綴字法を知らざる世に在て、實に己むを得ざりしなら
 んと思へば、今日に在て、其拙を笑はんより、寧ろ其苦心を
 憐まざるを得ず、尤も僕異境萬里に在り、参考の書に置けれ
 ば、誤謬の見、大方の是正を待つべし、併し此見、雖不中不
 遠と自信す、西洋學者が、昔埃及の増侶が用しと云ふ形象文
 字の構造を説く所を見るに、埃及文學の、先づ形象を寫して、
 事物の意義を寫し次に、其字の本意に關せず、普通に取て、
 種々の意義を表出せし者の如しと云ふ、早く譬て云ひ、空

了我意旨者有四曰
以手形容曰口舌曰
繪畫曰文字然則繪
畫即文字之祖也

中よ光を放て大聲を爲す、之を名けて「らい」と云ふ、因て電光
と大鼓の圖を畫き之を「ふい」と讀む、頸脚共に短き鳥あり、名
て「がん」と云ふ、因て短頸短脚の鳥を畫て、之を「がん」と云ふ、是
れ「がん」と「らい」とい、各々一物の物なり、然るに「かんらい」(即元
來假に俗音に従ひがんらいと讀む)と云ふ辭ありとせん、
之を圖するに方なし、因て電光と大鼓の圖と、短頸短脚の圖
とを描き「らい」と「かん」との本義に關せず、其音の相近きに取
り、之を「がんらい」と讀すと云ふ如き、工夫なりしと云ふ、其困
難想ふべし、

我が日本文の經歷、殆ど之と彷彿さり、然るに上に云ふ如き
体裁の書方にて、第一に、音讀字訓讀方の混雜あり、第二に
の字下附加字(即後世の送り假名に當る所)の規則も、未だ整

はず、且つ倒置語も交れるにより、隔靴搔痒のみ多くして、到
底人心を満足するに足らず、音讀字のみ併列する工夫もあ
りて、此分のやゝ綴字法に近ければ、語勢を寫すに、他の方
法に勝れると論を待たずと雖も、是亦前に云ふ如く、錯雜冗
長にして、實用に適せず、於是乎、人心始めて簡短の書方を願
ふに向ひたるが如し、假名の發明、實に其結果なり、傳へ云
ふ、いはは弘法大師、片假名の吉備大臣の作なりと又之を
整頓して、五十音の圖を作りたるに、梵字の整頓法に據ると、
柳原芳野先生の論せり、成程音を集めて歌となし、所謂いろ
は歌とし、又いろは文字の簡易体を作りたるに、弘法にあら
そと云ひ難く、支那字形を截斷して、片假名としたるに、吉備
にあらずと云ひ難く、五十音の圖を作りしに、吉備の弘法か、

將た他人の知らざれど、梵學の思想ありし人にあらずと云ひ難し、(其實かなと云ふ名稱も假名又の假字と牽強の宛字なれば、或の梵語の「ら」の轉訛かも、知る可かたず、予が聞く所にては、梵語に文字を「ら」と稱す、例へば「K-Kara」の「K」音の字にして、「A-Kara」の「A」音の字なり、又極單にして、語尾屈曲すべからざる語をも「から」と稱せんと云ふ、然るに、希臘語にて「ら」音と「な」音との多く相轉訛せしとありと、洋書に見ゆれば、梵語にて「から」を「のな」と云ひし時ありしも、知る可らず、否らすとも、日本人が、唐等の字音を避る爲め、「か」をさけて、「か」をせしかも知る可らず、然れども假名字の發明の、一人一已が一、朝突然と思付たるに、こゝらさるべし、英人ハトー氏の、能く日本の事實に通ず、氏亦假名の一朝一夕の突出よあら

説入本題筆力扛鼎

さるべしとの説を、嘗て予に語れり、之を要するに、假名の之を整頓して、字數を限りたるに誰なるにせよ、其元の單音語の文字を以て、重音語を寫すの不便利を厭ひて、簡短の書方を搜索したる人心の結果と云はざる可らず、西洋學者の説に據れば、羅馬字の、遠く埃及の形象文字に出づ、フィニシヤ人、埃及に交通し、文字の有用を悟りしに、形象文字を以て、其國語を寫すに不便極りなければ、其中より若干數を拔萃し、形象を變じて、文字となす、其後各國にて、多少の改正増加こそいなし、たれ、希臘に入り、羅馬に渡り、今日の西洋に傳播し、遂に今日の字態をなせりと云ふ、日本假名發明亦甚だ之に似たり、蓋し重音語國に於ては、自然の勢然らざるを得ざるなり、亦以綴字法、必要の理由を見るに、足る、

第三編 假名文衰退の源因

假名文字の出現の、日本の一大發明と云ひざる可らず、今よりして之を論すれば、其組立に幾分の遺漏あるに、相違なけれども、兎に角に、簡略の文字を以て、我重音語を寫す一法を得たるが故に、速に世人の信用を得て、夙に粲然可觀の一体裁を成せしと、王代の遺書を閲すれば、明なり、然るに爾來少も、其改良を見ざるのみならず、却て衰退の姿あるの、抑々何ぞや、蓋し源因の重なる者の、第一に、支那學の大流行に在るべく、次は中世文字の一般に凋落したるに在る可しと雖も、此等の到底之を外部の障礙、即外因と見ざる可らず、其實若し我國人よして人の長所を研究すると同時に、己れの短所を改良する氣象に富ましめば、支那學の流行の、却て假名文

確論不磨

を進むるの媒介となり、刺撃物となりし歟も、知る可らず、果して然らば、假名文の衰退の、必らず外因外仍其編纂書方の上に関する源因、即内因の之をして、然らしむると多きをしる。

予が見る所を以てすれば、内因の第一は、我假名文の、べがたきにして、一語々々の首尾を見出すの難に在り、是蓋し最初、未だ假名を發明せざる時、支那の普通字を取り、支那書にて、一字一語の場所に、我の一字一音として、書列ねたる舊風を、假名發明後も、其儘に因襲し之を改るを知らざるに因る、第二の、べがたきなるが上に、支那書を倣ひ、上より下に書き下るとしたるが故に、誦讀の際、心目を勞すると多に在り、蓋し吾人の視線の、左右に達せると、上下を達するよ

作字先左而後右則

横行爲便不待論但
眼球圓體左右上下
視力均一今日便於
横而不便於豎恐不
然

著者曰眼球ハ丸ッ
凡眼蓋ハ横長シ何
如

三十二

り、廣く眼球を動すも、左右又便にして、上下に便ならず、故に
我假名文ののべかたき風にて、假令語々の首尾を見出す
に苦しますと見ても仍一語を看終るまでには、已に幾分か
眼力を勞す、眼力勞すれば、心力亦勞す、支那書の點畫の煩ハ則
ち煩なりと雖も、一字一語の組立なれど、一視線下、已に一
意を呈せるにより、之を讀むに、却て一々に點畫を數へず、
一目よして、一意を了るとを得るなり、然るにのべがたき
の假名文に至ては、いろはにはへと、一々に拾讀せざる可ら
ず、心目共々勞せざらんと欲するを得んや、其實日本語に、
殆ど高低伸縮の語調を失ひ盡したるも亦此に生せし歟も、
知る可らむ抑々文を作るに、語を分つとい、西洋とても、古代
より之れありしに、あらず、希臘の古寫本に、分語したる

借客形主

もの往々ありと聞けど未だ普通に行われし者にあらず、其
一般の通則と成りしに、實に數百の年所を経たる實驗より、
出たる者なり、此法や實に貴重の發明にして、希臘羅馬乃至
印度の古書迄今皆分語を以て、之を刊行するが故に、後進の
便利、舉て言ふ可らず、日本にても、古今集などの長歌は、句毎
に分て彫刻せるあるに、書方の少く進歩したる者と、云ふべ
けれども、遂に分語の工夫に、達せしとを聞かず、是れ全く假
名一字を支那一字と同視し、字と語との區別に、注目せざ
りしによる、其實支那の一字一語の組立なれば、却て分語法
の意を得たる者にて、就中二三別字を合せて、扁造若くは冠
として、一字と成せるもの、如き、最も然り、我假名文に、却て
假名數字を綴り合せて、一語即ち支那文の一字を作るの工

夫をなさふりし、徒に支那文体の外観に迷ふたる者、云
いさる可らず、

假名文の縦長くして、一瞥又一語を、看了し易からざる不便
利、日本にても、實際已に之に苦みたる證據、彼の淨瑠璃
長唄等の丸本に、平假名にて、幅廣の字形を發明し、力めて
一目にして、全語を看過し易き工夫をなしたるにて、明なり、
然るに平假名の片假名に比すれば、幅廣よすると易しと雖も、
元來假名の平片共に、支那字より據り、之を變通して、縦長き思
考より出來たるもの多ければ、之を横廣にすれば、字形甚だ醜
きのみならず、縦の詰まりに、猶限あるにより、全語よりし
て見れば、猶縦長にして、看下に便ならざると、通常の字形と、
大逕庭あるとなし、然が故、淨瑠璃理本等の字体に、却て世

著者曰長三洲ノ咄
ニ支那ニテモ顔魯
公磨崖ノ碑文ハ下
奔右行ニ書セリ其
他ニモ古摺字ニハ
往々此類ノ書方ア
リト云ヘリ

人の爲め賤まれし姿なりき、蓋し假名文の縦長の不便利、
支那文の上より下に奔れるを見て、文章の書方、必らず如
此なくさる可らざるが如くに、迷誤したるに、因る支那字、
却て一字一字上に付て云ふ時の、扁と造りとの勿論、其他
二字を合して、一字としたる者、よても、横に并べたる字の數
の、縦に并ひたる者に、幾倍蓰せり、日本人が之を察せざりし
の惜むへし、上にも云ふが如く、吾人の視線、左右に轉する
を自然とす、又腕先の運動も、左右に轉するを自然とす、筆を
把て字を書する、最も然り、上下にせんとすれば、腕頸より動
さざる可らず、故に支那流なれ、懸腕直筆など云ふ面倒を
生ず、此流義の決して、腕先にて左右に運轉する如くに、健な
る能はず、又人間の大概、右手輕捷を常とすれば、左より右に

草木子曰元朝行移文字漢字自前而後蒙古字自後而前畏吾兒字則橫書之然則蒙古豎書自左而及右其走上下者不止支那而已

著者曰ク蒙古字ハ元朝支那ヲ征服シタル後ニ作ル所ト聞ク果シテ然レバ其上下ニ奔ルモノ豈支那字ノ体ニ倣フニアラザルヲ必スベケンヤ

引くを健どす然る故にや予が穿鑿したる所にては文字の行の左より右に奔るを最も多しとす西洋國々の書方皆是あり右より左に奔るもの之に亞く此書方古代に猶太文あり後世に波斯、亞刺比亞文等あり上下に奔るの獨り支那文流行の境域のみなり(最も希臘の古代に鋤讀方とて左より右右より左と各行順を追ふて讀む思考に書くこと猶農夫が田を鋤くに往來共に手を空せざるに倣ふたるものゆりしとのとなれども此方の却て面倒に過くれバ速に廢したりと云ふ又本編を草する際一の希臘文典を閱せしに左行字ある古陶器一箇を掘出したるを記せり左すれば希臘にても左行字を試みたるといゆれども遂に右行の便に勝さりしと思ひる又日耳曼上古の文字即ちルーニ

ツッ字の粗末は石上に彫付け今遺存せるに因て見れば左右上下各種のもの交れる由なれども是れは文字の書方未だ一定せざる野蠻時代の間のとに過ぎず其後の左より右に奔るより一定せり又土耳其に詔勅法律書等を書くに右手の下隅より左手の上隅に奔る一種の書方ありと云へども是れ我國にては色紙短冊を書くに一種の異法あるが如く全く特別の物と考て可ならん歟斯く各國とも造物の自然に従ひ左右行の書体をさせしに獨り支那のみ上下行となしたるの何故かと尋るは各國にては印度の貝多羅葉にせよ小亞細亞周圍の羊皮紙にせよ希臘羅馬の木板銅板にせよ埃及のパピラス(Papyrus)芭蕉の幹の如く幾重ともなく織皮よて取巻ける植物なり此皮を剝て紙となせ

此說先獲吾心或有
疑蒙古字不用竹簡
何以豎書者不知蒙
古製字初於至元六
年其豎書者倣漢字
法耳

し由、英語の Paper 佛獨語の Papier 皆是より出つにせよ、皆幅員ある物なり、又國により、時代によりて、木葉の大なるものを用ひしともあるべく、木皮を用ひしともあるべく、既に獨逸語にて、文字を Buchstabe と稱し、書籍を Buch と稱し、英語に書籍を Book と稱し、羅馬語に Liber と稱し、佛に轉訛して Livre と稱せるも、木皮を用ひし時代の遺稱なりと云ふ、併し木葉木皮とても幅員ある物なれば、自ら左右に書く便利を得たるなるべし、支那に至て、則ち竹簡を編合せて、卷物を爲して、用ひたりと云ひ傳ふ、果して然らば、卷物の左右に卷舒せしに相違なき、而して竹簡の幅員至て狭く、文字を左右に書ざるに便ならず、故に之を上下に書せしに、遂に一体の書体と爲りたるならん、我日本人之を察せず、我が重音

語を書するにも、矢張支那流に據らざる可からざる如くに、思考しざる者と思へる、分語法の起らざりしも、語々縦長の弊の起りしも、皆此より源因せり、内因の第三に、日本にて、文を作るに、言語外に符牒を用て、意味の斷續輕重の區別をなす工夫甚だ少きま在り、是亦のべがさきの弊より、來ると多し、支那書に、此事却て進歩し、句點あり、讀點あり、段落點あり、能く誦讀し、便す、西洋にて、句讀段落の點法、古代よりして、全備せしに、あらず、改良に改良を求め、漸次に進歩したる者なり、日本人が、此工夫に乏しかりしに、惜むへし、又支那書に、一字にして、數義ある者、遇へば、四聲の別に從ひ、小半圈點を、字隅に付したる工夫あり、西洋にて、字上若く、字下に付する所の點によ

りて字音を分ち、若くは音均しきも、義を異にせむ、思考の文章(希臘佛獨等是なり)の用點の功用甚だ重し、日本假名に、始めより濁音字なきにより、文を作るに、濁點を用ひざれば、丸て意味を反對せる語あり、意味を爲さざる語もあり、而るに國學者の濁點の下品なりとして、甚だ之を擯斥し、爲めに意味を曖昧せしむると多し、是亦假名文の人、厭はれし一因とす、内因の第四の、假名文に、外國語を採用する、良法なりしに在り、蓋し日本語と支那語と并ふれば、性質の如何の、姑く置き、支那文學の進歩に、遂に日本文學の上に在りしに、相違なければ、熟語等の、支那語を借らざる可らざる、必要ありしと明なり、去れば我が假名文にも、最初の却て消息大徳等、支那語を採り、之を假名に直したる例のありしかども、是とて

申食國大夫訓讀太
長物氏南留別志疑
其非當時語似可取

引證辨駁使人知其

も僅々のとに過ぎを、遂に和文と云へば、ケクニモノマウ
オホイマウチキミ様の流義にあらざれば、承知せざる大
先生達のみ出現せしまし、古和語に倚らざれば、一切取らず
偶々支那文も出たる思想を寫すにも、已に世間に知れ切り
たる原語の音を採用せず、方めて冗長、曖昧の古和語を適用
し、假名文の世界をして、誠に偏屈至極の苦境に陥らしめたり、
西洋諸國の例を以て見れば、中々去る者に、あらず、外國
語と雖ども、學術上の熟語など、採るべきの、之を採り、巧に自
國の語となし、新發明物の名稱も、希臘羅馬の熟語なき者に
ても、今日流通の國語よて、冗長に過ぎ、且つ他も混雜し易
き時の、巧も古語を採用して、名を命すること、テレグラフの
希臘語の「遠書」の二語より、合制し「テレフォン」傳話機、「遠音」

の二語より合制し、マイク로스コープ、顯微鏡の細覽の二語より合制せる類、少からず、採用の方法さへ、其の宜を得れり、外國語を採るに於て、何の忌むべきなし、而るに和學者の、字の書き方などの、卑屈に支那風を學びあへり、言語に至てり、支那語との、氷炭相容れざる者の如くにして、前に云ふ如く、假名文の境界をして、偏屈至極に至らしめたり、
内因の第五の假名文の舊体の、兎角にたゞあがくして、勢弱く、人をして欠伸せしめ易に在り、彼文体の、ひまな和學先生達の、春の長の日の道の記、或はならく、と、牛車に載て往來したる頃の、戀話などを作るに、宜らんが、其他に向てり、何事にも、用に立ち難し、此事の僕嘗て歌樂論中にも論じ置きたり、假名會に、功勞ある吉原重俊君亦予に語て曰く、後

古者漢文曰男文假
名文曰女文紀氏士
佐日記亦言倣女子
所爲則未流之弊至
緩漫不亦宜乎

此段易地移之上文
點讀點條之次則更
妙

世假名文の快活ならざる、我が假名文古書の、婦人の手に成るもの多く、隨て緩漫の語も多く、活潑の勢なきに、和學者が、之を見て、假名文の規範と誤認し、故さらに、冗長緩漫の處を摸擬するの癖あるに至りたる、よ因る、なふんど、見る所ありと云ふへし、
將又西洋にてり、分語法を行ふたる上にも、猶ほ一目の下に、語の種類を知り得る便利を、多らしめん爲、頭字の用法を發明し、一時に却て之を用ふると、多きよ過ぎざる位なり、
き、方今の慣習にてり、獨逸文の、總て名詞に、皆頭字を付す、英佛文の、首として、固有名詞に、用ひ、普通名詞に、重き意味を、其語に歸する時、杯に、用ひ、其他諸國亦粗同じ、而るに日本にてり、頭字の考を起せし人ありしを聞かず、又西洋字形に

ハ、昇リ字とて、フ等の如く、上に延ひたるあり、降リ字とて、フ等の如く、下に延ひたるあり、短字とて、フ等の如く、中央に詰まりたるあり、長字とて、行草体の、フ等の如く、上下共に延ひたるあり、故に、已に綴りたる語を見るに、當り、一見して、之を識別するに、甚た便なり、我が假名字にも、自ら此差なきに、あらざれども、片假名の、一畫一字に書下す思考なれば、長短昇降の差の、何の用をもなさそ、平假名のつゞけかきを常とすれば、是亦昇降長短の別、却て害ある位にて、更に看下の迅速を助る便なし、

以上、記する如き、種々の内因よりして、純粹の假名文の、誦讀に便なからざれば、世の愛讀を増ざるのみならず、却て之に厭はれ、人心の漸く支那字に傾きたるが如し、蓋し、支那字の

論溯本潦何等眼識

之を學び、之を書するに、難しと雖も、既に書したる上、よて、看る時、一視線下に、一語を看了し、得るが故に、誦讀上の便利に、付て、支那字交りの、遙に純粹の假名文の上に在り、故に、支那字交りの流行の、看下の便利を以て、之を學び、之を書するの、困難を、壓倒したる者と云ふべし、是れ假名文の性質、支那字交りに、劣れるに、あらずして、全く假名文書方の、不完全より、起れりと云ひざる可からず、既に假名文の人に、厭はれし爲め、衰退せし、斯る内因より、生ずると多しと知らば、斷然舊套を脱し、假名字にせよ、羅馬字にせよ、看下に便なる綴字の良書方を、求めざる可らず、正宗の名刀も、磨ざれば、無細工なる鈍刀に、若かず、我綴字文体の、其進歩の方法を、得ざるが爲めに、支那字交の文章、壓倒せられたるを見て、遂に

我、言、語、の、綴、字、寫、音、に、適、せ、ず、と、す、る、の、觀、察、の、本、文、を、誤、れ、り、と、云、ふ、べ、し、

第四編 綴字法非難の答

我重音語を書するに、支那字を以てするより生ずる大困難と、大不便利との、已に世人の偏く知る所なり、抑々支那字形のみを覺るたも、世界無類の難事なるに、之に加ふるに、音訓の重複を以てし、音訓又兩つなら分れて、數種と爲る、而して音訓識別の、未だ以て日本語を書し、日本語を讀むに、足らされ、別よ日本語をも、爲さざる可らず、故よ日本語を書し日本語を讀むを學ぶ、其實三四の異語を、同時に學ぶよ同じきも、其結果を云へば、文字の美境を距ると猶遠し、陋屋の惡氣中に、生活する者の、左まてに呼吸の苦を覺え、吾人

議論剗切文彩陸離

に、少、よ、り、和、漢、混、交、の、惡、文、中、に、生、長、し、た、れ、の、こ、ろ、左、ま、て、に、其、大、困、難、大、不、便、利、を、感、せ、さ、れ、試、み、身、を、局、外、に、置、き、之、を、熟、思、せ、よ、從、來、の、日、本、文、体、の、之、を、我、國、文、章、と、し、て、子、孫、永、世、に、傳、授、せ、る、よ、足、る、歟、予、の、決、し、て、其、然、ら、さ、る、を、知、る、况、ん、や、吾、人、の、智、識、經、驗、の、既、に、前、日、の、比、に、あ、ら、ず、譬、へ、の、暗、室、の、鄙、人、が、晴、天、朗、氣、の、味、を、知、り、之、を、利、用、せ、ん、と、欲、す、る、如、き、氣、運、に、向、へ、る、よ、於、て、を、や、

日本文章を改めて、綴字法と爲すの成功、如何を疑ふ者の、支那字と、假名字とを交用し、支那字に付するに、振假名を以てし、之を我定制の文体と爲さんと、主張を、雖も、是れ實の、前論に云ふ如く、二重文にして、定制の文体と爲し難きのみならず、實際の困難と、不便利の増すあるも、減すると無し、成程

誦讀の上より見れり、稍都合よき所あるべけれども、其れ
逆も、綴字法に改むれば、普通の國語、一語にて足る所を、殊更
に支那字數字を連用せる如き弊あるり、免る可らず、而して
其振假名と云へば、訓を用ひずして、音を用ると少かつすと
思へるれば、到底支那字を學ぶに非ざれり、叶はざるべく、又
品によりて、振假名を定制とするより、到底行へる可らず、例
へり、平常の往復文書に、振假名を字々に付するとの出來る
者、非ず、而して、日常の往復文章ほど、普通教育も肝要なる
者なし、若又是等の不都合も、構はずとしたる所にて、振假
名文を、定制とする時、作文及印刷上の不都合、其幾多な
るを知らず、予が見る所と、實驗する所を以てそれ、方今の
假名交り、振假名なしの日本文を作るにも、時間の割合を、西

莊子言大年小年之
別人生百年即小年
耳今改定文字爲國
家萬世之長計可謂
遠識矣

洋の綴字文に比すれば、極々少くも、四五倍を費さる可ら
ず、日本人が著書に乏しく、大部と稱する書も、洋書に比すれ
ば、日を同して論ず可らざるも、此等に源因すると多しとす、
若之に加ふるに振假名の定制を以てせば、其徒勞の果して
如何なるべき歟、勿論作文法を、改正したりとて、一朝にして、
此形狀を變し得べきと云ふに、あらず、日報記者先生、羅
馬字會假名字會の計畫、百年の業なりと云はれたり、成程
大成普通に至るまで、百年の久を要する歟、知る可らず
と雖ども、百年の光陰、一國の生命にして、瑣細の日月な
り、我後世子孫の爲め、今よりして、良法を弘むるの工夫を、忽
ち、可らず、印刷の術たりとて、従前の重に木版を用ひ、未だ
充分の用をなさず、其の活版印行法の、殆んど名のみ過ぎ

ざりしに、一に印刷機械の發明あきにと雖も、一に無數の支那字を用ざる可らざる、困難に因るならん、西洋印刷機械輸入以來、機械の用法と、迅速に文字を鑄造する法と、直ちに利用を爲したるが故に、近年印刷術の進歩の、復た昔日の比にあらずと雖も、無數の支那字を要する必要の、前日に殊らされば我が印刷家の、之を西洋印刷家に比するに、其苦辛面倒、幾百倍なるを知る可らず、新聞印行の如き、特に然り、一般の公衆の、心を此等の點に、勞する者の多らざるべしと雖も、予の嘗て日本印刷家の實際を、目撃し、尋て西洋印刷の方法を視察し、大に感ずる所ありたり、印刷術の進歩して、低價の書の陸續出るに、國の進歩に、大關係あるを知らば、文章の体裁を論するに於て、決して、之を忘る可らず、若し今日

の形狀に、加ふるに文々章々、悉く振假名を付する定制を以てせば、其結果の、果して如何なるべき歟、自餘の諸困難諸不便利を、悉く除き、作文と印刷との二事のみより論するも支那字混交の文体の、決して開明の世に、永續せしむべき者にあらず、

扱又何故に、論者の綴字法の成功を危み、斯る不都なる文体を、賛成する歟と問へば、其故障の、僅々よして、決して之を、除き得べからざる者にあらず、請ふ試に之を辨せん、

(一)綴字法の成功を危む者の、源氏其他古物語本の誦讀し易らす、人の爲めに厭はるゝを見て、日本語を綴字にするの非を、證するものありと雖も、予を以て之を見れば、古物語本の誦讀し易らざるに、我が往時の書方の不完全を、答る證と

なすへく、日本語を、綴字となす可らざる證と爲すへからず、勿論古物語著述の、既に千年前後の昔に在り、其間人情風俗言語文章の變遷、一にして足らざれば、往々當時に通じて、今日に通せざる語もあるべく、又當時の事實にして、今日に疑はしきもあるべく、例へり、源氏夕顔に「わかきわらこがさしぬき」を着て、花を折りしとを載す、當時待女をも「わらこ」と稱し得られし乎、女にして、後世に謂ふ所のさしぬきを着せしとありし乎、分明ならざれば、之を解くに苦めども、是等の疑事の、已むを得ざるとにて、各國の文章皆是れあり、已に大學の絜矩の二字も、之を解し得る人なし、又物語本作者と雖も、隨分に筆の廻りの足らざる所あれば、之れが爲め、讀み易らざる氣味もあれども、其他の文字の意味に於て、曖昧の處

此種引證與論旨無
涉割愛爲可

ひなし、其之あるは、皆書方の不完全にして、語々の首尾を分つと、一見に見下するとの難きに在るのミ、此等を「正宗も磨されば鈍刀に若す」と云ふなり、之をして、若し前論に記する如き、諸内因あからしめ、且つ現今の如き、鮮明なる印刷術を得せしめば、豈世人の云ふ如き、困難あらんや、又繪入假名文の草双紙の、士君子の間に行はれざりしを以て、綴字の我言語に適せざるを論するも、あれども、是亦觀察の本末を誤りたる者にて、我書方の不完全を論する證とあすべく、綴字の不適當を説く證となす可らず、其士君子の間に行はれざりしは、一の事柄の淺近なる、一の種彦等の諸作の如く、事柄の稍進んだるものも、彼の諸内因ありて、一目看下、便ななとざりしとに因るなり、豈我言語の綴字に適せざるを證

するに足んや、

(二) 綴字法の成功を危む者の、我假名遣の困難を擧げ、之を學び得るの難きが爲め、假名文の行のれまじと論ず、成程と
う、たう、てう、てふ、ちやう、ちよう、こう、かう、
かふ、くわう、しやう、しよう、せう、等の書分け、又語尾
のうふも等の差の、困難ならざるにわらず、併し此等の、羅馬
字書き方にての已に省略法を行へり、假名綴又之を行ふと
を得、故に假名遣の上も付ての予の甚しき困難を見ず、好し
や數十歩を譲り、必ず和歌者流の假名遣を、株守せざる可ら
そとするも、苟も教示の法、其宜を得ば、之を學ぶと、從來の學
風と、難易年を同うして語る可らず、英文の元來數種混合語
に出れば、綴字法上仍甚しき不規則あれども、英國兒女の之

邦人略知四聲非有
他方唯多作詩耳况
所謂假名遣者授業
有方不難學蓋不爲
也非不能也

を學ぶの、我國兒女の支那字交の文を學ぶと、數等の遲速を
殊にせり、亦以て綴字の便を見るも足る、抑、今、人、が、假、名、遣、に
疎、さ、い、其、事、の、實、は、大、困、難、な、る、に、因、る、も、あ、ら、ず、唯、絶、て、之、を
學、ば、ざ、る、も、因、る、な、り、京、都、の、和、學、者、宮、崎、某、の、其、日、本、文、典、大
意、は、假、名、遣、の、一、年、に、し、て、學、び、得、へ、し、と、論、せ、り、假、令、一、年、の
久、き、を、費、そ、も、猶、支、那、字、を、學、び、覺、る、に、比、す、れ、ば、實、に、差、少、の
時、間、と、そ、況、ん、や、省、略、法、を、施、す、に、於、て、を、や、勿、論、省、略、法、を、施
し、た、り、と、て、一、通、り、の、文、を、作、る、に、は、幾、多、歟、の、就、學、を、要、と、る
と、い、論、を、待、た、ず、言、文、一、致、に、し、て、綴、字、法、を、用、ふ、る、西、洋、諸、國
と、雖、ど、も、未、だ、學、ば、ず、し、て、文、を、作、り、得、る、者、あ、る、を、聞、か、ず、然
る、に、綴、字、法、の、説、を、聞、き、車、夫、馬、丁、日、雇、人、足、ま、で、學、ば、ず、し、て、
文、を、作、り、得、る、の、術、を、計、畫、と、る、歟、と、想、像、と、る、も、の、世、に、少、ら

す、誤れりと云ふべし、力を勞せると少くば、則ち之を取るべし、東京より關西に航海するに、何ぞ非常の迂路を、北海の嶮と取るを要せんや、

(三) 分語の制の印刷上には、異論なけれども、執業上よての舊風の奔り書きの如く、迅速なるを得ざるが故に、事務煩多人の間に合とと論する者あり、此論の羅馬字の文には、毫も適せざるとい、洋字と舊來の日本文とを共に達者に書得る人の實驗よて、明なるへし、扱假名文と雖ども詞を分て書するも、決して舊來の日本文を書するより遅しとい、僕決して之を信せず、否其大よ速なるを信す、西洋にて語を分て書く、と云ふも、語の截れ目の處よて、ちよと筆を上るまてにて、自ら分るれば、其の間、何たる困難あるを感せ、と、勿論洋文と雖

假名綴字不必多要
字書一部和訓栞亦
足以辨之矣

も、筆の工合によりての前語と後語の間に、墨痕の續ける事なきにあらず、併し此れは、猶支那字を書くに、餘筆を其儘下字に持下す事あるも、之を二字混交と云ふ可らざると、一般にて、中央の墨痕あるも、字の位置、自ら定まるが故に、二語混合と云ふべからず、假名文を、分語にするも、此等の餘裕の實際よ許すとを得へし、若し假名の字形を少しく變更して、速書の草体に適せしめ、隨て用紙用筆をも、改むるに至らば、其迅速の、愈々舊來の日本文の跋及ぶ所にあらざるべし、

(四) 論者の又、日本字引を作るの難きを説く者あれども、言語文章ありて後ち、字書あり、未だ先づ字書を作て後ち、言語文章を創るを聞かざるが故に、好字書の未だ出てざるに、僻易するよ及ばせと雖も、其實勤勉の人さへあれば、日本にて

今字書を作るの、大難事との思われず、已に平文字書あり、平
 文先生の、能く日本語に通せるのみならず、岸田吟香翁など
 の、助力も少からざりしと聞けば、集纂の語も頗る多く、殆ど
 常用の語を盡せり、又英人サトウ氏と、我石橋氏との合著字
 書あり、又舊來より節用集ありて、有用の書なり、此等を本と
 し、新聞論説等に據り、近時世間に出現の新熟語、譬へば、議院、
 憲法、條約等の語を挿入して、編纂せば、一の好字書を得ると、
 必せり、勿論其先きの文化さへ進めば、漸次に完全の字書の
 出現し、遂に、各科技藝上、特別の字書まで出るに至る、各
 國の例を見ても知るべし、

(五) 論者の又綴字法行ゆるれば、和漢古書の廢紙と歸する
 を恐るゝものあり、其恐るゝの理あり、未だ綴字法を、距絶する

逐次論破一層進一
 層何等快筆

の理由となす可らず、予と雖も、和漢の古書に、聊か縁故なき
 にあらざれば、惜舊の情の、決して他人に譲らず、然れども世
 と割愛と云ふことあり、大幸を得んが爲めに、眞に已むを
 得ざれば、小安を棄ざる可らず、泣出妻吳も、亦已むを得ざる
 に出るなり、雖然、予が見る所を以てすれば、吾人が綴字法採
 用より起る割愛の、決して如此大ならず、試に我國諸種の古
 書を見よ、眞に之を讀得且讀涉りたるもの、全國中幾多ある
 之を讀み眞に其味を解するもの、幾多ある之を解して、實益
 を得るもの、幾多ある誠に國民の一小數と云ひざる可らず、
 假令普通の教育を一變して、綴字の世となすも、高等の教育
 場にて、猶西洋にても古學を修めしむることある如く、我
 舊書の讀法を教ふる位のこと、決して絶へざるべし、而し

慧眼燃犀能見人々
所未見到

て此生徒等、教育法の改良の爲め、智識發達も早かるべく、又普通の文書に、支那字を廢する以上の、舊時の如く、習時并に字形の暗記に、無要の長年月を省くことを得れば、今の通例の書生が有せる古書の智識位の、之を保存すると、容易なるべし、且つ文化愈々進めば、著書の要求、愈々増すべく、而して書を著すにも、開明の新思想を以てする時、我日本の古事舊迹にも、著書の好題目、甚だ多ければ、考證の爲め、特に一種の事業として、古書を修むる士も、陸續として出て來るべければ、古書保存、是にても充分なるべし、其上書類によりて、原文のまゝを、時文の体裁に改め、印行するを得るも多かるべく、此等の舊風、比すれば、却て數等の利益を増すと云ふて可なり、試に源氏物語を見よ、此書の東洋書中に

て、疵瑕最多き書に、あれども、其美所よりして云へば、是亦東洋希有の書と云ふへし、然も舊風の体裁にて、之を讀得るもの、實に寥々晨星、當ならず、若し之を印行するに、一目瞭然の新法を以てせば、其便利の如何ならん、之を西洋の文學に徴するも、言語文章の、屢次變遷せるが故に、古書保存の點よりすれば、此變遷の、大傷害を爲さざる可からざる筈に、あれども、實際に於て、之が爲め文章の改革を悔さるもの、何ぞや、上に云ふ如き情勢あれば、實際の不便利を感せざれ、なり、之を要するに、古書保存の説、決して綴字法採用の大利益を、壓倒するに足らず、支那古書保存の論も、日本古書保存と、其理一なり、是にも考證著書家の、陸續として出るなるべし、且又我國人支那書を讀むと云ふも、近世の事に至て、

支那新聞難讀者遞
報而已他論說記事
何難讀之有此不免
抑揚太過

著者曰ク不肖予ノ
如キ者ハ支那新聞
ヲ讀ムニ其苦辛言
フ可ラズ

之を研究するもの無し、從來の學問あるが爲め、支那の申す
までなく、朝鮮交趾暹羅の事まで、譯を經すして、皆之を知る
など揚言する人もあれども、支那と雖も、時文の已に大に變
化せるにより、我從來の學風にて修たる支那學の力にて、支
那新聞一枚なりとも、讀得るもの、全國中幾人ある、蓋し指
を屈するも過さるべし、豈綴字法の利益を壓するに足らん
や、

以上に記するものゝ外、一二の故障の、仍之れあるかも知ら
ざれども、要するに、皆瑣細にして、顧るも足らず、日本の人名
とて、白石先生の人名考に、詳論せる如く、譯なきとより、種
々の不規則を生じ、後世に至て、遂に憚り多けれども、交詢
社雜誌假名文字論中に、三條相國の御名稱に付て、記せる一

不唯文字治國用兵
尤不可無此見識

條の好話の如き、不便利を出すに至れり、綴字の簡便に萬々
及ばず、又綴字法として、證文等に、一二三十等の數字を、變
換する弊を來さんと、恐るゝもあれども、是亦瑣細の杞憂な
り、證文上鄭重を要せば、其場合のみ、數字と綴字とを、二重
に書するも可なり、若又一二十等の、猶足らず、壹貳拾と書く
を、髓とするとの見込ならば、此二三字を用たりとて、一体の
文章を綴字とするに於て、害なし、之を要するに、大本の方向
さへ定まれば、支葉の小故障の、水到渠成と云ふこともあり、
其模様も應じて、何とも工夫の付く者なり、凡そ事の、一から
十まで、毫毛の故障に、僻易して、大功の改革の成功するも
の、にあらず、今日に在て、日本の爲めに、謀るに、綴字の大方
向の、最早之を確立し、將來の力を、其の方法進歩に、用ふべきの

時なり、若し否らされば、國學者の所謂詞靈ゴトダマのさきとふ國の稱も眞の虛稱に歸して已まん、

第五編 文章の体裁

去單音字用重音字
立論大旨在此二者
然優勝劣敗有自然
之數則不必要汲々
乎去單用重乃獨局
外視羅馬假名二者
何哉
著者曰ク支那字ヲ
驅逐スルヲ第一ノ
眼目トス故ニ切ニ
之ヲ攻撃シ假名羅
馬ノ優劣ヲ決セザ
ルノミ

日本文の綴字の假名字を用んる羅馬字を用んか、二者各々一長一短なき能わざれば、未だ遽に其選を決するを得ず、加之目下の急の外山正一君も云ふ如く、先づ支那字を普通の使用より去るに在れり、今日に於ては予が如き局外者の假名字羅馬字其孰を取るかを論究せんより、寧ろ兩者の爲め聊か裨益すると思ふ所を陳べ、其將來の之を優勝劣敗の運に付するも妨なしと信せ、且又兩者とも其の書方さへ一定せば、其差の字形の上に留まり、共に綴字言語の陶冶を助くるの功あり、一なるべし、日耳曼にても固有の釘形文

字と普通の羅馬形文字と並び行ゆるの聊か類似の狀なきにあらず、左れば當分の内の強て遽に二者の一に決せずして可ならん歟、否、兩者の競争の當分の中、却て互に相進むるの機械となる可きなり、

楮羅馬字にせよ、假名字にせよ、綴字作文の目的を定る以上の文體の如何なる者を標準とすべき歟を知らざる可らず、勿論文章の氣勢脩辭の各人の技倆と、好尚とに因るなれば、一定すべき義にわらず、一定し得べければ、始めより文章に巧拙ある道理なし、乍去大体の標準に至ては、之を度外に放過す可からず、今や我國の作文を見るに、種々雜多の体裁あり、矢野文雄氏の經國美談後篇自序に、我邦今日の文體に、漢文體和文體歐文直譯體俗語俚言體の四種あり、概して云へ

邦語是重音而用單音漢字寫之言文背

ば、漢文体の、悲壯典雅に宜しく、和文体の、優柔温和に宜しく、歐文直譯体の、緻密精確に宜しく、俗語俚言体の、滑稽曲折に宜し、一体に偏すべからずと論せり、此論や原來支那字交の文章の爲めに發したるものなれども、之を綴字文章に、適用するを得へし、若し精密に我國の文体を細別せば、其種類の、殆ど上の四体に止まらずと雖も、未だ是を感心せべきものなし、其實日本書上の言語の、此よりして、陶成する時節なれば、矢野氏の説の如く、萬々一体に偏せず、諸体を折衷して、互に長短を補ひざる可らず、然れども、我國語を綴字にするの、獨り文字の形のみを、簡易にするが爲めならず、成るべく多數の人民に、了解し易らしめ、遂にの言文一致を、目的とせざるに在るが故に、諸体を折衷するにも、成るべく、流暢圓

馳職此之由所謂言文一致即是全編大主意在於此

滑の文勢を得るを力め、言語を選ぶにも、成るべく、世間通用廣きものに、注目すべし、近く譬へて云ひ、(一)其眞理を識別せざるもの、(二)其道理を知らざる者、(三)其ことわりをわきまへしらぬやからの三語の、皆同一の場合に、適用をへき語なれども、其流暢圓滑にして、最も世間通用の廣き、第二にあり、綴字文に、第二の体裁を用ふべし、然るに方今の實際に付きて見れば、羅馬字會の傾向、第一の体裁にして、假名會の傾向、第三の体裁に在り、吾人が見て、最も適當とする第二の体裁の、兩會の爲めに、共々却けらるゝに似たり、是れを概言すれば、羅馬字會の、片假名交の漢文体を、直寫するに過るの傾向あり、假名會の、之に反て、偏屈至極の、古言に拘泥するの形跡あり、是れ予が兩會の爲め取らざる所なり、

各中旨繁可謂頂門一鍼

論得切實

雖然、予が羅馬字會の爲めに憂ふる所の、假名會に比すれば、甚だ輕し、何となれば、羅馬會員の傾向、好て之を爲すに、あらず、其の會員が平生の作文、他體よりも、寧ろ片假名交文體に、慣習し居ると思はるれば、綴字文を作るにも、其語氣の自然に顯はれ來るべし、予をして、今羅馬字文を作らしむるも、或は此弊を免れざるべし、嘗て日耳曼の法律書を見るに、學術上の熟語、已むを得されども、其の他にも、羅馬語乃至英佛語を、交用すると甚だ多し、故に通常の文學士に、非難せらるゝと多し、蓋し法律學者に、極めて力を羅馬法律に費し、兼て廣く英佛法律書を、涉獵し、自國の詞藻に、却て深く思を寄するに、違なきが故に、作文の際にも、久しく浸せる外國語の、顯れ來ると多きなり、此弊は法律學者の、自ら深

比擬不失倫

く省慮する所たり、今羅馬字會員の、動すれば、片假名交文體に、傾くも、其趣稍々、髮鬚たり、既に好で爲すに、あらざる以上、少く注意せ、舊習を一洗すると、難きにあらず、是れ予が爲に憂ふるの、輕き所以なり、尤も享保前後の儒者が、書たる假名文に、純粹の國學者の和文よりも、遙に綴字文體の參考に、供すべきもの多ければ、是等の、羅馬字會員の爲に、參考たるべき文章なる可し、

假名會員の爲す所の、爲めに歎息せざるを得ず、何となれば、其の偏屈至極の古風に、拘泥する、有心故造に出るの狀、少あらざれば、なり、此頃も一友人の來書中に、

かなの會も、益々會員増殖えて、盛の則盛なれども、神主國學連多數、其他の普通平凡の者のみの寄集りよて、精神な

きに似たり、愚考に、文學士等益々入會して、明治昭代の文學上に、一新機軸を出すに、當に此時にあるべし、只々慨歎に堪ざるに、少しく學術の上より言を下すものある時に、多數の擧を來すの勢なり、嗚呼政事に學問上に、多數の頑固者の、少數即志想高尚者の自由にならざるに、萬古の通思ある歟、

と歎息し來れり、此事果して、實際なるや否や、姑く舍き、國學者が、「みくよぶりも、いにしへにかへるべければ、まづよろこばし」とて、文体をふるきさまにせんと、主張すること、大槻文彦氏の「のなのとものおひたち」も、記せり、以て其一斑を窺ふに足る、彼羅馬字會の勃興も、實に此等の原因に出し歟も、知る可らず、假名會員の諸君たるもの、豈少く自省

數語對症良藥足以
治痼疾

する所なくして可なふんや、抑々世人が、支那字を却け、綴字法を興さんとを希ふに、國學の古風を回復せんと欲するが爲ならず、然るに之を奇貨として、回復を謀らんとするに、猶懸河の水を、逆流せしめんとするが如し、到底行へるべきにあらず、此等を

とくむべきものといなしに、とかなくも、ちる花ことには、たぐふところか

どの云ふなり、愛惜の情に、去るとなから、斷臂の勇、決して忘る可らず、昔者伊太利人が、羅馬の舊を慕ひて、古語の回復を謀りたるも、勞して功なし、近くは日本にても、物茂卿の不世出の文才を以て、大に古文辭の説を唱へたるも、徒に過眼の雲烟よ過ぎず、高弟の春臺たも、其墓に詣て先生にして、古文

辞を唱へさりしならばと泣歎したりしと聞く亦以て鑑るに足るべきなり、

假名會まで刊行せるかなのしるべふおほやすまのことはのもとふそのおほむね日本文典大意と表題の一篇を載せたるを見るに其中に

ソノナツギ(腦)ノ ミタマヲ ミガキ イツレバ ヒニヒニ
オモヒガチ ヒロク サトリ アカクナリ ユクカ
ユエニ オノヅカラアメツチノ コトハリニ タガハス
シテ ヒトノ ヒト タル マサミチヲ ワキマヘ
シリテ コトヲ ヒラキモノヲ ツクリ イヅルノ
イサチ チタツ

と云ふが如き文あり又

ワガクコノ コトバノ ノリチ マナビ シリ、ワガク
ニノ カダカムナチ クハシク カキオボエテツノ
モトチ、ツマビラカニ ワキマヘ シラデハ、エアルマ
ジキ ワサニテ コレチ モトツ マナビノ ハジメノ
ツトメトハ イフナリ。 カレ(故) イマ コトバノ モ
トツフミチ ツクレルハ、コノ ユエ ヨシ アルガ
ユエ ナリ

と云ふ如き文もあり斯る文体の文典を以て吾人の子弟を、
戕められての迷惑なり又たかなのまぢびきの廣告中に「かな
のせうそこと題せる著書の標題を見さり今日の實際にて、
息をろこと讀む人の稀なるべきに著者の意らくと讀て
の漢語に類するを恐れ古物語本の例に倣ひそこと讀せし

かと思ひ、るれども、若し然らば、てがみと云ふ、切近の字もあり、せうそこと、讀たりとて、其出處の漢語たる性質を、變し得へきにもあらざるべし、書中文体の如何の、知らざれども、標題同様の者なれば、随分迷惑に思ふ父兄もあるべし、(書中の文体の否らすとの叱正あらば予の最も満足すへし)此二例の、綴字法採用上に、最も功要の問題なれば、筆者に對して、頗る氣の毒と思へども、斯くの論と出るなり、且つ筆者の綴字法、振興に熱心なるの、疑ふへきにあらざれば、予の批判の、寧ろ其の遺算を惜み、其の改良を望むの情に出れば、決して惡意と思ふ可らず、勿論假名會員中にも、進歩論者の少らざるべく、予の觀察の、其の大体の傾向を、概言するに過ぎずと雖も、頃日の新聞も據りて見ても、書方改良部と、もとのと

もの部とに分離したりと云へば、古風の猶甚だ熾なりと思へる、外にの羅馬字會の勁敵あり、内にの員會の軋轢あり、假名會の爲まり、實に痛ましき次第なり、予を以て、假名會の爲に謀るに、今日の軋轢の、唯々會員の未だ、綴字法主張の本旨を、了解せざる小争に起ると、信すれば、兩部會員の有力者、數人の協議を盡し、斷然假名文書方、一大改正の議を、兩部の共同會に提出し、將來の隆盛を謀るの、實に今日に在りと信する也、書方の詳細の、假名羅馬兩會の爲め、猶大に論すべきものあれば、特に之を次編に譲り、本篇の兩會の爲め、一の注意を、喚起して之を結はん、他を、し、通俗昔話本の出版是れなり、今や兩會とも、各々雑誌を發行せり、雑誌の發行、固より可ならざるにあらず、新体の文を創むるに方て、最初の其適否

育才妙用在淺近易
解處

を試験する爲め、雜誌を發行せざる可らず、將來とても、高尚の思想を論出する爲めに、猶大に必要あるべし、去れども、新体をして、世間に普及せしむる、方便上より考れ、雜誌發行、未だ充分なりと、是るに足らず、必らずや、今の兒童の、社會をして、識ふず知ふず、新体の中に、生長せしむる工夫を、なさざる可ざらるに似たり、歐羅巴諸國に於て、兒童の爲めに、發行の昔話類の書籍、極めて夥しく、價も廉にして、其体裁の年齢に應じて、自ら差違あり、多くの皆挿畫本とし、兒童をして繪を玩ぶと共に、自ら字を覺え、書を愛するの情を發せしむ、故に教育の助をなすと、極めて大なり、就中日耳曼にて、グリュム兄弟の合纂せし昔話本の、最も廣く行われ、印行も大小あり、挿畫せるもあり、せざるもあり、記する所の話の、我

著者曰ク予頃ロ歸
朝シテ見レハ洋客
ヘボン氏チヤンベ

國の舌切雀、兎と狸、桃太郎の兎が嶋征伐の類と、甚だ似たり、蓋しグリュム兄弟の歐洲にて、比較言語學の祖宗とも、仰る大學者なれども、言語の佳所の、却て老婆老媪の口碑に存ずると、多きを悟り、其事業の淺薄なる如く、見ゆるをも厭はず、銳意して、民間の昔話を採録し、詞藻の足らざる所の、之を補ひ、以て彼書を作りたるなり、其意蓋し、兒童を識らす、知らざるの間に、美文に教育するに在りしと、云へり、日本にても上に云ふ舌切雀、桃太郎類の昔話の、已に印行の繪、双紙少らず、若し其粹を選び、文字の未だ佳ならざると、修飾して、新体よ綴り、美書を加へ、美本を製し、抵價にて發賣せば、其功用的甚だ大なるへし、其外王代にありて、今昔物語、著聞集、徒然草、近世にありて、責而者草、心學道話等の書もありて、其の

レン氏等ノ諸先生
ハ巴ニ桃太郎浦嶋
舌切雀等ヲ英譯シ
テ繪本トナセルモ
ノ七八部アリ仍續
々印刷ノ都合ニテ
頗ル海外ノ輸出ア
リト云フ日本學者
ハ未ダ此等ノ昔話
ヲ編纂校訂シテ美
本ヲ製シ兒童ノ爲
メニスルモノ無シ
可歎々々
就自家經驗以說繪
本功用其論切實可
愛

中への随分の好話もあれば、古風に過る字句だけを脩飾し、之と抜粹するも、甚だ好し、又舌切雀類の昔話の、老婆の口碑に存せるものゝ中への、思想の美を盡すもの少く、予の幼なるや、家に一の裁縫婆あり、此婆素性も無下に賤しからず、善く昔話と語るに長ず、予が當時聞たる好話の、今も猶恍惚として、心頭に往來すると屢々なり、以て小話の、幼心を感ぜる多きを知るべし、此等の昔話の、クリム兄弟に倣ひ有志者の宜しく、収拾をへき所と思へる、且つ繪本類の、幼年者に裨益あること、泰西の教育家も、之を説く、予も亦自ら記す、予の八九歳前後に當てや、習子の元より、大嫌にて、近隣の兒童と指麾して、偽戦を爲すにあらざれば、則ち夫を野外に逐ひ、弓を林間に射る等の、悪る遊び勝なりしも、幸に家に繪本豊

臣勳功記あり、内に在る時の、是れを母氏の膝下に、翻閱するを樂となしたりき、後來予の教育の、此に濫觴すること少らず、亦以て繪入本の、有用を見るに足る、故に予の切に繪入本類の發行を、綴字熱心の諸君に望む、新体文章の成功、亦蓋し斯に在ること多し

第六編 假名綴り書き方の上

綴字文の成功を謀るに、先づ善良の書き方を、工夫せざる可らず、故に聊か愚の見る所により、其大要を論せん、とす、現在の有様を以てすれば、此必要の、特に假名會に多ければ、同會諸君にして、予の淺學粗才に嫌なく、虚懷平心の熟察を下されんとを、予の偏に希望するなり、抑も假名文章衰退の原因の、前に既に詳論し置きたる通りなれば、今にして、盛に

假名綴の新文体を起さんとせむるに、深く前轍を鑑み、非常の大果斷を以て、之を救正し、大に書き方を改良するにあらざれば、假名綴の振起の殆んど將來に望なからんとす、果して然れば、假名會今日の苦辛の、遂に一抔の水泡に属せんとす、予が虚懷平心の熟察を、會員諸君に望む所以のもの、實に之れが爲めなり、

假名綴第一の改良は、分語法に在り、第二は字行を横行にするに在り、分語のこと、假名會の著書を見て、も十の八九は既に之を用ひ居るにより、之を定則となすに於て、異論のあかるべしと雖ども、字行を横行にするとい、或は種々に、非難語を構造するものあるべし、併し已に分語法を可とする以上、字行を横にするとい、附隨の必要もして、到底之を實行

せざる可らず、否とされ、決して重音語書綴りの、正鵠を得ること能はざ、此説獨り予の私見にあらず、彼の慧眼絶群の白石先生、亦既に之を數百年前に看破せり、先生の采覽異言を作るや、特に東音譜一卷を著し、假名綴りの一新法を創む、東音譜の原書の、予未だ之を見されども、其自序及び、凡例の嘗て之を甘雨亭叢書に讀む、先生深く我が假名文の、合字例なく、作文に便ならざるを悟る故に、

東方音韻母字（是の五十音を總稱して云ふ）蓋倣琴譜而作、但合字之法不具其体耳、琴譜字母、一音一字、而一音難可一字、該必合數字之體、以取數字之文、猶琴有半滿之字、於絃上之音、曲盡其妙、故今有二合三合四合之音、皆倣琴譜、以立合字之例、と説き、又下行文字の、重音語に適せざるを悟り、

中國之字其書下行蓋以一音一讀故耳外國之字有二合三合四合之音亦有其字故其書不得不橫行

と論せり先生の所謂合字の即ち今日の綴字の謂なり既に綴字の例を定むる時の假名字を用ふるにも横行を要すると明なり但し左行右行の差の綴字の利害に於て下行横行の差ほど大關係あるにあらず先生夙に是等の理を悟り先づ横行の字義を定め左右行の中にては右行を取り

左之右之亦從其俗耳則今所定字例凡其音二合者皆從右行以便合呼

と記せり先生の東音譜の元西洋語を寫すか爲めに設けたる者なるべしと雖も其の我五十音を評し合字之法不具其體との一語の廣く假名文の欲典を一括するに足る今若し

采覽異言五卷略記
五大洲地勢純用漢文
獨地名人名未經漢譯者用片假名其書主記事與東音譜異趣絕不言及綴字合言事也

先生の卓見を参考し而して日本語の重音語にして二合三合四合の音なると所謂外國の語に同じきを知らば之を文字に綴るに所謂合字即ち綴字分語の法を用ふる可らざると明なり已に綴字分語を用ふれば之を横行にせざる可らざると亦極めて明なり勿論予が未だ采覽異言を目撃せずしての推察に據れば先生の采覽異言の通常の漢字交の日本文にて書し其間に合字を挿入したる者かと思はるれば横行の唯合字の分のみなるべけれども全文を總て綴字となす思考を立る以上の總て横行にすべき理の論せずして明かり何となれば長短も同じらざる一語一語をば横に綴り之を支那文の如く下行に排置するとい餘事をさて置き實際に行われざるなり

横行先左而後右不
特便於覽閱又便於
作字余欲綴漢文亦
倣之

改良の第三の文字を横行に決する以上の、左右行の中に就
き、右行を取り、左より右に行くと、西歐書の如くするに在り、
前にも云ふ如く、左行右行の差の綴字の利害に、大關係なし
との云へども、人身の概ね右半に力多き者なれば、眼を動す
にも、字を書くにも、左より右に轉るる、右より左に轉する
よりも、自在なる如くに覺ゆ、其れ故にや、外國よても、最も進
歩きたる文章、即ち梵書を始め、希臘羅馬及び歐洲各國、皆右
行法を用ふ、且つ一字一字を書くにも、左側より始む、左行の
書の、獨り行を左行にするのみならず、字を書くも亦、右側よ
り始むる思考とを、左行書の新聞紙等を見るに、左下りの字
多し、字形美麗ならざるも、或は茲に因る歟、今や日本の
假名字の、左側より始むること、歐羅巴字と同じければ、是に

付きて、假名綴字の、左より右に行くと、自然とするを知る
べし、故に白石先生も、今所定字例、皆從右行、以便合呼と云ひ
れ、右行法を取られたり、如之現時我國後進の、歐洲の書を讀
むこと、既に盛あり、將來益々然るべし、歐人の日本書を學ぶ
もの、亦増加すべし、同じく、体裁の一なるを便利とす、是亦
右行を取るべきの一考となすに足る、
扱又印行書の、成るたけ、點劃のきちきちしたるを貴ぶ、故に
羅馬字にて、印行書に、所謂印行字、即ち支那字の楷書あり、
り、文中よて一語、又一句を、特別に際立てんとする時に、
いたりく字、即ち行書を用ふ、奔字、即ち草書の、之を用ひず、日
本の片假名の、即ち印行字にして、平假名の書様により、行書
の用をもなすべく、草書の用をも爲すべき者なり、故に愚考

以下數條説入細微
尤有益於實用

よての假名綴の印行書の重に片假名を用んとす、勿論從來の活字の綴字の爲先に鑄造したる者にあらざれば、稍横幅廣し、因て綴字文に、横幅を狭くし、密接植字の便も供すべし、又羅馬字に、上り字、下り字、短字、長字の別ある如く、假名字にも、上り字、下り字、及び短字を作ること、譬へば、ホトオ等の上り字として、中央の線を上へ延し、チリウ等の下り字として、下行の線を下に延し、ロハニ等の短字として、真中に置くべし、但し此の類を最も多しとす、濁り點の從來右側に置きしかども、是れは横行の綴りに、不便なれば、西洋文の打點の如く、字上に移し、少し右手に置べし、パピポの唇音も必要なれば、是亦濁點の如くに作るべし、但し字上に遷す時、圓點より半圓を便とすと思はる、西洋にても、半圓の用

れども、圓を用ひず、支那字四聲の別も、半圓を用也、之に倣て可なり、ッの縮音も亦半圓を付して可ならん、此法を用ひば、横行假名綴りの印行字を得ると甚容易なり、予が横行假名綴を主張するに付き、最も満足に思ふは、日本にて、已に心を茲に傾る者ありと見へ、かなのみちひきに、注文手紙の例を擧たる中に、濱松より來りし者にて、分語右行の簡短なる假名綴り文を載す、編輯者の之を、ことに、ことなれるのつぎのてがみにて、モトを、ひたりより、みぎにかきつゞれり、いまいさゝかもあふためず、ことさらにもとのまゝに、しるして、こゝに、かゝぐ」と評し居れども、此の文例の予が最も好む所あり、又、かなのゑるべに「めづらしきゝかたをのす」とある所に、五十音の發聲を論

讀點等の功用、極めて大なり、蓋し言語の、口にて話すに、聲音の調子にて、抑揚斷續を示し、條理を整ふとを得れども、書上は筆する時の、已に活聲なきにより、點法を以て、之を代ふの、當然のとなり

次に假名綴を、横行とすれば、早書の字体の、如何とする歟の問あるへし、愚考に、目今の急に、先づ印行書の体裁を定め、世間の信を得るに在り、且つ我假名字の、羅馬字の印行字に比すれば、甚だ簡なるのみならず、却て平假名よりも、簡なれば、當分其儘に用たりとて、不便利の多からざるべし、併し若し早き字体を作らんと欲せば、片假名の体裁に、少しの變通を加へば、早書き字体を得ること、容易なるべし、

以下數條以邦語與洋語比較逐次論辨然余不通洋學不能判其是非也

次はガノニナ等の、其附屬の語より、離して綴るべきや、否や、是れ假名綴り書方を定むるに、一緊要の問題とを、今日の處、羅馬字會の、之れを離し、假名字會も、十の八九の、之を離せり、予の考の、之に異なり、案するに、佛語の名詞の、語尾の變化なく、前置詞を以て、語格を支配す、英語も亦所持格の一法より、之を用ふることあるの外に、佛語と同じ、而るに本邦にて、最も行はるゝ所の、西洋學の、英佛學なるにより、遂は我がニナ、英佛の前置詞と同じきものと見做し、後置詞として、分書する考の、起りたると多き歟と、察せらる、予意ふに、日本のガノニナ類の、概ね皆英佛の前置詞の類より、あらずして、寧ろ語尾の屈曲なり、其第一の證據に、日本のガノニナ類の、談話の際に、概ね其附屬の語と、密接混合して發音し、英佛の

前置詞と其附屬の語との間に、瑣少の斷裁あると同じか
らず、歐洲にても、名詞の格を示すに、語尾の屈曲を用ふる語
法の、甚だ少からず、溯て羅馬希臘に至れば、語尾の屈曲の、前
置詞を用ふるよりも多し、而して語尾の屈曲の、皆接續して
綴るを例とす、今や日本のガノニヲモ、亦語尾の屈曲なりと
知らば、宜く之を接續して書すべし、離し書すれば、拾ひ讀の
弊を生じ、語勢を全すること能はず、抑々ガノニヲ等の、單立
して、全く意味なき音聲なり、意味なき音聲を離して、多く
文中に挿入するの、文章の美をなさざる者として、之を擯斥す
るの、西洋言語學者の常論なり、然るに英佛語なごの、語運の
艱難は遭遇し、語尾の變化によりて、名詞の格を立るとい、殆
ど滅亡し盡き、之を補ふに、前置詞を以てするが故に、單立し

て、殆ど意味なき音聲と、多く挿入せざるを得ざるの惜むべ
しとの歎の、書上に見もし、口頭に聞もしたり、英佛の前置詞、
猶此歎あり、語尻の變化に適ざるガノニヲ、豈一切離して挿
入すべけんや

第七編 假名綴り書き方の下

前編に論せし如く、ガノニヲの類の、接續して綴るとすれば
語根の一部分ざるに紛ひしき場合あるべしとの、非難ある
べし之を防ぐ愚考の、英獨の所持格の例に倣ひ高コンマを
用ひ、「¹、²、³、⁴、⁵、⁶、⁷、⁸、⁹、¹⁰、¹¹、¹²、¹³、¹⁴、¹⁵、¹⁶、¹⁷、¹⁸、¹⁹、²⁰、²¹、²²、²³、²⁴、²⁵、²⁶、²⁷、²⁸、²⁹、³⁰、³¹、³²、³³、³⁴、³⁵、³⁶、³⁷、³⁸、³⁹、⁴⁰、⁴¹、⁴²、⁴³、⁴⁴、⁴⁵、⁴⁶、⁴⁷、⁴⁸、⁴⁹、⁵⁰、⁵¹、⁵²、⁵³、⁵⁴、⁵⁵、⁵⁶、⁵⁷、⁵⁸、⁵⁹、⁶⁰、⁶¹、⁶²、⁶³、⁶⁴、⁶⁵、⁶⁶、⁶⁷、⁶⁸、⁶⁹、⁷⁰、⁷¹、⁷²、⁷³、⁷⁴、⁷⁵、⁷⁶、⁷⁷、⁷⁸、⁷⁹、⁸⁰、⁸¹、⁸²、⁸³、⁸⁴、⁸⁵、⁸⁶、⁸⁷、⁸⁸、⁸⁹、⁹⁰、⁹¹、⁹²、⁹³、⁹⁴、⁹⁵、⁹⁶、⁹⁷、⁹⁸、⁹⁹、¹⁰⁰、¹⁰¹、¹⁰²、¹⁰³、¹⁰⁴、¹⁰⁵、¹⁰⁶、¹⁰⁷、¹⁰⁸、¹⁰⁹、¹¹⁰、¹¹¹、¹¹²、¹¹³、¹¹⁴、¹¹⁵、¹¹⁶、¹¹⁷、¹¹⁸、¹¹⁹、¹²⁰、¹²¹、¹²²、¹²³、¹²⁴、¹²⁵、¹²⁶、¹²⁷、¹²⁸、¹²⁹、¹³⁰、¹³¹、¹³²、¹³³、¹³⁴、¹³⁵、¹³⁶、¹³⁷、¹³⁸、¹³⁹、¹⁴⁰、¹⁴¹、¹⁴²、¹⁴³、¹⁴⁴、¹⁴⁵、¹⁴⁶、¹⁴⁷、¹⁴⁸、¹⁴⁹、¹⁵⁰、¹⁵¹、¹⁵²、¹⁵³、¹⁵⁴、¹⁵⁵、¹⁵⁶、¹⁵⁷、¹⁵⁸、¹⁵⁹、¹⁶⁰、¹⁶¹、¹⁶²、¹⁶³、¹⁶⁴、¹⁶⁵、¹⁶⁶、¹⁶⁷、¹⁶⁸、¹⁶⁹、¹⁷⁰、¹⁷¹、¹⁷²、¹⁷³、¹⁷⁴、¹⁷⁵、¹⁷⁶、¹⁷⁷、¹⁷⁸、¹⁷⁹、¹⁸⁰、¹⁸¹、¹⁸²、¹⁸³、¹⁸⁴、¹⁸⁵、¹⁸⁶、¹⁸⁷、¹⁸⁸、¹⁸⁹、¹⁹⁰、¹⁹¹、¹⁹²、¹⁹³、¹⁹⁴、¹⁹⁵、¹⁹⁶、¹⁹⁷、¹⁹⁸、¹⁹⁹、²⁰⁰、²⁰¹、²⁰²、²⁰³、²⁰⁴、²⁰⁵、²⁰⁶、²⁰⁷、²⁰⁸、²⁰⁹、²¹⁰、²¹¹、²¹²、²¹³、²¹⁴、²¹⁵、²¹⁶、²¹⁷、²¹⁸、²¹⁹、²²⁰、²²¹、²²²、²²³、²²⁴、²²⁵、²²⁶、²²⁷、²²⁸、²²⁹、²³⁰、²³¹、²³²、²³³、²³⁴、²³⁵、²³⁶、²³⁷、²³⁸、²³⁹、²⁴⁰、²⁴¹、²⁴²、²⁴³、²⁴⁴、²⁴⁵、²⁴⁶、²⁴⁷、²⁴⁸、²⁴⁹、²⁵⁰、²⁵¹、²⁵²、²⁵³、²⁵⁴、²⁵⁵、²⁵⁶、²⁵⁷、²⁵⁸、²⁵⁹、²⁶⁰、²⁶¹、²⁶²、²⁶³、²⁶⁴、²⁶⁵、²⁶⁶、²⁶⁷、²⁶⁸、²⁶⁹、²⁷⁰、²⁷¹、²⁷²、²⁷³、²⁷⁴、²⁷⁵、²⁷⁶、²⁷⁷、²⁷⁸、²⁷⁹、²⁸⁰、²⁸¹、²⁸²、²⁸³、²⁸⁴、²⁸⁵、²⁸⁶、²⁸⁷、²⁸⁸、²⁸⁹、²⁹⁰、²⁹¹、²⁹²、²⁹³、²⁹⁴、²⁹⁵、²⁹⁶、²⁹⁷、²⁹⁸、²⁹⁹、³⁰⁰、³⁰¹、³⁰²、³⁰³、³⁰⁴、³⁰⁵、³⁰⁶、³⁰⁷、³⁰⁸、³⁰⁹、³¹⁰、³¹¹、³¹²、³¹³、³¹⁴、³¹⁵、³¹⁶、³¹⁷、³¹⁸、³¹⁹、³²⁰、³²¹、³²²、³²³、³²⁴、³²⁵、³²⁶、³²⁷、³²⁸、³²⁹、³³⁰、³³¹、³³²、³³³、³³⁴、³³⁵、³³⁶、³³⁷、³³⁸、³³⁹、³⁴⁰、³⁴¹、³⁴²、³⁴³、³⁴⁴、³⁴⁵、³⁴⁶、³⁴⁷、³⁴⁸、³⁴⁹、³⁵⁰、³⁵¹、³⁵²、³⁵³、³⁵⁴、³⁵⁵、³⁵⁶、³⁵⁷、³⁵⁸、³⁵⁹、³⁶⁰、³⁶¹、³⁶²、³⁶³、³⁶⁴、³⁶⁵、³⁶⁶、³⁶⁷、³⁶⁸、³⁶⁹、³⁷⁰、³⁷¹、³⁷²、³⁷³、³⁷⁴、³⁷⁵、³⁷⁶、³⁷⁷、³⁷⁸、³⁷⁹、³⁸⁰、³⁸¹、³⁸²、³⁸³、³⁸⁴、³⁸⁵、³⁸⁶、³⁸⁷、³⁸⁸、³⁸⁹、³⁹⁰、³⁹¹、³⁹²、³⁹³、³⁹⁴、³⁹⁵、³⁹⁶、³⁹⁷、³⁹⁸、³⁹⁹、⁴⁰⁰、⁴⁰¹、⁴⁰²、⁴⁰³、⁴⁰⁴、⁴⁰⁵、⁴⁰⁶、⁴⁰⁷、⁴⁰⁸、⁴⁰⁹、⁴¹⁰、⁴¹¹、⁴¹²、⁴¹³、⁴¹⁴、⁴¹⁵、⁴¹⁶、⁴¹⁷、⁴¹⁸、⁴¹⁹、⁴²⁰、⁴²¹、⁴²²、⁴²³、⁴²⁴、⁴²⁵、⁴²⁶、⁴²⁷、⁴²⁸、⁴²⁹、⁴³⁰、⁴³¹、⁴³²、⁴³³、⁴³⁴、⁴³⁵、⁴³⁶、⁴³⁷、⁴³⁸、⁴³⁹、⁴⁴⁰、⁴⁴¹、⁴⁴²、⁴⁴³、⁴⁴⁴、⁴⁴⁵、⁴⁴⁶、⁴⁴⁷、⁴⁴⁸、⁴⁴⁹、⁴⁵⁰、⁴⁵¹、⁴⁵²、⁴⁵³、⁴⁵⁴、⁴⁵⁵、⁴⁵⁶、⁴⁵⁷、⁴⁵⁸、⁴⁵⁹、⁴⁶⁰、⁴⁶¹、⁴⁶²、⁴⁶³、⁴⁶⁴、⁴⁶⁵、⁴⁶⁶、⁴⁶⁷、⁴⁶⁸、⁴⁶⁹、⁴⁷⁰、⁴⁷¹、⁴⁷²、⁴⁷³、⁴⁷⁴、⁴⁷⁵、⁴⁷⁶、⁴⁷⁷、⁴⁷⁸、⁴⁷⁹、⁴⁸⁰、⁴⁸¹、⁴⁸²、⁴⁸³、⁴⁸⁴、⁴⁸⁵、⁴⁸⁶、⁴⁸⁷、⁴⁸⁸、⁴⁸⁹、⁴⁹⁰、⁴⁹¹、⁴⁹²、⁴⁹³、⁴⁹⁴、⁴⁹⁵、⁴⁹⁶、⁴⁹⁷、⁴⁹⁸、⁴⁹⁹、⁵⁰⁰、⁵⁰¹、⁵⁰²、⁵⁰³、⁵⁰⁴、⁵⁰⁵、⁵⁰⁶、⁵⁰⁷、⁵⁰⁸、⁵⁰⁹、⁵¹⁰、⁵¹¹、⁵¹²、⁵¹³、⁵¹⁴、⁵¹⁵、⁵¹⁶、⁵¹⁷、⁵¹⁸、⁵¹⁹、⁵²⁰、⁵²¹、⁵²²、⁵²³、⁵²⁴、⁵²⁵、⁵²⁶、⁵²⁷、⁵²⁸、⁵²⁹、⁵³⁰、⁵³¹、⁵³²、⁵³³、⁵³⁴、⁵³⁵、⁵³⁶、⁵³⁷、⁵³⁸、⁵³⁹、⁵⁴⁰、⁵⁴¹、⁵⁴²、⁵⁴³、⁵⁴⁴、⁵⁴⁵、⁵⁴⁶、⁵⁴⁷、⁵⁴⁸、⁵⁴⁹、⁵⁵⁰、⁵⁵¹、⁵⁵²、⁵⁵³、⁵⁵⁴、⁵⁵⁵、⁵⁵⁶、⁵⁵⁷、⁵⁵⁸、⁵⁵⁹、⁵⁶⁰、⁵⁶¹、⁵⁶²、⁵⁶³、⁵⁶⁴、⁵⁶⁵、⁵⁶⁶、⁵⁶⁷、⁵⁶⁸、⁵⁶⁹、⁵⁷⁰、⁵⁷¹、⁵⁷²、⁵⁷³、⁵⁷⁴、⁵⁷⁵、⁵⁷⁶、⁵⁷⁷、⁵⁷⁸、⁵⁷⁹、⁵⁸⁰、⁵⁸¹、⁵⁸²、⁵⁸³、⁵⁸⁴、⁵⁸⁵、⁵⁸⁶、⁵⁸⁷、⁵⁸⁸、⁵⁸⁹、⁵⁹⁰、⁵⁹¹、⁵⁹²、⁵⁹³、⁵⁹⁴、⁵⁹⁵、⁵⁹⁶、⁵⁹⁷、⁵⁹⁸、⁵⁹⁹、⁶⁰⁰、⁶⁰¹、⁶⁰²、⁶⁰³、⁶⁰⁴、⁶⁰⁵、⁶⁰⁶、⁶⁰⁷、⁶⁰⁸、⁶⁰⁹、⁶¹⁰、⁶¹¹、⁶¹²、⁶¹³、⁶¹⁴、⁶¹⁵、⁶¹⁶、⁶¹⁷、⁶¹⁸、⁶¹⁹、⁶²⁰、⁶²¹、⁶²²、⁶²³、⁶²⁴、⁶²⁵、⁶²⁶、⁶²⁷、⁶²⁸、⁶²⁹、⁶³⁰、⁶³¹、⁶³²、⁶³³、⁶³⁴、⁶³⁵、⁶³⁶、⁶³⁷、⁶³⁸、⁶³⁹、⁶⁴⁰、⁶⁴¹、⁶⁴²、⁶⁴³、⁶⁴⁴、⁶⁴⁵、⁶⁴⁶、⁶⁴⁷、⁶⁴⁸、⁶⁴⁹、⁶⁵⁰、⁶⁵¹、⁶⁵²、⁶⁵³、⁶⁵⁴、⁶⁵⁵、⁶⁵⁶、⁶⁵⁷、⁶⁵⁸、⁶⁵⁹、⁶⁶⁰、⁶⁶¹、⁶⁶²、⁶⁶³、⁶⁶⁴、⁶⁶⁵、⁶⁶⁶、⁶⁶⁷、⁶⁶⁸、⁶⁶⁹、⁶⁷⁰、⁶⁷¹、⁶⁷²、⁶⁷³、⁶⁷⁴、⁶⁷⁵、⁶⁷⁶、⁶⁷⁷、⁶⁷⁸、⁶⁷⁹、⁶⁸⁰、⁶⁸¹、⁶⁸²、⁶⁸³、⁶⁸⁴、⁶⁸⁵、⁶⁸⁶、⁶⁸⁷、⁶⁸⁸、⁶⁸⁹、⁶⁹⁰、⁶⁹¹、⁶⁹²、⁶⁹³、⁶⁹⁴、⁶⁹⁵、⁶⁹⁶、⁶⁹⁷、⁶⁹⁸、⁶⁹⁹、⁷⁰⁰、⁷⁰¹、⁷⁰²、⁷⁰³、⁷⁰⁴、⁷⁰⁵、⁷⁰⁶、⁷⁰⁷、⁷⁰⁸、⁷⁰⁹、⁷¹⁰、⁷¹¹、⁷¹²、⁷¹³、⁷¹⁴、⁷¹⁵、⁷¹⁶、⁷¹⁷、⁷¹⁸、⁷¹⁹、⁷²⁰、⁷²¹、⁷²²、⁷²³、⁷²⁴、⁷²⁵、⁷²⁶、⁷²⁷、⁷²⁸、⁷²⁹、⁷³⁰、⁷³¹、⁷³²、⁷³³、⁷³⁴、⁷³⁵、⁷³⁶、⁷³⁷、⁷³⁸、⁷³⁹、⁷⁴⁰、⁷⁴¹、⁷⁴²、⁷⁴³、⁷⁴⁴、⁷⁴⁵、⁷⁴⁶、⁷⁴⁷、⁷⁴⁸、⁷⁴⁹、⁷⁵⁰、⁷⁵¹、⁷⁵²、⁷⁵³、⁷⁵⁴、⁷⁵⁵、⁷⁵⁶、⁷⁵⁷、⁷⁵⁸、⁷⁵⁹、⁷⁶⁰、⁷⁶¹、⁷⁶²、⁷⁶³、⁷⁶⁴、⁷⁶⁵、⁷⁶⁶、⁷⁶⁷、⁷⁶⁸、⁷⁶⁹、⁷⁷⁰、⁷⁷¹、⁷⁷²、⁷⁷³、⁷⁷⁴、⁷⁷⁵、⁷⁷⁶、⁷⁷⁷、⁷⁷⁸、⁷⁷⁹、⁷⁸⁰、⁷⁸¹、⁷⁸²、⁷⁸³、⁷⁸⁴、⁷⁸⁵、⁷⁸⁶、⁷⁸⁷、⁷⁸⁸、⁷⁸⁹、⁷⁹⁰、⁷⁹¹、⁷⁹²、⁷⁹³、⁷⁹⁴、⁷⁹⁵、⁷⁹⁶、⁷⁹⁷、⁷⁹⁸、⁷⁹⁹、⁸⁰⁰、⁸⁰¹、⁸⁰²、⁸⁰³、⁸⁰⁴、⁸⁰⁵、⁸⁰⁶、⁸⁰⁷、⁸⁰⁸、⁸⁰⁹、⁸¹⁰、⁸¹¹、⁸¹²、⁸¹³、⁸¹⁴、⁸¹⁵、⁸¹⁶、⁸¹⁷、⁸¹⁸、⁸¹⁹、⁸²⁰、⁸²¹、⁸²²、⁸²³、⁸²⁴、⁸²⁵、⁸²⁶、⁸²⁷、⁸²⁸、⁸²⁹、⁸³⁰、⁸³¹、⁸³²、⁸³³、⁸³⁴、⁸³⁵、⁸³⁶、⁸³⁷、⁸³⁸、⁸³⁹、⁸⁴⁰、⁸⁴¹、⁸⁴²、⁸⁴³、⁸⁴⁴、⁸⁴⁵、⁸⁴⁶、⁸⁴⁷、⁸⁴⁸、⁸⁴⁹、⁸⁵⁰、⁸⁵¹、⁸⁵²、⁸⁵³、⁸⁵⁴、⁸⁵⁵、⁸⁵⁶、⁸⁵⁷、⁸⁵⁸、⁸⁵⁹、⁸⁶⁰、⁸⁶¹、⁸⁶²、⁸⁶³、⁸⁶⁴、⁸⁶⁵、⁸⁶⁶、⁸⁶⁷、⁸⁶⁸、⁸⁶⁹、⁸⁷⁰、⁸⁷¹、⁸⁷²、⁸⁷³、⁸⁷⁴、⁸⁷⁵、⁸⁷⁶、⁸⁷⁷、⁸⁷⁸、⁸⁷⁹、⁸⁸⁰、⁸⁸¹、⁸⁸²、⁸⁸³、⁸⁸⁴、⁸⁸⁵、⁸⁸⁶、⁸⁸⁷、⁸⁸⁸、⁸⁸⁹、⁸⁹⁰、⁸⁹¹、⁸⁹²、⁸⁹³、⁸⁹⁴、⁸⁹⁵、⁸⁹⁶、⁸⁹⁷、⁸⁹⁸、⁸⁹⁹、⁹⁰⁰、⁹⁰¹、⁹⁰²、⁹⁰³、⁹⁰⁴、⁹⁰⁵、⁹⁰⁶、⁹⁰⁷、⁹⁰⁸、⁹⁰⁹、⁹¹⁰、⁹¹¹、⁹¹²、⁹¹³、⁹¹⁴、⁹¹⁵、⁹¹⁶、⁹¹⁷、⁹¹⁸、⁹¹⁹、⁹²⁰、⁹²¹、⁹²²、⁹²³、⁹²⁴、⁹²⁵、⁹²⁶、⁹²⁷、⁹²⁸、⁹²⁹、⁹³⁰、⁹³¹、⁹³²、⁹³³、⁹³⁴、⁹³⁵、⁹³⁶、⁹³⁷、⁹³⁸、⁹³⁹、⁹⁴⁰、⁹⁴¹、⁹⁴²、⁹⁴³、⁹⁴⁴、⁹⁴⁵、⁹⁴⁶、⁹⁴⁷、⁹⁴⁸、⁹⁴⁹、⁹⁵⁰、⁹⁵¹、⁹⁵²、⁹⁵³、⁹⁵⁴、⁹⁵⁵、⁹⁵⁶、⁹⁵⁷、⁹⁵⁸、⁹⁵⁹、⁹⁶⁰、⁹⁶¹、⁹⁶²、⁹⁶³、⁹⁶⁴、⁹⁶⁵、⁹⁶⁶、⁹⁶⁷、⁹⁶⁸、⁹⁶⁹、⁹⁷⁰、⁹⁷¹、⁹⁷²、⁹⁷³、⁹⁷⁴、⁹⁷⁵、⁹⁷⁶、⁹⁷⁷、⁹⁷⁸、⁹⁷⁹、⁹⁸⁰、⁹⁸¹、⁹⁸²、⁹⁸³、⁹⁸⁴、⁹⁸⁵、⁹⁸⁶、⁹⁸⁷、⁹⁸⁸、⁹⁸⁹、⁹⁹⁰、⁹⁹¹、⁹⁹²、⁹⁹³、⁹⁹⁴、⁹⁹⁵、⁹⁹⁶、⁹⁹⁷、⁹⁹⁸、⁹⁹⁹、¹⁰⁰⁰、¹⁰⁰¹、¹⁰⁰²、¹⁰⁰³、¹⁰⁰⁴、¹⁰⁰⁵、¹⁰⁰⁶、¹⁰⁰⁷、¹⁰⁰⁸、¹⁰⁰⁹、¹⁰¹⁰、¹⁰¹¹、¹⁰¹²、¹⁰¹³、¹⁰¹⁴、¹⁰¹⁵、¹⁰¹⁶、¹⁰¹⁷、¹⁰¹⁸、¹⁰¹⁹、¹⁰²⁰、¹⁰²¹、¹⁰²²、¹⁰²³、¹⁰²⁴、¹⁰²⁵、¹⁰²⁶、¹⁰²⁷、¹⁰²⁸、¹⁰²⁹、¹⁰³⁰、¹⁰³¹、¹⁰³²、¹⁰³³、¹⁰³⁴、¹⁰³⁵、¹⁰³⁶、¹⁰³⁷、¹⁰³⁸、¹⁰³⁹、¹⁰⁴⁰、¹⁰⁴¹、¹⁰⁴²、¹⁰⁴³、¹⁰⁴⁴、¹⁰⁴⁵、¹⁰⁴⁶、¹⁰⁴⁷、¹⁰⁴⁸、¹⁰⁴⁹、¹⁰⁵⁰、¹⁰⁵¹、¹⁰⁵²、¹⁰⁵³、¹⁰⁵⁴、¹⁰⁵⁵、¹⁰⁵⁶、¹⁰⁵⁷、¹⁰⁵⁸、¹⁰⁵⁹、¹⁰⁶⁰、¹⁰⁶¹、¹⁰⁶²、¹⁰⁶³、¹⁰⁶⁴、¹⁰⁶⁵、¹⁰⁶⁶、¹⁰⁶⁷、¹⁰⁶⁸、¹⁰⁶⁹、¹⁰⁷⁰、¹⁰⁷¹、¹⁰⁷²、¹⁰⁷³、¹⁰⁷⁴、¹⁰⁷⁵、¹⁰⁷⁶、¹⁰⁷⁷、¹⁰⁷⁸、¹⁰⁷⁹、¹⁰⁸⁰、¹⁰⁸¹、¹⁰⁸²、¹⁰⁸³、¹⁰⁸⁴、¹⁰⁸⁵、¹⁰⁸⁶、¹⁰⁸⁷、¹⁰⁸⁸、¹⁰⁸⁹、¹⁰⁹⁰、¹⁰⁹¹、¹⁰⁹²、¹⁰⁹³、¹⁰⁹⁴、¹⁰⁹⁵、¹⁰⁹⁶、¹⁰⁹⁷、¹⁰⁹⁸、¹⁰⁹⁹、¹¹⁰⁰、¹¹⁰¹、¹¹⁰²、¹¹⁰³、¹¹⁰⁴、¹¹⁰⁵、¹¹⁰⁶、¹¹⁰⁷、¹¹⁰⁸、¹¹⁰⁹、¹¹¹⁰、¹¹¹¹、¹¹¹²、¹¹¹³、¹¹¹⁴、¹¹¹⁵、¹¹¹⁶、¹¹¹⁷、¹¹¹⁸、¹¹¹⁹、¹¹²⁰、¹¹²¹、¹¹²²、¹¹²³、¹¹²⁴、¹¹²⁵、¹¹²⁶、¹¹²⁷、¹¹²⁸、¹¹²⁹、¹¹³⁰、¹¹³¹、¹¹³²、¹¹³³、¹¹³⁴、¹¹³⁵、¹¹³⁶、¹¹³⁷、¹¹³⁸、¹¹³⁹、¹¹⁴⁰、¹¹⁴¹、¹¹⁴²、¹¹⁴³、¹¹⁴⁴、¹¹⁴⁵、¹¹⁴⁶、¹¹⁴⁷、¹¹⁴⁸、¹¹⁴⁹、¹¹⁵⁰、¹¹⁵¹、¹¹⁵²、¹¹⁵³、¹¹⁵⁴、¹¹⁵⁵、¹¹⁵⁶、¹¹⁵⁷、¹¹⁵⁸、¹¹⁵⁹、¹¹⁶⁰、¹¹⁶¹、¹¹⁶²、¹¹⁶³、¹¹⁶⁴、¹¹⁶⁵、¹¹⁶⁶、¹¹⁶⁷、¹¹⁶⁸、

と雖とも、一目瞭然にして、誦讀に便なる方よりして云ふ時の付するを勝れりとす、付すると付せざるの可否の付するの煩と便との權衡孰か重に在り、予の觀察にては、付するの煩の實に瑣細にして、殆んど煩と云ふ可らず、且つ希臘語以來、歐洲各國の文章と平均して云ふ時の、字上に種々の打點を施す組立の書方の、其多に居り、打點を用ふると、我假名に、往々濁點唇點を用る比にあらず、去れば、我假名綴に、一二の符牒を増たりとて、餘計の煩雜となす可らざると明あり、英書の打點甚だ少ければ、英書のみを勉強したる人にては、打點の多を好まざるもあるへけれども、其實英書にては、打點少きが故に、音聲の異同を示すと、能ざる缺典ありとの論も、多き位なれば、英書の打點少きを以て、標準となす可らず、又語

格と示すが爲にては、符牒を付するを便とするならんと思ふの羅馬書の例なり、英書は亞き、打點の少きの、羅馬書なり、羅馬書にては、語格と示す符牒なきにあらされども、之を用ふる場合に至るに、羅馬語にては、他國の話の如く、名詞と一目に悟るべき所謂冠詞ある者なきにより、名詞を見出し、且つ格を知るより、語尾の變化に據る可らざらずと雖も、語尾の變化にては、語根の一部分と紛らしきもあれば、動詞の變化と、紛らしきもあり、之が爲め、初學の苦むと多し、予も亦聊か自己の經驗に據て、之を知る勿論冠詞の、無くて濟むならば、無きが好けれども、他は名詞動詞を、一目に見分べき工夫なき時の、冠詞の、便利なり、且つ英語の冠詞の外に、冠詞にも變化ありて、語格を示すが故に、之と覺え込たる後の、甚だ便利なり、日

本語にも羅馬語の如く冠詞(和歌の枕詞と混て可らす)なし、
 而してガノニチ等の字を以て語根の一部分とせる詞も少
 らず、故に符牒を用ふる時、一方に無くて濟む冠詞なき
 便あり、一方に、一目瞭然と、字の性質と格とを示す便あり、
 旁以て之を用ひんと欲するなり、
 予が茲にガノニチ類と云ふに「マデ」カラ「ヨリ」マデモ等數音
 を合して成る者をも併せて言ふ、故に其中より離して綴る
 を、勝れりとするも、少しのあらん、此等の實際に當り、種類を
 擧て、規則を立つべし、例へば「サ」の俗言に「デサ」と云ふこ
 とあり、即ち「ニテサ」なり、又「ニサ」と云ふ語あり、其意「マ
 デサ」に同じ、「サ」の必らずしも、語尾に密接せざるを知る
 べし、故に「サ」の別書して可なり、又同じ名詞の後ま在るが

並舉俚語一讀了解

ノニチの類の音にても、場合により、意味を異とする者一二
 あり、此等の別符牒を用て可なり、例へば、

(一)「ヨリ」の「カラ」と同じく、一處又の一時より、他處又の他時
 に轉ずる意なれども、花より團子と云ふ場合の如き、即ち
 花より、團子が好しと云ふ、比較の意にて、藪カラ棒と云ふ
 語氣と、大に異なり、花カラ團子と云ふれず、因て斯る場合
 の「ヨリ」の「ヨリモ」の略音と知り、「ニ」ナシと書き、符
 牒をヨリの後に置き、ハナの後に置かず、以て普通の「ヨリ」と
 比較の「ヨリ」と區別せ、

(二)「ト」の、何々と共よの意味なる時と、「トナシテ」と云ふ如き
 意味の、略音の時とあり、雲と花の、けぢめもわかず、なりにけ
 り「ト」の「雲」と見し、深山の櫻、今日ぞ散「ト」と同じからず、因

余按雲與見豪傑與見此種與字亦共同意也櫻與雲一般彼氣象與豪傑一般故曰與耳但人與志天之與別是一義

て「ト共ニ」といふ場合の外、凡て「モホマ、ツキ」の如く、符牒と「ト」の後に付す、彼の豪傑と見えて、彼の正直と見えての類、皆同じ、「人トシテ」「人ニシテ」の類、「人トナシテ」「人ニシテ」と云ふ如き、二語より出てたるものなれば、雲と見しの例に倣ひ、「モト、マ、ツキ」「モ、ツキ」と綴る、之に反し「ニテ」の、「ニ於テ」又の「モツテ」の意味あれども共に語尾の一變化とし、「モ、ツキ」と綴るへし、

代名詞及び指稱代名詞の後に在る、ガノニナ、例へば、「ツガ」「コノ」「ツノ」「アノ」「ソノ」の類の、符牒を要せず、蓋し此等の語の、數も少く、且つ極めて簡短普通なればなり、西洋各國にてモ、代名詞及び指稱代名詞の屈曲法の、概一種の特例あり、我假名綴も、之に倣て可なり、

又日本の副詞に、形容詞又の動詞に、「ニト」を付して、作れるあり、此場合の「ニト」の猶「ニシテ」「トシテ」と云ふ如し、譬へば静々と立ち出づ、静々行くの静々として、靜にしての意にして、名詞の「ニト」譬へば、花に戯むる君と行く等の「ニト」と同じかゝす、然るに、副詞の「ニト」の、語根との混雜少きにより、接續して綴るも、符牒を用ひずして、可ならん、又句勢に關するガノニナも、粗同しくして、其位置の、常に動詞の尾に附屬す、因て概ね接續して書し、符牒を用ひず、譬へば「モ、ツキ」「モ、ツキ」の如し、

以上に述べる工夫により、今試に古和文を改め綴り、其例を左に示さん、但し此れの、示例の爲めなれば、殊更に文法上、多くの變化を集む、例へば、「コトノハ」を、平假名に書き、「イツレカウ

致吾人口舌古今變
遷所謂假名遣者亦
不得不變此論殊爲
卓識

其勞を償ふに足らず、特に發音の變遷已に久しければ、今にして恢復の成切も甚だ覺束なければ、和學者流の愛惜のさるとなから予ハ大奮發して

をしめどもとまらなくに春霞

かへる道にしたりぬと思へば

と斷念せんとを願ふなり、因て左の方法と述ぶ

(一) 支那字の假名なる「トウ」「タウ」「トフ」「シヤウ」「シヨウ」「セウ」「セフ」の類の音同くして、假名殊なる者の之を一に歸し、譬へば「トウ」「シヨウ」となせし、抑々是等の區別ハ、重に四聲の別に因て、定めたるべく、隨て往時の發音も殊にして、譬へば「トウ」の直音にして、羅馬字の トウ とうの如く、タウ タウの斜音にして Tau の如くなりし歟も、知る可らずと雖も、後世に至てハ、發

音の別もなく、四聲の分ちなざる、少も用なし、之と省略するを便とす、且つ日本まで普通に用ふる支那語ハ、大概二字乃至三字を合したるもの多きま、居るにより省略法を用ひたりとて、決して不都合なしと信す、

(二) 「エ」「エ」ハ、發音上已に區別なし、ヘも語の下に在る時ハ、概ね皆「エ」「エ」の發音と、少しも殊なるとなし、而して此三字を書分ると甚だ面倒なり、愚考にてハ、最も舊法に近く、且つ區別の容易なる爲め、名詞にハ「エ」を用ひ、其他ハ總て「エ」を用ひんと欲す、但しが「ニ」ハ、屬する「ヘ」ハ、普通にもあり、書くにも便利なれば、在來の如く「ヘ」を用ふ

(三) 動詞の終りの「ニ」ハ、「オ」の如く響く時と「エ」の如く響く時と「ウ」の如く響く時とあり、「オ」の如く響く場合ハ、普通にして、困

難なければ、舊法を存し、「ユ」の如く響く場合、「眞」に「ユ」を用ふる動詞もあるゆゑ、書分け甚だ面倒なり、因て「ユ」を響く語尾の「ふ」を廢し、「ユ」を用ひ、「ウ」を響く場合も、「コ」を廢し、「ウ」を用ふべし、是れ却て語氣の明瞭を覺ゆ、

(四)「ハ」の語中に在る時、「ワ」を響くこと多くして紛ひし、因て語中の「ハ」の「ワ」と響く場合、「渾」て「ワ」に従ひて、「ニ」ハの「ハ」のみの舊法に従ひ、「ハ」を用ふべし、

(五)「イ」「井」及び「イ」「井」の如く響く、「ヒ」の區別亦面倒なり、因て名詞より「井」を用ひ、其他の「イ」を用ふ、

(六)「オ」「チ」及び「オ」「チ」の如く響く、「ホ」の區別も、名詞に「チ」を用ひ、其他に「オ」を用ふると定め、而して「テ」「ニ」「チ」ハの「チ」ハ、舊に従ふ、

入其室執其戈國學者亦不得不屈服

(七)「チ」「シ」「ズ」「ヅ」の區別の、動詞の語尾の變化、譬の來々ト、來々トのみ「シ」「ズ」を用ひ、其他の「チ」「ヅ」を用ふべし、勿論高知及び鹿兒嶋邊にて「シ」「ズ」に、自ら發音上の區別を存せりとの、聞けども、全國を平均して云ふ時、發音上の區別なし、且つ語根中に在るハ、大概「ヂ」にして、「シ」極めて少し、因て此規則を立つ、

以上の方法を、原則となす時、假名遣の困難ハ、一朝にして除き得べし、而るに此の方法ハ舊法を變ずると、最も少き者なれば、是位の處に、國學専門の諸先生も、同意と表示し得ざるとい無るべし、願くハ熟考あれ、國學者が、假名學の本尊と仰ぐ、本居主さへ、其古今遠鏡より、假名づゝの「ひ」をも正さず、便りよきに「まゝ」せたりとて、有の儘の字音を寫せり、言文一致

の便を謀るに、此心得なかる可らず、予の假名會が、今一應會議を開き、書方改良の得失を決定すると、近に在るを信ずるあり、勿論上に記す如き、原則を立るも、類似の語ありて、極めて實際の不都合を感じ、若くは已に世間に極めて普通にして、萬々此原則に従ひ難きもの、幾語かありとせば、其のみに限り、不規則語として別掲するも可なり、取除なしの規則なしとの諺もあれ、少々の不規則語を作ることも、之を許すも妨なし、但し不規則語の數、成るたけ少數に留むべし、又世人が好で論難する、醫者の「イシヤ」と石屋の「イシヤ」の區別の如き、醫者の「ムッセ」と書くも可なり、石屋の「ムッセ」も書も可なり、或は醫者に「ムッセ」と「シヤ」の上に、半圓を施すもあり、或は縮音の「シヤ」の、合字を作も可なり、合字の「歐羅巴

にも、其例多く、已に日本にも、「コト」と「ト」を「トモ」「トキ」を「トキ」に「ト」書く例もあり、此等の區別、何の苦むところあらん、又是も世人が好で論難する橋の「ハシ」、箸の「ハシ」、端の「ハシ」の區別、前後の懸りに因て、意味の自ら判然すべし、「ハシ」(箸)を執て、物と食ふと、橋を執てと解する、なかるべく、「ハシ」(橋)超ゆを、箸を超ゆとの、解せざるべし、端の「ハシ」とも、亦然り、此の如き同字一意の字、西洋にても、多くあり、支那字と雖も亦然り、日本よては、却て割合に少き方なり、併しながら是も區別の付るが好しとならば、佛語にも、冠詞と前置詞を、區別する *des, des* あり、伊語にも、接接詞と助動詞とを、區別する *de, de* ある如く、何か符牒を付し、不規則語として別掲するも可なり、去ながら、橋箸端等の、上に別例する如く、間斷なく、文中に用ひ

且混雜し易き語にあらざれば、強て符牒と付せずとも可ならん、將又此等の書き方を定むるも、他日假名綴り文の盛に世間に行へるゝに至り、世間に區々の法を用ふる弊ありて、確証を取る所なきに苦むとあらば、彼の普魯西の文部卿が、綴字案内と出せし例、又の佛蘭西にて、文字上の疑義あれば、學士會院にて、議決を爲し、信を取る所あらしむる例に倣ひ、適宜の方法と設るも可あり、併予が考ふる所にて、未だ此必要を見ず、今日の急の、假名會員が、斷然假名綴書方の大体を、一定し、漸次に進歩を謀るに在り、

第八編 羅馬字書方の上

第八第九二篇專論
羅馬字會綴字當否
而贅行文字余所不

羅馬字會にて、發行したる、羅馬字書方の、流石に當今の名士か相集り、有識の外國人とも交え、議決したる者まで、雜誌も

學安能辨可否誦讀
一過不敢加妄評

之と根據として、作文せり、故に其体裁と、順序との整頓の假名會の及ぶ所にあらず、一介の後進たりと雖とも、竊に諸君の爲先、之を賀す、雖然、彼の書方の未だ完全といふ難く、シヤパンメール社説にも、論せる如く、仍友誼上の非難を要すると少らず、蓋し該書方の新工夫の簡條少らずと雖ども、舊風に拘泥せる痕迹も少らず、是れ新工夫を多くして、人目を驚さんことを、恐るゝ所ありてのとなる可く、事物創造の際に在て、斯る用意も、なかる可らず、併し体裁順序、已に一通り整ふたる今日に至りて、其の未だ足らざる所を察し、之が改良を加ふべき、當然なるべし、因て予も亦聊か所見と述べ、時に羅馬字會の有方者、就中加藤、外山、寺尾、矢田部、神田、嶋田、田口等の諸君に向ひ、其注意を促さんと欲す、外國人中

文章尙簡明字數要
減省固其所也但羅
馬字會用彼字寫我
音カ字爲ka二字
タ字爲ta二字勢
不得已其至三合四
合亦然而其不得已
與否非精此學者不
能辯故余不復容喙
焉

にも、へボン、サトウ、アストン、チエンベレン、及びメール記者
の諸氏の如きハ、予が最も其意見と聞くを樂む所なり
前にも云ひし如く、羅馬字と、假名字綴との各々一長一短な
きにあらずと雖も、書方上に、直接せざる長短ハ、今姑く之を
論せず、予の鄙見を以て、書方上に付き、羅馬字の短所を求む
るに、其第一ハ、羅馬字綴の字數ハ、平均假名綴の字數に倍す
るに在リ、譬へハ、「カタナ」とKatanaとの如し、抑日本人の眼ハ、支
那字に馴れ、收縮の形を好む、假名綴さへも、長たらしと云ふ
て、擯斥するもの多き位なれハ、羅馬字に於てハ、特に然るべ
し予と雖ども、今日の体裁の如き長綴ハ、甚だ之を好まず、獨
り假名綴との比較にて、然るのみならず、之を西洋諸國の、羅
馬字綴と比較しても、我羅馬字の綴ハ、甚だ長さを覺るなり

試に「スツリクツ」と云ふ語を綴らんに、西洋にてハ「Strict(即ち
stikt)にて濟めども、我羅馬字書方よてハ「Sutunikutsu」と書せ
ざる可からず、是れ其最も甚だしきものなれ共、其理ハ則ち
廣く適用して、論ずると得るなり、試に英語の From^{フロム}、獨逸
語の Fromm^{フロム}、佛語の Fromage^{フロマージュ}を取り、日文語「フロシキ」と云ふ語
を、比較して見よ、「フロシキ」ハ Furoshiki と書せざる可らず、同く
是れ「フロ」の音よして發音上、寸分の異同なきに、西洋にてハ
單に Fro と書し、日本にてハ「Furo」と書せざる可らず、「ツ」の KU
に於ける「ス」の口に於る等、五十音の、ウの横行の字ハ、總て此
の冗長なきハなし、元來日本語にハ、アイエナ、の四音を帶ふ
る音聲多きが故に、ウの横行の口を悉く削除しても、猶西洋
語よりも、冗長なる語多るべし、況や絶て口を除ざるに於て

おや之を假名綴に、比較すれば、殊更然り、假名字の組立の、如何なる遺漏あるにもせよ、簡短の一點に至ては、羅馬字に決して及ぶ能はざる所なり、
 就ては、羅馬字會に於ては綴字の際に、字數を減少するの工夫をなすと、甚だ緊要なりと信そ、之を爲すに、先づ、日本に、單立の子音ある歟を穿鑿せざる可らず、予の誓て其之あるを信ず、英人サトウ氏が、日本語の通人なるとい、皆人の知る所なり、予嘗て、氏と此事を論せしに、氏も又日本語に、單立の子音あるとを云へり、已に同氏の著なる、和英會話書の、重に舊風の書方を用ふと雖とも、「デス」の如きは、Desと書せずして、Desを書せり、亦以てDs必らずしも、要用ならざるを見るへし、然るに、日本人の五十音を、解釋せるや、ウの横行の、悉く

一の子音と、ウの母音と合成したる者の如く、云ひ來りしを以て、之を羅馬字に寫すにも、悉く子字と母字とを以て、合成したるより、羅馬字會よ於ても、其儘に因襲したる者の如し、洋々社談に日本語にも、單立の子音あるとを論じたる文ありしを、鳥渡一見したりと覺ゆれとも、原書なければ、確言し難し、上に「省けば音を成ざる場合」と語を成さる場合云々を、除く」と説たり、因て之を左に辯す
 (一)Nu sayu とい、省略すれば、「ン」となり、「イ」となる、ゆゑ「ヌ」を「エ」どの音をなさず、因て省かず、
 (二)Mu の語に在る時、譬へは「ムラサキ」ニ「サシ」の如き場合に省略すれば、「ンラサキ」ニ「サシ」とある、因て語頭にある時に「省かず、
 (三)Ru の省略すれば、殆ど其音を失ふ、譬へば「獵ル」を「レ」と書

けの、殆ど「ル」音を失ふ然るに、「ロ」と書けば、「ル」の音と與ふにより、予ハ「ル」の「ロ」に改め而して省略法と用んと欲せ、但「ロ」と雖ども語頭に在る時のみの之と省略すれば、音をなさず、因て省略せず「ル」を「ロ」に作る理由の、後に詳説す、

(四)ウの横行の字と、一の母音若ハ「ヤ」及「ユ」と合したる場合に於て、「ロ」を挟まざれば、全く音を變ずるにより、之と存す

例へば、^{クイ}Kui ^{クエ}Kue ^{クヤシ}Kuyasi の如し

(五)ウ行の字のみ合して、一語をなす、譬へハ、楠の音を、悉く省略えて、「ス」と書く時の、母音をくして、不都合なり、因て一の「ロ」を存し、「ス」と書く、予の考にてハ、名詞にハ、語頭に存し、動詞にハ、語尾に存せし、區別も立ちて、旁都合宜らん、例へハ、伏すを「ロ」と書くなり、左すれば、伏さんなど、語尾を變化

しても、語頭を變ずるに及ばざる便もあり、
(六)ウ行の同字二字、合する時、列へハ「クックリ」ススリ」の如きの中央の「ロ」を存し、^クKukri, ^スSusri と書とへし、此類の語ハ、甚だ多
あらず、

以上の方法を用ゆる時の、大に省略を行ふとを得べし、而して省略すべからざる場合の規則ハ、極めて簡なれば、之と覺ゆるに、困難なし、予ハ偏に羅馬字會の、英斷を希望を將に「ロ」の語頭、又ハ語中に在る時に省略すれば、「フス」の音と紛しきとあり、因て予ハ「ッ」を「ロ」に作んと欲す、左すれば、省略し得ると、自在なり、何となれば、日本の「ッ」の音ハ、西洋にても、概ね「ロ」の音と書けり、譬へハ、日本の面ハ、獨逸歌語の「ッラ、ラ、ラ、ラ」の「ロ」ハ、英語の「ツラット」の「ロ」等と、更に殊なる所なし、抑々

ツを従前より「ツ」に綴り來りたれども、其實洋音の「ツ」日
 本語の「ツ」よりも強く、且つ冗長に似たり、羅馬字會の「ツ」に改
 めざるの訝し、若し「ツ」の二字のみにて「チュウ」と讀るゝ恐
 ありとせんか、則ち「ツ」の「キウ」と讀まるべく、「ツ」の「シウ」と
 讀るべく、その他皆同し、豈獨り「ツ」のみに限らんや尤も極
 て有限の數に「ツ」あれども、マツチ(待乳)の如く「チ」の前にあり
 て、分明に「ツ」を響かざる語、若干あるべし、此等「ツ」の縮音と
 なる恐を避る爲め、「ツ」と書き、「ツ」を存すべし、又英語にて「ツ」語
 頭に「ツ」若し「ツ」ある時、例へば Knock, Gnome の K, G を響かせ
 ず、日本語にて「ツ」如何との難問あらば、予の之を響するなり
 と答ふ、英語にて「ツ」往時の響たるが、正音ありしに、南方の弱
 音に化せらるゝに、従ひ響することになりたれども、實は是

れ英語の不規則の部に屬する者なり、其證據の、獨逸其他の
 語にて「ツ」皆響するを例とせるにても明なり、(羅馬語にて「ツ」
 語にて「ツ」後「ツ」多く「ツ」を除きし「ツ」其音の自然に消(頭)
 減したるに由る、最初の響かせたるものと知らる) K と語
 頭に在る語「ツ」洋書中に見當らざれども、獨逸語に Gm の G を
 響する例(Gmunden の G の如し)もあれ、日本語にて、語頭に「ツ」
 「ツ」の音を用ふべからずと云ふ道理なし、左れば愚考にて「ツ」
 「ツ」等「ツ」等の字も省略法を行ふて、不可なしと信するな
 り

第九編 羅馬字書方の下

日本語の「ツ」ニ「ツ」類の、概ね語尾の屈曲、若し附加語にして
 前置詞類と同じかゞされ、之を其附屬する語に、接續して
 書す可き理の、假名綴書方の條に、詳論し置たり、抑々綴字の

數をり、成るべく省減すべしと雖とも、ガノニヲ類と、接続し
 て書するの、一の語勢を損せざる爲め、一の無ばあちくる意語の獨立と
 避る爲め、甚だ必要とを、因て愚考にて、之を接続するを、原
 則とせんと欲す、但し名詞に、高コンマ(洋名アポストロフ)
 エー(エー)を加へ、一目瞭然の便に供すべし、例へり *Hanani, Porino*
 の如し、若し英獨の所持格の、の往古一語の略字なり、之を
 單に符牒として用ふるの、如何と難する人あらば、予の答て
 曰のん、往古の如何なりしにせよ、後世にて、一語と書けば、
 却て規則に合はずとして、却けられ、符牒を付け、のを書ざるを
 規則とせるを見れば、單に符牒として、用ふるも妨なし、假令
 否らざるも、我の我便宜の爲め、一種の符牒を用ふるも、誰か
 之を非とするを得ん、若又英獨の所持格に、高コンマの次

に單にのの一字あるのみ、我がガノニ、數字を綴らざるを
 得ず、其体裁如何と難せば、予の之に答て曰のん、体裁のみを
 以て云ハ、英の *Near* 佛の *Thun* 伊の *Ohio* 希臘の *Kago* の如き
 皆高コンマの次に、數字を綴れり、我がガノニが、單の子音字
 に止らざるも、何ぞ体裁をなさすと云ふことを得ん、合併の
 意を含める「ト」例へり、「牛ト馬」の「ト」の如き、接続詞に類す
 れども、是とて、予の接続して書し、高コンマを付せんと欲
 ず、已に羅馬語にて、我「ト」と同じ *The* 及 *Ye* の、孰れも接続し
 て書けるも、同じ思考に出るなり、

代名詞に附属するガノニが類も、接続して書べし、希臘の
Egoge 羅馬の *Vosnet*, *Teuma* 伊太利の *Meece* の如き、亦皆此思考
 より出るなり、但代名詞の、極て普通にもあれ、高コンマハ、省

て可なり、日本語の副詞の、多の形容詞などを、其の儘に用ひ「ニ」若し「ト」と附加したる者多し、此等も「ニ」トと接続して書すること、英の「The」佛の「Monsieur」の如くすべし、但し此場合に於てハ、高コンマハ省くべし、羅馬字會の書方に據れハ「ニ」故「ニ」を「Neni」と書けり、宜く「Yeni」と書くべきに似たり、又「マシテ」(況)の如きも、Masite と書くべし、

假名と羅馬字との比較表に付き、少く論すべき者あり、因て之を、左に列記す、

(一)羅馬字會の書方に據れば、「オ」ニ「チ」及び「オ」と讀む「ホ」ハ、總て「O」と書き、「エ」ニ「エ」及「エ」を讀む「ハ」ハ、總て「E」と書き、テニ「チ」ハの「チ」ニ「ハ」のみに限り、「Wo, yo」と書けども、テニ「チ」ハの「チ」ハ「ハ」ハ、日本語中にハ、實に陸續たれば、成るべく簡短を貴ぶ

且ハ之と接続して書き、高コンマを用ゆる時の、自餘の「O」及「E」と區別する要用なし、因て予ハ矢張簡略法を用ひんと欲す、例へば *Hana'o*, *Ato'o* の如し

(二)同書方に據れハ、「シ」ハ「S」ト書けり、若し「S」ト書けば、サシスセツの音通もよく、簡略にもなるべし、成程「シ」ハ「S」ト響く地方多けれども、關西地方にハ、矢張「S」の音を存する所多し、且つ「シ」を「shi」と書せざる可らずとせば「セ」をも「shi」とせざる可らず、羅馬字會にて、已に「セ」を「s」とせる以上の「シ」を「s」とす可らざる理由を見ず、愚考にてハ、「S」を正則とし「シ」及「S」の不規則の字を作らざる可らざる必要ある時に、之を用ふ、例へば、論者の常に口實とする、橋箸端の區別をなさざる可らずとせば、*Hasi*, *Hash*, *Hashi* と云ふ如き

工夫に、書別るとを得べし、

(三)同書方に據れば「チ」を「チ」と書く、併し是も「シ」と同様の理に據り、英斷して、「シ」と書て「何如、且「チ」は、日本語に、人名地名、其他に極めて普通の字なれば、成るべきだけ、世界に廣く通する字を適用すると便利とす、然るに「シ」と書時、佛蘭西にて「シ」と讀み、獨逸にて「キ」と讀み、佛語を直寫したるもの、「シ」と讀む、伊多利亦「キ」と讀み、英米にて、「チ」「キ」「シ」と、種々にて定則なし、同じ支那と云ふ名を、各國共に讀方の殊なるも、之が爲めなり、「シ」と書けば我「チ」の最近の音を、各國に通するとを得、熟考すべし、「シ」のとの、已に前に説置たり、

(四)同方に據れば、ザッヅセツの「シ」の「シ」を用ひ「シ」と書き、

他の皆「シ」と用ゆ、然るに、「チ」も「シ」と書けり、語根中「シ」「チ」の「チ」を多とすれば、「シ」を正則と定むるも可なる可けれども、「シ」を全く削るに、及ふまじ、愚考にて、「シ」の「シ」を作り、而して動詞の語尾の「シ」、例へば、思ハシの「シ」の「シ」と用ふるを可とす、已に思ハズの「ズ」の「シ」を用ふるにより思ハシの「シ」も「シ」を用ふるが、當然なふん、且つ「シ」を存すれば已むを得ずして、不規則字を作る時に、便利あり例へば鍛冶若くは梶の、正則に従ひ、「シ」と書くも、家事の「シ」と書き區別をなす等なり、火事も、羅馬字會の書方の如く「シ」と書きても、人々の好に任すとすれば、是亦混雜するゆへ、火事の「シ」と書くと云ふ如き思考ますれば、大に混雜と減すると得へし、不規則字多きの、好まされども

往々の幾分歟作らざるを得ざるべしと思ふ。

(五)前も云し如く「ル」を省略するに「R」を「L」に作らざるを得ず若し何故に「ラ」行より「ロ」を交ゆる歟と難せば、予の猶「ハ」行に「ロ」を交る如しと答へん。若し「L」の「ル」音を爲す歟と問へば、予の然りと答へん。元來東洋のラリルレロの音にもあらず、「ロ」音にもあらず其中音の音なり、唯日本にての、稍々「ロ」に近く、支那にての、稍々「L」に近きのみ、然るが故に、同じ漢字なるに、日本にての、總て「ロ」にて寫し、支那にての總て「L」にて寫せり、例へば、老の日本にての「ロ」に寫し支那にての「L」を寫せり、殊に我がラリルレロ中にても「L」音の頗る「L」に近し、故に「ロ」を用るが便利なりとせば、之を用ふるも可なり又日本語にて、語頭に「ル」音あるの、悉く

支那語なり、例へば、瑠璃類壘の如し、左すれば、語頭の「ル」をも「L」を用ふるとしても、却て支那音に近き理なれば、少も不合都なし、將西洋までも、今日にてころ、「L」の音に差異あれ、元來同種類の字なると、猶「L」の「L」に於けるが如し、故に同出處の語にして、甲國にて「ロ」を用ひ、乙國にて「L」を用ふると、例へば、伊多利の *stella*、獨逸の *stern*、英の *star* の、孰れも星と云ふ義にて、同出處の語なると、疑ふ可らざる類多し、猶進て云ふ時の、一國語中にも、二字を流用せしと、希臘にて、*Kephalargos* を *Kephalalagos* と書せし如き例あり、又葡萄牙文典を閲せしに、羅馬語を取り、*R* を轉化せしもの甚多きのみならず、其自國語にても、*Quer* を時として *Quel* に作り、動詞の *Quel* に終るもの、*Q*、*A* 若くは *AS* の代名詞

の前に來る時の、RをLに入れ換ふると譬へば、Var-oを
Veloより作り、Amar-oをAmaloに作るの類あり、日本語にて、便
宜により「ル」のRuを「レ」に代へたりとて、之を定則とさへ
なせば、不可とせる理を見ず、若し動詞の語尾「ル」より「ラ」「リ」
「ロ」若くは「レ」に轉する時に、如何と難せば、予は「ラ」「レ」の
矢張通常の「ラ」「レ」を用て可なりと答へん、動詞の語尾の
變化の爲め、字の代はるとい各國の動詞轉化法にも、其例
多し、例ば日耳曼語にて、Mogenの過去は、普通の規則にて
「ハ」、Mogteとあるべきを、左になくて、Mochteとあるも、其一
なり、我動詞の「ル」に終るもの、「ロ」より「レ」に轉したりとて
驚くも足らず、

羅馬字會の書方に據れば、二語より合成したる一語にして初

語の「ロ」に終り次語の「母」字又ハ「レ」に始まる時の、中央に「イ」
フン線を引く例へり、原案、姦雄を Gen-an, Kan-yu と書き、下男、加
入の Genan, Kan-yu に、區別すれども、中央に線を引く、天地とか、
父母とか云ふ如き、双々相對したる場合、若ハ下の字ハ、一種
特別の意味ある場合、譬へば文部省を、Monb-shō と書く如き
場合に用ふへく、原案姦雄等の場合に用ふるハ如何し、且つ
年號地名人名などにも、斯る場合ありて、之を分つ可らず、譬
ば吾友南條文雄ハ、佛書中より取りたる語の由にて、「ブ」
「ユ」と音讀す、之に向ひ、汝の名ハ、中央に線を引くと云ハ、定
めて迷惑すべし、因て考ふるに、西洋にて母字二字併び、二字
共、別々に讀むべき時に、次の字の頭に、二のチヨホ點を打
ち、前音の其前よて終るとを示し、例へり、佛語の *Paul* ハ、ソ

ルにあらざして「サウル」なり、Noelの「メール」もあらざして「ノ
 エル」なり、因て此の例に倣ひ、二のチヨボ點を用ひ、Genân,
 Kanyu と書き、前音の「ゲン」「カン」にて終ることを示さんと
 欲す

羅馬字會の書方に、「集會シ」「選舉シ」「清書シ」等の「シ」、離し
 て書けり、左すれば、「集會ス」「選舉ス」等の「ス」を離し書ざる可
 からず、推して之れと云へば、「會シ」「會ス」「托シ」「托ス」「論シ」「論
 ズ」等も、離し書ざるを得ず、然るに、「示ス」「離シ」の如く、日本讀
 の語に、續けて書けり、此區別甚だ面白からず、集會選舉等の
 語も、已に動詞として、用る場合に於て、矢張日本讀の語の
 如く、續て書くを勝れりと思へる、又印刷ニ付シテの「付
 シテ」を「フ」と「シテ」と二つに分てり、思考にて、「シテ」の「其附屬

の動詞に續けて書んと欲す、尤名詞代名詞の後に「チシテ」「ニ
 シテ」とあることあり、是の自づ一種の語法なれ、「シテ」を離
 し、例へば *Hito'o site, Hito'ni site, H'toto'site,* の如く書して可なり、
 又羅馬字會の、何々どそを分ち、例への「好トス」と *Yoshi to su* と
 三語も書けり、「何トス」とあるの、必らず句の終に在る語勢な
 れば、混雜の恐もなし、因て、愚考よて、之と續けて、*Yositos* の
 如くも書くを簡便とす

以上の愚案により、爰に新舊比較表を示し、敢て大方の覽を
 煩さん、原文の羅馬字書方の第十四條なり、

(舊) XIV. Tsumaru on wa Kana-zukai no ikan ni kakawarazu sono tsugi
 no shiji wo kasanete, kore wo shimesubeshi. Tadashi, tsugi no on
 E ni hajimaru toki wa, kore wo kasanazu shite, mae ni T wo

kuwayu beshi

(新) XIV. T'mal on wa kana-zkai no lkan ni kakawaru, sono tgi no siji o kasanete, koreo sinesbesi. Tadas, tgi no on E'ni hajimal toki' wa kore'o kasanezite, maeni t'o knayubesi.

架空大言人皆能爲
之此編論涉瑣細尤
見着實

予が日本文章論を草する、之を以て九編とす、之より前に、歐
文沿革考三編あり、其間心力を勞すること、亦甚だ尠らず、詳
細に過る恐なきよ、非すと雖ども、論して疎漏に陥る、予の
好まざる所なり、苟も大方の注目を起すよ、足らば予の願足
れり、勿論予の論ずる所、未だ其正鵠を得ざる者もあるべけ
れば、此等一切に大方の痛撃を待つ、

日本文論稿成、偶得一絶

春泓狂士

機未熟兮時未至、孰憐慷慨男兒志、萬里泰西孤屋中、漫揮禿

管論文字

假名字羅馬字互有得失然皆一字一音有音無義
合二字三字四五字成一義可以細寫聲音若夫漢
字一字具一義便於記事不便於寫聲音苟聲音之
不寫何以得細寫言語情態乎山陽外史號爲工叙
事而視之平家物語太平記藩翰譜諸書輸數籌者
無他坐漢字不便於寫我邦言語耳今夫均是憎惡
也曰ニクシ曰ニツクシ語勢輕重判焉均是歎息

也曰アア曰アハレ曰アッパレ語勢深淺分焉此種意味非假名不能細寫本編並舉單音重音舍單取重尤爲卓見也

丙戌九月上浣

甕江川田剛識

歐文沿革考一 英吉利の部

日本文と改革するに第一に紙上の言語をして口頭の言語と相接近せしむる方法を講せざる可らず第二は和漢混合の書方を改め之を一定の綴字(譬へハ羅馬字若くハ假名字)に歸せしむる手段と施さざる可らず此の二大目的と達するや其業固より容易ならず是を以て世人或ハ成功の如何を危むものありと雖とも僕を以て之を觀るに不容易の則ち不容易なり其成功の決して難きに非らず之を西洋諸國の史籍に徴するに其言語文章ハ我が言語文章に大同小異の艱難を経しと一にして足らす而るも猶能く今日の美と致すを得たり我日本と雖とも措置苟も其宜を得ば豈成功せざるの理あらんや

試に英國言語文章の變遷を見るべし羅馬人征入の前英國の土言の歐洲言語三大種族の一なる土言よてケルチック語なりしが羅馬人之を征服するよ及び各所に兵營を置き大道を開て國內の行通を便にし鎮將を發して政令を行ひ羅馬市街を造り遂に天子自ら蹕を移せし者あるに至る斯の如きと四百年に内外す此時に方り英國よの羅馬語と土言との二種ありしと知るべし勿論蘇格蘭及愛爾蘭の土言の英國内地の土言との幾分の差あれども同くケルチック語種族に属す羅馬兵權の衰ふるに及び日耳曼北部の人民乱入を四方に始め英國にハエルフ河畔よりサキソン人アングル人シュート人など續々として諸方の海岸に攻入たり時に羅馬人の既に擧て其本國に歸り土人の戰ひて死

するあり捕へられて殺さるゝもあり深山幽谷に潜逃するもあり其僅に残りたるの悉く奴隸とせられ婦女子にの攻侵入の妻となりしもあるべけれども素より其土言を保持する勢力なく遂に英國の言語の攻侵入の言語に化し羅馬并に從來の土言の殆んど其蹤迹を内地に留めざるに至れり其狀恰も我日本人が蝦夷人種を攻伐し我が古言を輸入せしと同じと思ひる今の英語の本宗の即ち此攻侵入輸入の語なり其の首としてアングロ人サキソン人の輸入に係るが故に或の之をアングロサキソン語と稱せ勿論均しくエルブ河畔の土言に出たる者との云へども輸入の種族の異なる地方轉訛の幾分の差異ありしと知るべし併し兎に角に文字もありて書を作る術を知れり其用ふる所

の文字ハ日耳曼の古字体に似たるもあり羅匈字に似たるもあり故に學者の説にも日耳曼より持來りたる者なりと云ふもあり從來の土人が已に羅馬字を折衷して作り居たるを取りたるなりと云ふもあり又此二体を合して新ま作りたる者なると云ふありと雖ども確證の徴をべきなけれの姑く之れを舍くもアングロサクソン語の英國に行れしこと六百年の久きあれの其間漸次に其体裁を成せし疑ふ可らざる事實とを殊にアルフレッド王の幼少にして二たび羅馬を遊びしともありて夙に文學の要を悟り自ら率先して新書をも著し羅馬書をも翻譯し己に粲然觀るべき文章ありしと其遺物を見て明なり然るに此頃よりして既にデーン人種(即ち今の丁抹諾威邊

海岸の人民英國に攻入し遂に王統もデーン人を奉するに至れりデーン人の言語ハアングロサクソン語と其の種族を同すと雖ども發音其他悉皆同一の者と云ふべからざれば在來の英語に幾分の變動を與へしと知るべし已にして能爾曼の攻入に遇ひ世の全く變して封建制度となり言語も古來未曾有の大變化を生じたり其故の國王ハ能爾曼人なれば宮中の言語ハ固より能爾曼出の佛語たるのみならず國中各處に封せられたる諸侯并に附屬の武人の孰れも能爾曼人なれは是亦悉く佛語を用ひ遂に裁判所の言語まで佛語の外に用ひさしむるに至れり而して在來の英人と問への征服せられざりとの雖も以前土人が日耳曼人に其大半を殺されたる時と違ひ人口も多く且急な外國語を

學び得る者にあらざれば依然として在來の英語を用ふ詞を換て之と言へば英國の此時に至り再び二種の言語を國內に出せしと最初羅馬人攻入の時と同じ勿論能爾曼人の攻入の羅馬人の攻入と其趣も變り何事によらず上下の交通の幾層の接近を加へたれば時日を経るに隨ひ能爾曼人の幾分か英語を覺え英人の幾分か佛語を覺え其發音も英人が日耳曼より持來りたる北方の堅音の能爾曼人が持來たる南方の輕音に化せられ能爾曼人の南音も幾分か英人の北音に化せられ云々と双方歩み合の如き姿に赴きたりと雖とも猶充分の混化に至らず故に此時代の著書の上等士流の爲にする者の佛語を用ひ一般人民の爲にする者の英語を用ひたれとも其さへ兩語とも未だ完全ならず殊に

英語の己にアルフレッド王時代の盛時を失ひたれば其艱難想ひ知るべし且又學者の重に研究する所の羅馬書に於て法律や教法の思想と表出せる熟語の己に羅馬語に備はれるを以て此等の著書の一般は羅馬語を用ひたり之を日本に譬へば支那文字の流行せしより記する所の事柄を目的する所の讀者との差により漢語交の和文と假名文と又不出來なからも純粹の漢文に倣ひたる者と同時に行なはれしと髣髴たり英國の文字世界の斯る紛雜の有様なりしれば當時の人の思想にて之を調和して一の好文章を得んどの殆と言ふ可くして行ふべからずとせると猶今の日本人中に日本文章改革の成功を危むと同しき人も多かりしならん然るも當時英國の操觚者の中々に僻易せず文壇

の豪傑も前後に顯われエリザベス女王の代に及んでの英國の文物勃然として起り英國文章黄金時代の稱を得るに至れり此偉功を奏せし第一の文豪のチョーサ其人即ち是なり此人生れて材幹あり國事の功勞も少からず英國文章の衰微を歎じカンテルズリー巡禮談を作る其書始の詩体と用ひ末段二篇の散文を用ふ序言より推して見れり猶幾編あらざる可らず且つ末段の散文に變せるを怪み巡禮談の大成に至らず末段の散文の他人の追加ならんと論ずると源氏字治十帖の別手に出るならんと云ふに同じし説あれども是れ等の考證家の事業に過ぎずチョーサの此書と作るや大に思ふ所ありて當時に併ひ行へれたる佛語英語を混化して其粹を選ひ之を行るに妙文を以てし遂に今体

英文の基礎を一定す其後の此体裁を用ふるもの追々に起り綴字法の如きの言語發音の變遷に因て之を改め學術上の熟字の如きの巧に羅馬語を採用して英語となし有力の著述家相續て輩出し遂に前に云ふエリザベスの盛代を來たすに至りたるなり此時代より後と雖も諸學者の勉強により英語の進歩せしめ論を待ざれども之を建築に譬れば尤何の大功の已にエリザベス時代に至るまでに竣功したりと云ふべし勿論印刷の術ハカクストンと云へる者夙に大陸地方より輸入したれのエリザベスの盛代を致せしも印刷の力大と與て之に居りしなぐん而して印刷の術と雖も始めの甚だ粗末なりしことカクストンが始て印行したる書の字体の不器用あるを見ても知るべし其今日の美に

至るまで幾多の改良を経たるなり印刷の改良の必らずしも英人の功のみにあらずと雖とも亦決して之を忘る可らず將た綴字法の改良の如きの遠く延て近世に及べり試に今日の文章を取り之とチヨ一サの文章に比するも著るしく其の差を見る先づ語尾の四の之を除たり是れ往時の語尾に四の音を附したれども南方の音に化せられて之と響せざるに至りたれ之を省たるなり例へん今の *Hade* の *Hade* 又 *Hate* に作る日耳曼にて今も猶 *Hate* に作るの語尾の猶存せるなり又語尾の *en* 今々の一字に作る今の *sh* の悉く *sh* に作る日耳曼にて今も *sh* に作る *sh* の強き者なり南方音に化せられ稍緩音となりし上の中央の *en* 要用ならざるが故に簡省又従ふ又古の *Whan* の今 *When* に

作るの類の音聲の變化に據るなり又た古の *Bisshop* の今 *Shop* に作るの類の中央の *o* を省けるのみならず一の *o* を除き短簡を求めたるものなり此の他猶枚舉に遑あらず之と要するに力めて發音に近く且つ字數を減すると勉めたる者の如し勿論今日の英語の綴字法の之を眞の發音に比すれば猶不規則の存せると多きの掩ふ可ざるの實とす例へば *Light* の *gh* の今全く不用の文字とす是れ其元の日耳曼の *Licht* と同出處の字にして英國にては往古の *gh* を讀せたるに其後讀まざるとなりても猶未だ之を除くに至らざる者なり此類の文字頗る多し又或の學者先生の熱心の爲め或の反りて字數を長くせしものなきにもあらざるべし例へん後世 *Delighted* と書く所を古の却つて *Delited* と書き

たるを見たとあり是れ古法反て簡短にして發音に叶へり然るに此の字の元來 De & Light との二語より成立たる者なれの熱心學者の眼にて見れり如何にも *De* を加へたく思ひ却て Light の *ph* なる已に無用に屬すれり之を除き簡短の綴字に改むべきを忘れたる者なり此等の不規則の英米人の已に自ら悟る所なれり現に英米に於て再ひ大に綴字法を改革を全く不規則を取除き以て英語をして完全無缺の壁たらしめんとする士人も至て多し此の再度の改革論の成否の姑く置き今日の英文を以て論ずるも英國人民が數多の困難と踏越々々以て今日の美を致したる形迹の實に我日本文改良を謀る者の規範と爲すに足るが如し

歐文沿革考二 日耳曼の部

英國文章の沿革の第一編に記する所の如し讀者の今又試に日耳曼言語文章の沿革を見るべし日耳曼の言語文章の英國の如き大變動のなかりしと雖ども其今日の有様に至りたるまでに幾多の困難を経たるを知らざる可からず日耳曼語即チットニツク語の羅馬及ケルチツク語と共に歐羅巴言語の三大種族と稱せられ夙に其頭角を顯し文字もルーニツク字と云ふ一種の文字ありしと雖も其制の猥疎漏なりしが上に用方も亦重に宗教秘密の思想と表するに用ひしと我真言僧杯が卒塔婆の上に梵子を書くに似たる所ありしにより耶蘇教傳播以來の人之を好まず西曆第四紀中ウルファイラスと云ふ大徳の耶蘇僧正あり嘗て羅馬東帝の愛と受く此人始めて希臘文字に據り新よ文字と造り

土言を以て耶蘇經文を翻譯し日耳曼文章の權輿となす併し文字の教の一朝にして行ゆる者にあらざれば之を用ゆるもの無く歌謠の如きの各國の常にて未開の世と雖も人情の自然に基き自ら言語の美を得たるもの少からざりしと雖も多くの皆口より口に傳へたるに過ぎずカール大帝(即シヤレマイン)興るに及び天縱の才を以て歐洲の大部分を一統し旁ら文學を好み在來の歌謠を纂集して書と爲し又日耳曼文法書を作りし等のとありと云ふ佛蘭西の文學史と見れば佛蘭西文學も此の帝の力の極先て大なりしとを説けり蓋し獨佛兩國とも帝の治下に屬せしが故に所謂一視同仁にて力を兩國の爲めに盡し遂に兩國の言語をして一に歸せしめんとの大圖を懷おれしもの知る

可らず帝崩後の版圖再び四分五裂し從來の猶ほ幾分か曖昧なりし國境も亦混淆せし言語も忽ちに一變して風馬牛相去るの勢となり文字の運も亦兩國共より再び「暗黒の世」となれり降て第十二十三の兩百年紀に及び日耳曼語散文体興り歌謠も亦やゝ往時の美を復したるもの出しと雖も第十四紀の始より第十五紀の終に至るまで詩風の全く地を拂ひ獨り散文体のみ少しく舊觀を存したりと雖も是亦沙漠中の綠樹の如く僅々の散見に過ぎず其如是なりし所以ハハプスボルヒ家が日耳曼帝權を握るや首として其自家の利を謀り文學の如きの棄て顧ざりしに因ること多しと史家の論せり勿論此頃よりして奎運の已に再び其柄を轉したりと雖も心を文學に委ぬる者の重に僧侶に

して其學ふ所の羅馬次に希臘の死語にして詩歌の如き自ら雅体と以て誇ると雖ども其實摸擬剽竊のみにして人情に適せず題目も多くは皆教法の故事に取る此弊風次第に増長して第十六紀に及び美文地を拂ひ國運亦微なり或る文學史家の此の時代を稱して十字形の世と謂ひ又或る史家の此時代の學者の舉動を評して「社會として羅馬語を談し羅馬詩を作る一大學校たらしめ實行直思の現世界を轉て古書殘卷の空世界と爲せり」と云ひ美文凋衰の源因を論して學者の自尊、雅俗の懸隔、宗教學の流行及び外國古語の心酔とに歸せり將俗人の有様のと問への夙に學者世界と懸隔せしが故に第十五紀の半よりして嘗て歌樂論中にも記せし如く「町人歌」起り各地の町人等大工左官沓屋パン

屋の嫌なく日本にて都鄙の若者が仲間を組んで黠取俳歌を作りし如く仲間を組んで作歌を試み休日には會合して優劣を判し始めの本據をマイアンスに置き後にマールレンホルヒに遷し思ひ々々の工夫を凝して種々雑多の歌体を發明し各々付するに名を以てし其二三と擧ぐれば縁体赤体編紅花体黃獅皮体短猿体肥狸体等の名あり俗歌の野鄙推て知るべし且又全國を通し日耳曼語の異同なりし歟を問への決して然らず先づ南日耳曼語北日耳曼語の大區別あり其他地方々々の轉訛ありて之を文學に綴るにも決して一定の規則とていあらざりき

斯る混雜の最中に新教主張の諸先生出て來り遂に日耳曼の言語文章大成の基礎を布きたり或る文學史家の之を改

教の時代と稱し而して日耳曼文章の勃興の即ち新教者が舊教家を壓倒したる者なりと評せり新教主張家中にてもマールチン、ルートルを以て其魁とを殊に耶蘇經文の翻譯の畢生の心血と込たる者にて日耳曼にて今日の言語文章を論ずる者皆之れを祖宗と仰ぎ開山と尊らざるのなし蓋しルートルの宗教の熱心家なれば文字上の苦心の固より文學の爲めに出たるにあらずと雖ども其教法一新の業を企るに方り舊來の如く僧俗の懸隔を爲し經文も古文を墨守し俗人をして之を讀むと能はざらしむるの非を悟り始めて翻譯に着手したるなり而るに耶蘇經文の原書の僕も嘗て學校試験の爲め字引相手に研究したるに其文章の典麗閑雅譬ふるに物あり宗教の元來理に訴んより寧ろ情に訴

ふるものなれば若し之れを方今日本に行はれ居る兩約全書の如き拙文も譯したらんに人の情感を發し得べきものよあらず故に當時ルートルの爲を所の言語文章と一にし人情に近くして而して野鄙に陥らざる工夫を運さざる可らず又南北両日耳曼語の一に偏せず之を混化するの工夫を運さざる可らず此目的を達せん爲先非常の苦心と經て遂に非常の名文を構出したり今にして日耳曼人か其全國普通の言語文章を以てルートルの賜と稱するも誠其故ありと云ふへしルートルの勢力の殆ど一世を震動し其言語文章上の功も前に記せる如く偉なりしと雖ども未だ純粹の學者社會をして舊套を脱せしむると能はざりしと猶吾人か今日に於て如何に苦辛したれいとて子曰先生を

して急に儒學漢文を廢せしむると能はざるの姿あり且つ
 ルートル死後の新舊教の争ひ益々甚しく隨て戰亂相續き
 新教其物さへ壓滅に瀕せしとありし位なれは舊風の學問
 の愈々結んで解けず幾も無く學者紳士佛蘭西の言語文章
 に心醉するの弊生じ日耳曼文華の勃興を妨げ固有の詩風
 の如きの全く地を拂ふたり此時代の日耳曼社會の有様を
 今日より見れば殆ど信じ難き程なれども左の抄譯を讀ま
 り雖不中不遠の觀察を下とを得ん

遂に第十七紀の末に至て凡る日耳曼の名を附すべき
 事物の至く古語の研究高尚の宗教論及法理學に壓倒せ
 られ所謂學者と不學者との間に取返も付かざる懸隔
 を生じ一方より文雅を以て自稱するもの一般の人民を

見て其言語歌謠より思想生活の方に至るまで一概に
 之を賤み一方に一般の人民の上等士人の言語、否、説教
 の言語さへ解し得ざるの姿となり何事たりとも學者の
 爲を所の之に疑惑を置くにあらざれは之を度外に置け
 り併し是とても上等者流の凡を形以上の事の皆我專有
 特權の如くに思ひし時勢と考ふれば更に驚くに足るこ
 となし此懸隔の其勢を逞くすると無慮二百年ありき新
 教勃興の下等人民をして信心の源泉則經文を見ること
 を得ること上等者流に殊ならざるに至らしめ最上の惡
 結果を防禦したりと雖ども是とても後に専ら宗旨論
 の境界に深入し之れが爲め最前已に遂けたる良功を再
 ひ水泡に歸せしも多く上下の懸隔の益々甚しかりき中

にも最も其害を日耳曼固有の文學智識の發達を蒙らせし南西の隣國殊に佛蘭西なり日耳曼淳朴の風否日耳曼言語其物さへ迹を王侯の宮殿貴族の城郭に留めず上流の文人學者公邊の吏人否市中の豪商さへ其父母の言語を放棄し世の所謂「流行世界」のなりけり

斯くても憂國の士は全く絶るものにあられし所謂反動の勢にて固有の語學歌風を恢復改良せんとするもの其間に出で王侯貴人の之に與し之を獎勵するものありてワイマルよの養果社ホルシタインに白鵝社ヌーレンホルヒに花冠社其他同種類の有志者前後に起れり(我假名の會諸部の設立之に似たり)此諸社の爲す所の手段目的其宜しきを得ず甚しき外國語の一切之を放逐し純粹の古語古

体に返らんなど言ふべくして行ふ可らざる企をなせしもありしが故に其成功の皆無なりしとて之を一笑に附せる史家もあれども其日耳曼文學再興の先驅をなせし功勞の稱せざる可らずと論ずる史家もあり亦同時に此諸社の手段目的に服せざるが故に獨立して苦辛せしもありオピットゴッドセツドの如き是なり引續き詩歌文章よクログストックレッシングウランドの如き諸名家を輩出せしのみならず理學にも名家并ひ出つ就中ウオルフハ専ら日耳曼語を以て其書を著し日耳曼理學上の文章を煥發したり此時に方り日耳曼壯年學者の勉強驚くべし之が爲め有爲の士にして二十五六歳若くは三十に足るゝ足らざるは早世せしも少からずシレーゲルミラーラの如き是なり遂はハ

ダル。キユーテ。シラル其人の如きと出して日耳曼文章の金世界を成就せり其此域に達したるまでの苦辛の僕の自文を以てせんより左の妙文を譯出せん

是よりして復た日耳曼文花再開の時となりぬ去ながら最前の花との違ひ今度の花の偶然の發生にあらず實に幾多の苦勞幾多の失望を経て纔に養成し得たる者と知るべし前に此所の岩が根彼處の水際と匂ふ計りに咲出たる春野の中に徘徊ふも是皆已かまにまにの野花にぞある今度の花の同じ花にありながら力と力を費して荒野を返したる庭園に思入たる花壇を作りやう々々又植慣らしさる奇草珍木にぞある實に詞藻の自然を學ぶ者との云ふものゝ云ふに云われぬ經驗と苦辛とを

費す者と知るべし

以上日耳曼文章の沿革を見て其如何なる困難を経る歟を思へど如何に日本人たりとてよもや日本文改革の困難又僻易し遂に百年の望を絶つ如き者のなかるべし勿論ギユーテ、シラル以後と雖も美に美を加へんと謀る志人の少からず中にもグリム兄弟の如き最も効あり又綴字法の古來時に従て改革し來りたりと雖ども近時に至るまで猶未だ全く一定せず例へんEとD又FとHとの如き混雜する事多かりければ普魯西の文部卿ブットカマ氏諸學者と協議し綴字案内を發行せしとあれども是も未だ完全ならざれば再び改正増補の企ありと聞く日耳曼人進取の氣象推て知るべし

歐文沿革考三 伊佛魯の部

伊多利の歐洲強國の一に列する大國たりと雖ども其建國の纒に二十餘年の久きに過ぎず隨て言語文章の沿革亦吾人の參考に足る抑も伊多利の羅馬帝國の本據にして其盛大の日よ方ての版圖の大前古比なく學術文章亦古今に冠たり國衰へ政亂るゝに及び邊境の蠻族に國の中心を蹂躪せられ獨り境外の屬地を失ふのみならず伊多利内地亦四分五裂の勢を爲し言語も隨て夙に羅馬の舊を失ふ其後數多の變遷を経たりと雖ども之を要するに羅馬法皇の所領となる所あり共和政体となる所あり外國人管治となる所あり地方豪族の兼併に遭ふ所あり一統の天日を見ざると實は幾百年と重たり尤も羅馬帝國滅亡の後と雖ども好學

の風ハ猶其迹を絶ざりしと雖ども滅國遺民の殊更舊時の盛を慕ふの人情の常なれハ學者文人の研究する所の首として羅馬の古書に止まり新語を助けて其体裁を整頓するに盡力せず是を以て伊多利語の進歩ハ之と他邦に比すれば頗る遅々にして降て第十三紀に至るも伊多利文字と稱すべきものなく羅馬の舊詩文を摸擬するもあり佛蘭西語に伊多利の語尾を附して之を用ふること吾人が漢字に日本語の語尾を附して用ゆる如きことと爲したる者もありしハ此年紀の末よりして伊多利の文學勃然としてマスカニ州に起リダンテ其人の如きを出せリダンテの伊多利語に於ける殆んどチョーサの英語に於けるルートルの日耳曼語に於ける如き功あり今日の伊多利文學ハ實に其賜な

りと云ふべしダンテに踵きペッターク、ボッカードオ等の名士出て各々文章を以て伊多利語の光燄を四方に發す勿論國內四分五裂の時代なれの普通の言語の地方々々によりて其轉訛を殊よしダンテ等の用ひしハタスカン州語も過ぎざれの未だ全國に通せざれどもタスカン語の此頃よりして漸く全國文學上の言語となるに至れり而るに第十五紀に至り學術技藝再び古を尊ふの風起れり史家の之を蘇生レチイッスの世(即復古)と稱す其古學を再興し美術に建築術に希臘羅馬の盛時を再び世人に知らしめたる功の獨り伊多利のみならず延て歐羅巴全洲に及びたりと雖も伊多利言語文章の發達上より論すれば甚しき妨害を施し當時の伊多利語を變して羅馬の舊に復せんと夢るあり各自の地方々々の

方言を盛よせんと謀るもありて一旦ハダンテの遺書さへ殆んど之れを忘るゝの姿なりしが幸にフロレンス府ありて狂瀾を己に顔れんとするに回し伊多利文學を保持したり猶之を細論すれば此時フロレンスの久しく獨立して土地の豪族メチー家の支配に歸し傳てローレンツォに至れりローレンツォ生れて慧敏政事に文事に其才衆に超ゆ古學と好むと雖も亦旁ら痛く時文の衰退を歎ず時にフロレンスに先代コスモの世に創立したる學院あり院員を分て三とし第一種を愛顧員と稱しメチー家の香族之に属し次の會員にして府下の名士之に属し次を生徒とすローレンツォの世に及び益々之を奨勵し院中の名士と謀り自ら卒先して伊多利文學を挽回す其の自著の詩文多く世に傳

のり極めて人の賞揚を受く是よりして所謂上之を好めば
 下之より甚しき者あるの理にしてローレンツの下に立
 もの皆其風を欽仰し通俗文を以てダンテの功績を稱賛す
 るもあり詩文を作るもあり伊多利文學勃然として再興そ
 中にモポリチアノ一の如き最も功あり但し此恢復の方法
 の首として雅俗を混化し高尚の爲めに人情に遠ざからせ
 平坦の爲め野鄙に陥らざるを力めたる者なり故に或る史
 家ハ之を評して古方と今情とを調和して伊多利文學を既
 に亡ふるに救ひしハローレンスなり雅体と俗風とを鎔陶
 して其功を奏せしハローレンスなりと云へりローレンツ
 一に引續きマチェツリ一出づ此人亦其才政事文事共衆
 に抜く此頃より第十六紀半に至るまでの實に伊多利文化

發達の期にして諸般の技藝特に文藝ハ全く雅俗協和の美
 功を奏したり
 然るに第十六紀の半よりして西班牙王家に國權を奪われ
 酷政至らざる所なく全く思想言語の自由を失ひ人民の精
 神爲めに殆ど一蕩し伊多利文學再び地に墜つ第十七紀よ
 及び始めて反動の勢を起し特に物理學上に顯れる就中ガ
 リレオハ果敢流暢の文を作るを以て稱せらる遂に地動の
 説を唱へ爲めに死す第十八紀に及び澳地利帝其他の力に
 頼り西班牙の羈輓を免れ文化少しく舊に復すと雖も國
 の分裂ハ猶前日の如く澳を以て西班牙に易たる姿にて前
 門虎と退け後門狼を進むと云ふまでに至らずとも國內各
 處外國人の制御を受くると多きハ一なり然るに第十八紀

の末よりして伊多利一統の論漸く起る而して此業を遂るに一般人民をして昔時羅馬の盛に方て伊多利の獨立一大國たるを知らしめざる可らず普通人民を感動し易き文章と用ざる可らず是により快活悲壯の伊多利詩文復た興る就中アルフォイリーを以て魁と爲す踵でマツヂニ出づ此人亦文章を以て人心を鼓舞し身亦屢々危機を冒す之を我復古の人物に比すればアルフォイエーの東湖の如くマツヂニの松蔭に似たりマツヂニと同時にマンヂニ出づ亦憂國の士として詩文に長ず此時に當り伊多利文字上の言語の始めタスカンより起り己は全國に通ずと雖も普通の言語に至ては各地方猶頗る異同あり殊にビエモン及ロンバードに甚しければ此地方に於ては書上の言語

と口頭の言語と全く異にして隔靴搔痒の歎に堪ざると多しマンヂニ深ク之を憂ひ文字と言語の全く一に歸せざる可らざるの必要を大に主張し自ら詩文を作るに常に此意を用ひ又同士の士と謀り協會と設け雑誌を發行す始め伊多利の一統を謀るもの或は羅馬共和政体の盛時を慕ひ共和政府と復せんと願ふあり或は帝政の盛時を慕ひ帝王政体を得んと願ふあり而して帝王政府と得んとするにサトシニア王と戴くに若くあし故を以て人多く望をサトシニア王に屬す王遂に煥帝の爲めに忌まれ位を去り太子ウオクトル、エマヌエル立つ時に伊多利に一壯士あり名をカヴァールと云ふマンヂニの徒と友たり深く伊多利の分裂を歎し相會すれば則ち吾徒にしてあらば生前必ず何事を

か成すべし」と相語るカヴェール亦能く文章を屬し嘗て新聞を發行して志を四方に訴ふ尋て英佛諸國に遊び議政体の短長を探り歸國して後ち議員に擧げられ辨論を以て顯ゆる王遂に之を内閣に拔擢す是よりしてカヴェール拮据勉勵國事を經營し伊多利一統を計畫と一統の功ハカヴェールの力其多きに居るが故に歐洲近古の人傑と語るもの「前にカヴェールあり後にビスマルクあり」の語あり政事已にカヴェールあり武亦ガルヴルヂーを得て遂にエマヌエルをして伊多利の大部分を一統するとを得せしむ其後ウエニス地方を恢復し又羅馬法皇の權を削り遂に都を羅馬に遷し一統の業其大成を告げ今日の伊多利を成せり全國已に一統に歸すれば全國普通の言語文章を得るの必要ハ益々切

なりカヴェール夙に之を悟り伊多利語書方改良の委員を設けマンチニ一を擧て委員長となせしとあり嘗て之をカヴェール傳中に讀み日本に於ても斯る手段を用ひざる可からざる日もあるべしと思ひしとあれハ猶順序法方の詳を捜索したれども之を見出さざりしハ遺憾なり勿論伊多利の已に一統したりと雖ども王家ハサーチニア王家にしてヒエモン地方に出て文章の首としてタスカニ一又出て而して國都ハ羅馬に在れハ國境內擧て一定の言語文章を得るハ一日の業にあらざれば伊多利學者ハ今日と雖ども猶苦辛已む時なし併し其今日に至るまでの沿革亦以て吾人の模範と爲すに足れり

佛蘭西の言語文章ハ他國に比すれば一定の早かりしと雖

ども仍其今日に至るまで屢々困難を経たると勿論なり
 往古佛蘭西の土言の三大種族の一なる「ケルチツク」語なり
 しが羅馬人の征服に遭ふてより上等の士人の羅馬語を學
 ひ土言の漸く勢力を失ひ遂に始めの都會を去り次第に僻
 遠の地に退けり勿論羅馬語を學ぶと云ふも語格發音の急
 よ熟練し得べき者にあらざれば實の訛轉の羅馬語たると
 猶横濱外國人の日本語支那海岸の英語の如き者なりしと
 思ひ尋で日耳曼地方より「フランク」八種の大攻入に遭ひ
 大に從來の言語に影響す「ケルチツク」語の三大種族の一と
 ひ云へども今の極めて微なる者にて之を純粹に保存せる
 のウエールス蘇格蘭愛爾蘭等の山間僻境に過ぎず「カール
 大帝不世出の才を以て歐洲の大權を握るや學術文章亦大

に其獎勵を受けたりと雖も帝崩後の版圖復た四分五裂
 したると第二編に記する所の如し是よりして「フランク」八
 種の持來たりし日耳曼語の大部分の漸く述と來因河外に
 退く今の佛語の基礎の土民が其頃よりして造出したる者
 にして重に羅馬語に據り少しく交るにケルチツク語日耳
 曼語を以てせり第七紀より第九紀に至て羅馬語法の全く
 腐敗し語尾の屈曲復た其舊觀を留めず始めて今の佛語の
 形又變ず而るに當時地々により多少の小異同ありしのみ
 ならず南方と北方との著るしく其差違を顯ひし二種の佛
 語を出て南方語と「ラングドック」(Langue d'oc)と稱し北方を
 「ラングドオイ」(Langue d'oïl)と稱す二種共に始め歌謠を出し
 尋て文章をも出せしかの佛蘭西全國の言語文章の遂に孰

れは歸する歟の爲め相争ふこと久しかりしが首都巴里の北語の境内に在りしが爲め遂に北語の勝利となれり之と要するに今の佛蘭西語の第九紀より成立を始め第十三紀に至て大概成就し第十七紀に至て大成したる者なり綴字法の如きの其間屢々議論も起り數度の沿革ありし者と知るべし現に十七紀後と雖ども多少の改正を経たり魯西亞の言語文章も僕を知る所を以てすれば同く數多の變遷あり蓋し魯西亞が始めて文化に向ひしは第十紀の末にして此時羅馬東帝國今のコンスタンチノブルより文學僧徒を迎へ教化の端緒を開しと我王代の昔に三韓の學士と入れしと同し第十一紀の始めて希臘字により魯西亞文字を制し土言即ち「スクラフ」語を以て聖教と譯す魯西亞僧侶社會

の文字は猶此体を用也夫れより彼得大帝の世に至るまでの文學上に於ては希臘の勢力盛なりき然るに言語の其間近隣諸國の語多く侵入し來り己に書上に言語と背馳し經文も普通人民にの通せざるに至れり帝の世人の偏く知る如き英主にして非常の改革を行ひ文學上にも文學を改正して今の魯西亞文体を起し學術上の熟語を定然大に通俗文出版を奨勵し魯西亞をして一面目を改めし能たり而るに其後も言語文章の時と共に漸次に變化せしもの第十紀即今百年紀の始に至り時の天子のモスコの聖教會に命し經文新譯を作らしめしこともあり元來魯西亞語の之を學ぶと易からずと雖ども其質の甚た美なる由なれば國語の著述も頗る多かりしが佛蘭西風の闖入に遭ひ名門

貴族の佛書を讀み佛語と談せざるの無く著書も概ね佛語を用ざるなきに至りしが近時に及ての再ひ國語文章を奨勵し著書も再ひ國語を用るもの多しと云ふ
英獨伊佛魯の外に僕未各國言語文章の變遷と搜索するに遑あらずと雖も顧ふに大同小異なるべし殊に西班牙葡萄牙の佛伊と共に羅馬語族に屬すれり其沿革の兩國に髣髴たるべく和蘭丁抹瑞典等の日耳曼語族に屬すれば其變遷の日耳曼に類似せん抑も外國言語文章の變革は我日本の言語文章に直接の關係なければ本考の或の冗長の譏を來そも知る可らずと雖ども其盛衰浮沈の頗る我言語文章の遭遇に似たるあり之を參考に供する固より可なり顧ふに各國既に偉功を困難の間に奏す日本文改革亦豈成功せざ

るの理あらんや詩曰他山之石可以攻玉摸範己に備はる

附録 外務大臣井上伯爵羅馬字會の席に於ての演説
此の羅馬字會と創設せる以來余も亦諸君と共に本會の美
舉たるを賛成して乃ち會員にの加はりぬ然れども會員諸
君と共に斯く同席に相見ることを得たるは今日を以て其
始なりとす扱も羅馬字綴字法の問題に關しては余の前刻
より諸君の高論卓説と謹聽するを得たれども殊に其の初
て聞く所たるを以て議論の因て起る所を詳にすると能は
ざれば余の遺憾なかり茲に自己の考案を提出するを得ず
又輒く提出する事を欲せざるなり左れば此席に於て余は
只々余が本會に加入したる所以を陳述して以て諸君の高
評を煩さんと欲するのみ
今や日本に於て現に使用する文字は(即ち漢字)不便なるが

故に羅馬字と以て之に易ゆべしと云ふの論點の主眼なり
 此の主眼に付きての同席の諸君も余も皆同感の人たると
 敢て余が贅言するを俟たざるなり然るに余が特に一言せ
 んと欲するもの斯く相成る時の吾輩に何程の便利を與
 ふへき乎又後世に何程の裨益を遺すへき乎との結果を考
 量せんと即是なり余が信する所を以てそれば姑く之を大
 別して二個の要點ありとす其第一要點は日本の文辭の不
 規則不確定にして西來の文明と併馳するに適當ならざる
 か故に之を羅馬字に改良して以て文明を銳進せしむべし
 其の第二要點は日本の文辭の學ぶに易あらざるか故に之
 と羅馬字に改良して以て彼を知り己と知らるゝの途を開
 くべしと云ふに在るものあり請ふ先づ其の第一要點に就

て説を爲すべし抑も我が日本帝國が初めて外國に交際を
 開きたるの今を距ると三十三年前即ち嘉永六年を以て亞
 米利加合衆國の使節コモドールベルリ氏が浦賀に渡來し
 て條約を取結びたるに初まる其前に日本全國人民の思
 想の僅に此の一群嶋の内に安息して更に外を顧みず國外
 の事に至りては見たるとも無く又聞たるともなく我が日
 本國の別世界なり我が帝國の別天地なりと固信し其の思
 想と遠く外國の關係に馳すへし杯との夢にだも思想せざ
 る所なりき然るに夫の條約を取結ひたる後に及びての忽
 に此の日本人民の思想をして一大變動を起さしむるに至
 れり其の變動の最初の攘夷論に顯れたる蓋し攘夷すれ
 ば則ち勤王なり勤王せんは攘夷せざる可ならずとて其

の精神を鼓舞したりければ其時よりして日本人民が政治上の思想を作興したると皆この精神にぞ原因したるなり然るに其の攘夷勤王の思想より發生する所の政治上に向て百端の困難を内外に惹起したりと雖も時運の赴く所人心の向ふ所の遂に政体と一變するに至らしめたり是に於て乎日本人民の其の曩に別天地なりと信じたる思想を一變して稍々外國の事物を見るところを得聞くと得て其の見聞を重ねるに従て實に外國の交際の之と親密にせざる可からずと云ふ思想を喚起して遂に今日あるを致せり今日の日本に於て凡る政治法令學術技藝みな歐米諸國の文明に準據せざるもの無し彼の海軍と云ひ彼の鐵道と云ひ彼の電信と云ひ現に吾輩が使用する所の事物に至るま

て其の模範の皆一に歐米各國に由るにわらずや斯く外國と通商を盛にし斯く外國と交際を親くしぬる以上の其の事物の交換に止まらずして須く其の事物の作用と研究せざる可からず其の作用を研究せんには必らず其理を講窮せざる可からず其理と講窮せんには耳もて聽き目もて視る而已に止むべからず之を傳通するに文字を使用するの必要を起すに至るものなり斯く歐米の文明事物を我國に輸入するに當り電信あり鐵道なり凡の從來日本に其の事物なければ其名も無きを以て新に其名を下さざる可からざるに日本の文辭の前にも演べざる如く詞の足らず意味の備わらざれば迎も適當の名を其新事物に下すと能はざれば己を得ず外國の辭を假らざる可からず然るに其の假

る所の支那よして即ち往々之を假りて今日の新事物に其の譯字を付するものありと雖ども原來この新事物の支那にて曾て無き事物なれば其の熟語も無し偶々類似せるものありとも其意味を適當に表するに足らざれば又已を得ずして新に種々の熟語を製造して僅に其辭となすか故も新事物の夥しき一一之に文字と付し難きもの往々是ありとす近き例の此の品をば或の玻璃盃と譯し或の透明器と呼び又或のガラスとも書く其の文字上にては如何なる品にて如何なる用に供すべきも(一)たるを解すること能はずとも其の實地を一見すれば輒ち其の水呑コップたるを知るべしと雖ども是れ有形物に於て然るのみ彼の無形物に於ては則ち然らず苟も思想上にのみ存立するの事物に至

りては聊にても其の名稱の用語用字に誤まりて以て適當の意味を表示せると能はざる時の遂に他人をして其の何事たり何物たるを覺ること能はざらしむるの恐あり現も今日我國に於て新に採用する所の文辭の其の適當の意味を表示せざるもの蓋し一にして足らざるなり之を今日に制するの道なくば余の其の不便利の底止する所を知らざるなり我國今日の情勢たる斯の如くに外國交際の刺戟を受けて文明の進歩の日を追て鋭疾なるに隨ひ新事物の益々相踵て我國に輸入し來るの勢の然らしむる所なりとを然るに我が國民が其の新事物に名稱を下すも當り各々勝手次第なる文字を用ひて各々適當の意味を表すること能はざる時の名實の間に相違を生ずるもの續々出現して

將來に如何なる結果と生せん乎測り知る可らざるあり
 思ふに將來の益々文辞上の煩雜を増加して遂に後世の學
 者をして此辞の何と云ふ意味を示すものなるが此辞に
 數種あるが孰も適從すべきかなど一字一句の爲に其の
 意味を穿鑿するに非常の苦心を要するならん加之文字の
 難易の一國の經濟に於て多少の關係ありとす凡そ子弟が
 學問を修業して其の智識と發達するに當りて第一に其の
 修業發達の媒たる文辞に於て直に其の意味を充分に明瞭
 にする事を得ざる時先づ其の文辞を知り其の意味と解
 するが爲に空しく貴重之光陰を費さざる可からず元來學
 問の自己の事業を遂る爲の利益よりする者なれば其の學
 問を成す爲の豫備として先づ文辞の事に多少の時間を徒

費するは是則れち事業を爲すに其の時間を徒費せると一
 般なり經濟の本理に背くの極なりと云ひざる可からず且
 つ今日の如く外交日を逐て繁密に至る以上の我日本國の
 前途の如何になるべき乎を考へよ今日の如き不便利な
 る文字と使用する限の逆も我日本をして東洋の中にて一
 の歐米文明國に同じき地位を保さしむるを得ざるべし是
 れ蓋し余か過言に非ざるなり何となれば一國の進歩を企
 圖するに其の學問を以て第一なりとするは其學問に困難を
 與ふるの進歩に困難を與ふるの實あればなり左れば彼の
 歐米の文物を移し彼の歐米の學問を勸むるの方便を計る
 の必要なるを知らず何ぞ學問の爲に進路の荆棘を去らざ
 る何ぞ學問の媒たる文字を改良して之を坦易ならしめざ

る是れ余が我が日本人民をして無用の時間と困難なる文字の學に徒費せしめざらん事を冀ひ本會の主眼を賛して以て普く歐米文明諸國に行ゆる所の文字を日本に移さん事を欲する所以也

余は是よりして第三要點たる彼を知り已を知らるゝの要を説くべし今や我國の人民にして外國語即ち英吉利語若し佛蘭西語若し獨逸語を解し其書を讀みて歐米の事情を知る人に乏しからず又歐米諸國に歴遊して親しく之を見聞せる人も少らざれば歐米の文物制度より氣質慣習に至るまで凡し其通曉する所となりて既に彼を知るを得たり然るよ之に反して已を知らるゝ事の如何にと問ふんに歐米諸國に日本を知らるゝの實は蓋し甚だ稀なり其の然

る所以のものに已を知らるゝに甚だ困難なればなり左れば一步を進みて如何にせば歐米諸國の人をして我を知らしむるを得べきかと云ふに他なし歐米諸國の人にも讀み易く又解し易き文字を我國に造出せに在るのみ抑も歐米諸國の我國に於ける東西に隔離して猶ほ殊域の思を爲すを以て我に於ては何程に我國の有様を知らしめんと欲するとも苟も之を知らしむるの方便と欠きては決して行へる可きとに非ざるなり試に歐洲の或る地方に於て日本との如何なる國かと問へ或は日本の支那の屬國なりと思ひ或は朝鮮の一部落なりと考ふるが如き妄想と懐くもの無きにしもあらを喩ひ我れ一個の寶玉を所藏すれども世人の我が所藏する事をも知らず其の寶玉たるをも知らず又

曾て其の寶玉を目撃するとも無きとき、其の貴重なる寶玉と雖ども瓦石も同様にて實に其の貴重なる効用を受ると能はざるが如し故に外國人をして日本の物産に、斯の如き物あり其の地理、斯の如し其の風土人情、云々なりと細大どなく之を詳悉せしむる時、我が國柄の如何なるも都て外國に知らるゝと得べし是に於て、初て外國と對等の交際と爲すに至るべきなり然らば則ち彼を知り已を知らるゝの方便、即ち羅馬字を以て日本の辭を綴り彼をして讀易く解し易からしむると最も其捷徑なるべしと余の信するなり而して余が羅馬字會を加入したる所以のもの、實に此の二要點に在り去りながら羅馬字採用の問題の一大事業なれば或は其の二十年間若くは三十年間に未

だ目的を達し得べらざるも知り難けれども諸君と共に之を賛成して以て全國一般の問題たるに至らば余が陳述の目的も亦早晩達するの利益を見るに至るべきなり終に臨みて余の本會の一問題として愚案を提出すべし願くは他日の討議に付せられよ余が考案にては文字を綴るの論、姑く之を第二着に譲りて先づ第一着に文法書を編纂するとは是なり文法書の編纂なるべきは文字の綴方の敢て左のみ困難からざるべき歟諸君次會に於て之を討議に附せられなれ余の實に幸甚なりとぞべし

日報記者の説

井上伯爵が嚮日羅馬字會に於て與へられたる演説の中に彼を知り已を知らるゝの要を説かれたり其の略に「今や我

國の人民に外國の語に通じ外國の書を読みて歐米の事情を知るの人に乏しからず又歐米諸國に歴遊して親く之を見聞せる人も少なからざれば歐米の文物制度より氣質慣習に至るまで凡の其の通曉する所とありて既に彼を知るを得たり然るに之に反して歐米諸國に日本を知らるゝの實の甚だ稀なり試に歐洲の或る地方に於て日本といふ何なる國かと問へ或は日本の支那の屬國なりと思ひ或は朝鮮の一部落なりと考ふるが如き妄想を懷く者無きにしモあらず此歐米諸國の人をして日本の物産より斯の如き物あり其の地理の斯の如し其の風土人情の云々なりと細大となく之を詳悉せしむる時の我が國柄の如何なるも都て外國より知らるゝ事を得べし是に於てか初て外國と對等

の交際を爲すに至るべきなりとい申されたり其説の畢竟羅馬字會の爲にせる學問上の演説なりと云へども又以て移して我國中外の關係を視るに足るべし依て吾曹の此の要旨に付き聊か所見を開陳するの自由を得んと欲するなり
 我が日本人民の歐米の文物制度より氣質慣習に至るまで凡の之を通曉して既に彼を知るを得たりと申されたりと果して其言の如くなるや否や吾曹が論究すべき所なり抑も井上伯爵の此言を發せられたるの日本人が歐米の事を知ると歐米人が日本の事を知るとの二者に就て其淺深厚薄を比較ありてのとなれ我の既に彼を知れども未だ彼に知られざるの實証を擧て以て伯爵が言の適當なるを徴

するに餘ありとすれども是れ畢竟知と不知の間にて其の多少を比較して然るのみ若し比較の想像と離れて單獨に日本人民の歐米の文物制度より氣質慣習に至るまで凡の之を通曉して既に彼を知ると得たりや如何と問ひ伯爵と雖とも直に之を然りと斷言せられざるべきなり蓋し伯爵の演説ハ羅馬字會の總會に中外の會員みな來集ありける席にて與へられたる者なれば其の場所柄と云ひ殊よハ大臣たるの地位に於て是程の言語あるハ論趣に主客の別を立る爲にも又會員及び貴紳學士に對して禮意を表せらるゝ爲にも必要なりと思はるれば吾曹の當に此言を過譽なりと云ひざる而已ならず伯爵の地位にてハ斯であるべき事なると云ふに外あらざるなり然れども今や吾曹

ハ一步を進みて彼我を比較するの想像を離れて單獨に日本人民の歐米の文物制度より氣質慣習に至るまで凡にも之と通曉するか如何と考察せば其未だ彼を知るを得るの場合に至らざるを嘆息するものなり顧るに維新以來上下をな銳意して歐米の事を知るに勉め殊に政府の頻に歐米の文物制度を採取し政治に法律に文學に擧て彼に則らざるハなければ今日の日本の嘉永安政年間の日本に非ず維新以來十有八年の星霜中に全く日本の天地を一變したるの觀われハ俄よ之を見れば日本人民の復た彼と知らずといふべからざるが如くなりと雖とも吾曹ハ未だ凡そにも之を知るを得るの場合に至らずといふハ果して之れと知らざるの實あるが故なり試に之を証すれば畏こくも 聖

上にの昨年十二月二十三日内閣総理大臣に下させ玉ひし
 詔勅中に中興の政一たびの進み一たびの退くべからずと
 勅らせ玉ひたるよ非ずや斯く勅させたるの蓋し其の大御
 心に中興の政に於て一たびの進み一たびの退きし事ありと
 思召させ玉ふ所あるが故なるべしと恐察し奉らるゝなり
 抑も歐米の政の一たびの進み一たびの退くが如きことあ
 るべからず進めば必ず退かざるを以て常とするに我國
 に於ての一たびの進み一たびの退くが如きとあると免
 れざるの蓋し其の歐米の制度文物を採取するに未だ深く
 彼を知らずして之を移その弊なきに非ざりしが故なるべ
 きなり政治上の事の姑く措き其の最も見易きものを擧て
 之を證それバ例の衣服の如き歐米の氣候家屋に應

ずるの服なるに日本の氣候家屋の彼に異なるを知らずし
 て洋服と着すればこそ果して不便に堪へざるの思あるな
 れ例バ家屋の如き歐米にの日本の如く雨降らざるを以て
 勾配も低く庇も短き家にて適當なれども日本にの霖雨連
 旬又渉る事もあれの大雨水軸を流す事もあるに之を知ら
 ずして歐洲風の家屋を建築すれば雨天にの窓を開くこと
 能ひざるが如きの不都合あり是れ吾人の既に之を實驗せ
 る所にして即ち日本人民の未だ深く彼を知らざるの實證
 なりと言ひざるべからず政治上の事に至りても亦然り例
 ば英國に佛國に日耳曼に其の制度の皆な其の歴史よりせ
 ざるばなく之を概言すれば歴史の之が制度を成せしもの
 にして理論の之が制度を成せしものに非ざるなり之を

言換れば國民の氣質慣習の此の制度を爲せしものにして
 氣質慣習の歴史の然らしむる所なりと言て可なり然るに
 日本の論者の之を知らずして英を喜ぶもの、英國の政体
 の如くならざるべからずと言ひ佛を好むもの、佛の制度
 の如くせざるべからずと論じ獨逸を喜ぶもの、獨逸の法
 度を採用すべしと議し更其の政体制度の歴史より來りた
 るを顧みざるの未だ全く彼を知らざるが故ならずして何
 ぞや既往を顧れば政府に於ても或は深く彼が制度の淵源
 を究めずして輒く之を採用せられたるの状なき能はざる
 べし斯くての勢ひ方底圓蓋の思なき能はずして却て退歩
 の累あるに至る是れ蓋し聖上が中興の政一たびの進み
 一たびの退くべからずと勅らせ玉ひし所以なるべくして

政府の最も今後に慎まるゝ所なるべしと思はるゝなり然
 るを論者尙ほ之を顧みずして漫りに其の好む所に依りて
 直に其制度を我に移さんと冀ふもの滔々として皆な然
 り然らば則ち吾曹が日本人民の未だ歐米の制度文物より
 氣質慣習に通曉せざるのまならず凡にも彼を知るの場合
 に至らずといふの敢て過言ならざるを知るべきなり
 識者往々之が説を爲して曰く日本を利するものも歐米の
 制度文物にして日本に禍するものも歐米の制度文物なり
 といへり此言或は然らん然れども吾曹を以て之を觀れば
 是れ敢て歐米の制度文物の日本に禍するに非ずして之を
 採取するもの其宜を得ざるが故なり故に今後勉めて日
 本の歴史と道理とを折衷し其の道理に近くして歴史に背

か○ぎ○る○も○の○と○探○取○せ○ざ○る○べ○か○ら○ず○單○に○曆○史○に○の○ミ○偏○倚○し○
 て○道○理○を○顧○み○ざ○れ○バ○日○本○の○進○步○と○得○る○こ○と○能○ハ○さ○る○の○畏○
 あり○單○に○道○理○に○倚○り○て○曆○史○と○外○に○す○れ○ば○大○に○日○本○に○禍○す○
 る○を○如○何○せん○其○二○者○中○を○得○て○道○理○に○も○戻○ら○ず○曆○史○に○も○背○
 か○す○し○て○こ○ろ○始○め○て○一○方○に○ハ○日○本○を○進○步○せ○し○め○一○方○に○ハ○
 日○本○を○安○固○な○ら○し○む○る○を○得○べ○き○な○れ○之○と○顧○み○ず○し○て○單○に○
 道○理○に○の○み○偏○倚○し○日○本○の○曆○史○如○何○を○問○ハ○さ○る○も○の○ハ○音○
 彼○を○知○ら○ざ○る○の○み○な○ら○ず○我○を○も○知○ら○ざ○る○の○徒○な○り○と○い○ふ○
 べ○き○の○み○

文章改良の目的

羅馬字會と設けて日本語を綴るに羅馬字を以てすべしと
 企て假名會を設けて日本文と書くに假名文字を用ふべし

と謀ると其の書様にこそ差別のあれ其の目的とする所の
 漢字を使用するの徒勞を省きて以て文章を簡易ならしむ
 るに在ると勿論なりと知らる是れ吾曹が常に此の改良に
 賛成を表する所以にぞある已に頃日羅馬字會の總會に於
 て井上伯爵の演說せられたる如く漢字の運用の當に今日
 の文明事物と表するに適當せざる而已ならず爲に意味を
 誤り主趣を害するの恐あり其上にも學問に志すものが先
 づ漢字と習ひ覺ふる爲に多少に歲月と要するか尤も經濟
 の原理に背く事なれば之を廢して代るに羅馬字を以てせ
 ざる可からずとあるハ實に至當の説なりと云ふべし畢竟
 羅馬字會の目的とする所の決して之に外ならざるべきの
 み此の目的を以て漢字の使用を廢せんハ先づ漢文の文

体○を○止○め○先○づ○漢○語○の○使○用○を○減○す○る○を○以○て○第○一○の○手○段○と○な○
 さ○る○可○ら○ず○苟○も○今○日○の○如○く○盛○に○漢○文○体○を○書○き○専○ら○漢○
 語○を○用○ふ○る○有○様○に○て○の○數○百○年○と○經○る○と○も○吾○曹○の○羅○馬○字○若○
 く○の○假○名○文○字○を○日○本○一○般○の○文○書○に○專○用○す○る○の○期○な○あ○る○べ○
 し○と○恐○る○る○な○り

今日○は○使○用○す○る○文○章○の○吾○曹○が○曾○て○分○析○し○て○論○じ○た○る○如○く
 第○一○種○と○假○名○交○り○の○漢○文○と○し○第○二○種○を○漢○字○交○り○の○和○文○と○
 す○第○二○種○の○使○用○の○敢○て○稀○少○な○り○と○云○ふ○に○非○ざ○れ○ど○も○凡○
 ろ○法○律○命○令○を○初○と○し○官○用○文○書○。○訴○訟○文○書○。○學○術○文○書○其○の○他○今○
 日○の○社○會○に○行○い○る○の○文○章○の○概○ね○第○一○種○は○屬○せ○ざ○る○の○無○
 し○吾○曹○が○漢○文○体○と○云○へ○る○もの○即○ち○是○な○り○原○來○こ○の○文○体○の○
 漢○文○に○出○て○往○古○の○純○乎○た○る○漢○字○と○用○ひ○た○れ○ど○も○其○の○困○難

なる○の○爲○に○次○第○に○進○化○し○て○文○字○の○位○置○を○顛○置○し○之○を○助○く
 る○に○日○本○語○を○以○し○遂○に○漢○文○を○譯○讀○す○る○通○り○に○書○と○倣○し○た
 る○もの○な○り○(例○は○大○學○之○道○在○明○明○德○と○す○る○と○大○學○ノ○道○ハ○明
 德○ヲ○明○ニ○ス○ル○ニ○在○り○と○書○く○が○如○し○去○れ○ば○此○体○の○文○章○の○時
 運○に○從○て○如○何○も○變○化○す○る○と○も○其○の○本○体○の○漢○文○体○た○る○に○至○り
 て○の○今○日○ま○で○敢○て○變○化○を○受○け○ざ○る○を○以○て○吾○曹○が○視○る○所○に
 て○の○依○然○た○る○漢○文○体○と○云○い○ざ○る○を○得○ざ○る○を○り○此○の○漢○文○体
 即○ち○漢○文○の○漢○字○と○使○用○し○て○こ○そ○吾○曹○も○漢○學○し○た○る○力○よ○由
 て○漸○く○之○と○解○さ○る○を○得○る○な○れ○若○し○其○の○漢○字○と○奪○ひ○去○り○て
 之○に○代○る○に○羅○馬○字○若○く○の○假○名○文○字○と○以○て○せ○ら○れ○て○の○恰○も
 西○洋○字○も○て○支○那○語○と○書○き○た○る○と○讀○む○は○異○な○ら○ざ○れ○ば○一○字
 一○句○ご○と○に○多○少○の○思○慮○を○費○し○て○其○の○原○語○を○兎○や○角○や○と○考

へ出して之を判讀せざる可からず其の不便なるハ漢字と
用ふるものよりも甚し是れ漢字と廢するの說に動もすれ
バ反對の多く良しや反對せざるも實行し難かるべしと云
ふものゝ多き所以なり之を證する爲に吾曹試よ一例を左
に示さん(羅馬字と用ふるも假名を用ふるも同様なれば茲
には姑く片假名を用ふ以下之に倣ひ又假名の遣ひ方もわ
ざに羅馬字會の法に倣ふものなり)

メイシ ヌチン ショクインレイ オ サダメ 六シヨ一 オ
オキ ナオ ダイホ一 ノ セイ ニ ヨツテ ダイシヨ一カン
オ モツテ ショシヨ一ノ カンシユ トシ ショシヨ一 オ モツテ
レイヅク ノ アンカン トス コレヨリ シテノチ ショシヨ一
ワ モツバラ シレイ オ ダイシヨ一カン ニ アオギ ダイシヨ

一カン ワ ヒ オ クダシテ シヨ一 セシメ オヨソ ブンシ
ヨノ シヨ一ツ一 スルモノワ ミナ ダイシヨヨカン ニ ケイユ一
シテ オ一フク ノ アイダ シヨ一 ノ リヨ一 ニ オケル
ニ ヒトシ

右の如く書き倣したる文章も羅馬字にてハ何の意味なる乎
を判讀するにハ先づ之を判讀するに十分なる漢學ありて
加ふるに十分なる敏捷の才智を有せざれば叶ふまじき事
なるべし尋常の人に取りてハ之を判讀するの難きハ齊明
紀の童謠を判讀するよりも難かるべき歟是れ他なし其の
漢文体を其儘に假名書にせるが故なし蓋し右の文ハ

明治二年定職員令置六省仍依大寶之制以太政官爲諸省
之冠首以諸省爲隸屬之分官自此而後諸省專仰指令于太

政官太政官下批施行凡文書之上奏者皆經由太政官往復之間均省於寮

とあるべき漢字をば

明治二年職員令ヲ定メ六省ヲ置キ仍大寶ノ制ニ依リ太政官ヲ以テ諸省ノ冠首トシ諸省ヲ以テ隸屬ノ分官トス此ヨリシテ後諸省ハ專ラ指令ヲ太政官ニ仰ギ太政官ハ批ヲ下シテ施行セシメ凡ソ文書ノ上奏スル者ハ皆太政官ニ經由シ往復ノ間省ノ寮ニ於ケルニ均シ

斯く假名交りの漢文体に書做したるものなれば其の文字を見てころ儲の云々の趣意なりとの解せらるゝなれ然ると其儘に假名書しての争でか之を解するの方便を得ん今

や羅馬字會の爲す所を見るに果して之に類する所なしとせざるより頃日發兌羅馬字雜誌第九號に
ローマシカイ フクソクと題して

シムイン ナ センキョー スル ニ ワ、 一イン タルコト ナ
ホススル トーキョー シューキョノ カイイン マイチン イチガツ
サソジョー イチ ニチ マテコ ミツカラ ソノ ナ チ カンジ
エ モーシ コミ、カンジ ワ コレナ センコク カイイン ニ
コーコク シ、云々
シシ ノ ホーコク オヨビ ツノ タノ ショブパン モノ ワ
シムイン シツカイ コレナ タントー スベシ

などゝ見えたるが是の先に引例せしほど六ヶしくの非ざれども是とて之を一讀して

事務員と選舉するに一員たるを欲する東京住居の會員毎年一月三十一日迄に自から其名を幹事へ申込み幹事の之を全國會員に廣告し云々
時々の報告及び其他の出板物の事務員悉皆之と擔當すべし

と其心に譯讀するもの一ト通り漢文を心得たるに非ざれば能のざるべし試に漢學なき輩に之と示して其の趣意の如何と問へ之を解するもの十の一もあらざるべしと思ふなり是れ其の用字の羅馬字なれども其の用語の漢語なり其の文体の漢文なればこゝ斯る不便のあるあり若し其の用語を日本にし其の文体を日本にせば羅馬字假名字の便を見て其の不便を見ざるの論を俟たざるなり其證の

同號の中に伊呂波文庫の抜き書と題せる中に

コヘイモヒザチスリヨセテ、モリシシユーベイサン、オマエ
ノスジョーチシリマセテバゴシソクサンノホンシヨモ
ロクロクトキキマセヌガ、オトトイハジメテカタキウチノウ
ワサトトモニウケタマワレバ、ゴシソクサンモドローイノチュ
ギトオアカシナサレタダイジノホンシヨ云々

ともものせるの苟も日本語に通じ羅馬字と讀み得る程の人の容易に解するを得べきなり是れ吾曹か所謂第二種の文体即ち漢語交りの日本文たるが故なるのみ尤も羅馬字の綴り方に付きての吾曹も頗る其意と得ざる廉々あれども夫の第二段に置き一方にての漢字の不利なるを嫌ひて之を廢し代るに世界に通用の廣き羅馬字を用ふべし用ひざ

る可からずと奮發しながら其の會員の機關たる雜誌に於ても亦ろの會員の文書に於ても常に漢語を用ひ漢文体を用ふるに慣れて之を廢滅するの勇斷に乏しきが如き抑も吾曹が憾とする所なり例ば

ハルサメニ シツポリ ヌルル ウグイヌノ ハカゼニ ニホフ
ウメガカノ

と書くにハ羅馬字にても假名字にても日本人を普通して其意を解するに易く春○雨○に○し○つ○ほ○り○濡○る○黄○鳥○の○羽○風○に○匂○ふ○梅○が○香○の○と書けるよりも勝れると萬々なれども

シユジン、アイシラズ、グーザ リンセン ノ タメナリ、マンニ
シユチ コーチ ウリヨール ナカレ、 ノーチュー、 オノツカラ、
セン アリ

と書かれてハ其字ハ世界普通の羅馬字たりとも誰か主人不相識偶坐爲林泉漫莫愁沽酒囊中自有錢と云へる唐詩の意と解するを得んや故又曰く漢字と廢せんハ先づ漢文の文体を止め先づ漢語の使用と減ずると以て第一手段と爲さざる可からざるなり

本編文章論ハ末松君ノ著述ニシテ日本文支那文羅馬字文等ノ長短得失ヲ辨論シ簡易ナル新式ノ綴字文章法ヲ明示シ之ニ内閣總理大臣伊藤伯ノ題辭東京學士會院學士川田翁ノ論評ヲ加ヘ且ツ其參考ナル歐文沿革考及井上伯ノ演說日報社ノ社說等ヲ附載ス各々其許諾ヲ得且ツ校訂ヲ加ヘテ之ヲ世ニ公ニス世人之ヲ讀マハ日本將來ノ綴字文章法ニ於テ思ヒ半ニ過ギン

明治十九年十一月

茂堂誌

八十五頁四行	七十八頁十行	六十四頁十一行	五十九頁十二行	五十三頁十二行	五十壹頁六行	四十六頁壹行	四十三頁評語中	四十二頁九行	四十頁九行	三十四頁十二行	三十二頁二及七行	三十壹頁十壹行	三十壹頁六及十行	二頁 四行	場所
あ	子	留	へ	な	不都	文	上文點	なら	に	る	がた	と	がた	る	誤文
な	字	止	え	術	不都合	支	上文句點	のそ	は	術	つが	と	つが	術	正文
八十五頁十一行	八十四頁十一行	七十四頁六行	六十三頁十行	五十四頁三行	五十三頁十一行	四十七頁壹行	四十五頁評語中	四十二頁九行	四十二頁三行	三十九頁六行	三十二頁九行	三十二頁五行	三十二頁二行目	二十六頁八行目	場所
いたりく	に	功	大功	ま	ん	に	潦	載	なし	がた	を	と	うた	す	誤文
イタリク	く	切	大切	術	み	は	源	乗	あらん	つが	も	ば	つが	する	正文

1151



出版
發兌

東京文學社

東京日本橋區本町
四丁目十六番地

小林義則

滋賀縣土族

東京牛込區若宮町
三十九番地

川田剛

東京府士族

東京京橋區築地
二丁目五番地

末松謙澄

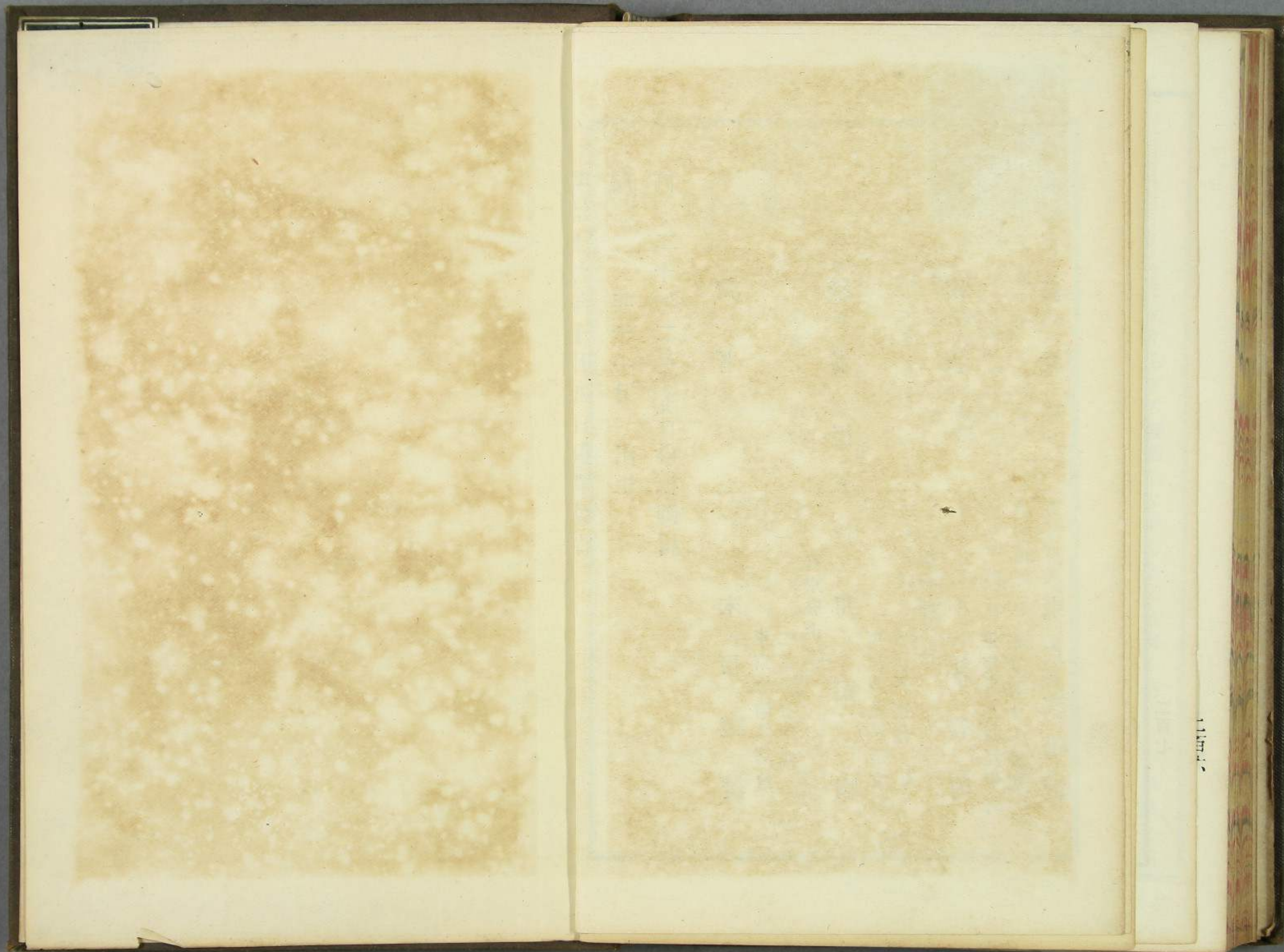
評者 從五位

著者

明治十九年十月八日板權免許
同 年十一月 出版
同 二十年二月十九日再板御届

歐文沿革考正誤

百三十九頁六行 百四十壹頁八行 百六十五頁六行 百七十二頁一行	目的 ハ と と	目的と は と と	百三十九頁六行 百四十三頁九行 百六十九頁八行	讀者と と 々	讀者 と と 方
八十六頁十二行 九十三頁十二行 九十八頁三行 百七頁十行 百十三頁七行目 百十八頁二行	園 さ 人ニシテ 接接 を ばあちくる	園 人ニシテ 接續 と パーチクル	八十七頁一二行 九十四頁三行 百七頁五行 百九頁十一行 百十六頁五行目 百十九頁六行	園 重 橋 時 べくの 接	園 重きや 橋を 特 べく 接



1 1111 1

一誠堂書店
東京穴井町

吃
手

11111